

投稿誌

わいふ

299



グラビア●わが家の歴史写真 — 高松恭子さん

特集●私の出会った奇人・変人

新連載●太郎と次郎

特別寄稿●新山姥物語

特別寄稿●視覚障害者との一期一会

特別寄稿●ハイヒールはいてつま先立ち



21世紀母親研究所 講座のご案内

1. 家族カウンセラー養成

アドラー心理学による家族カウンセラーの養成講座です。この講座では家族を援助する技術を学び、家庭内の問題を援助するカウンセラーの養成を目的としています。家庭や学校における子どものあらゆる問題行動に対し、有効な援助を具体的に習得できます。アドラー派の理論と実技を学び自分自身あるいは社会の人々に貢献できる技術を身につけます。

日時：2003年
1/25・2/8・3/8
4/12・5/10・6/7
7/12
(全土曜日・28時間)
13:00~17:00

費用：50,000円
(テキスト「家族カウンセラーの技法」3,000円をご購入下さい)

2. CoSMoS (親子・職場・地域に活かす人付き合い)

子どもが心身共に健やかに成長するために、親・教師・保育士など子どもに関わる人々がどのような姿勢で子どもに臨んだらいいのか、アドラーの理論を基にロールプレイ・話し合いを中心に具体的、実践的に学びます。

日時：2003年
1/24, 31
2/7, 14, 21, 28
3/7, 14, 28
4/4
(全金曜日・20時間)
10:00~12:00

費用：42,000円 (テキスト・バインダー含)

3. WINGS (智慧と知性を楽しく伸ばすセミナー)

親子関係・職場の関係・知人・サークルの仲間関係等、社会の中で交わっている以上コミュニケーションは不可欠です。この講座では、このコミュニケーションの中で最も重要な「聴き方・話し方」を子どもとの関係を中心にプログラム化しました。

日時：2003年
2/4, 18, 25
3/4, 11, 18
(全火曜日・12時間)
10:00~12:00

費用：36,000円 (テキスト・バインダー含)

会場：街づくりハウス「アキバ」
千代田区外神田1-7-1
Tel 03-5256-9191

講師 坂本 洲子 (さかもと くにこ)



21世紀母親研究所 代表
上級教育カウンセラー
心理療法士

*お申込・お問い合わせ

21世紀母親研究所
〒181-0013
東京都三鷹市下連雀3-1-2
Gフラット302
T&F 0422-44-8702

わいふ

読んで書いて、
みんなで作る

わいふ

読んで書いて
みんなでつくる

299号

目次

デザイン／宮塚真由美
表紙イラスト／小林正子

イラスト／ 荒田ゆり子
イシノフミ 大場美穂
小沢恵子 カステラネンコ
栗田笑 弘法堂建二
佐伯和泉 佐藤瑞江子
西宮さき 橋本美智子
広瀬のりこ 箕輪絵衣子
渡辺美帆

4

わが家の歴史写真
父母が大切にしていた
ささやかな幸せ

奈良眞生駒郎 高松恭子さん

写真提供・文／高松恭子

10

特集 私の出会った奇人・変人

A氏は奇人？ 狂人？ 中松ミナ子

15

エッセイスト・クラブ

布施幸子・遠山智鶴子・青島典子・大野風子

24

新連載
太郎と次郎

山田とも子

66

あなたへスマツシユ

鈴木貴子・本間美恵・高松恭子・布施幸子

71

読んでよかった 柴尾恵子

72

ハイヒールはいてつま先立ち①

中田慶子

——地方議員としての八年間——

80

ズバリ一言

田口恵子・石井みち

84

恐怖のミニミニトレッキング

馬場紹美

90

ことばでハッピー

佐分姫子

92

フリートーク

和田美代子・神定黎子・大川まり子・チコちゃん

花岡京子・田川哲子・岡田美幸・祥 まゆ美

仲里貞子・伊藤琴子・武藤徳子・島村君子・福島みさを

林 直美・山田千津子・家守恭子・大沢陽子

124

おしらせ

「わいふ」三〇〇号に向けて

家族のスケッチ

田中慶子・山名孝香・加藤智恵子・三枝きよみ
瀬谷栄子・砂原富美子

読んでよかった

鈴木美樹

サンタクローズを永遠の存在にする方法

柳沢順子

笑える！

松本とみよ

新山姥物語①

植竹佳恵

——下野八溝山系の暮らし——

パソコンワールド

岡島奈央

視覚障害者との一期一会

安原みどり

読んでよかった

田口香織

ラジオで感じる国、アメリカ

嗟峨久美子

ブック情報

読んでよかった

松井真帆

私の意見・あなたの意見

村田由香里

コミック これが子供の生きる道31

栗田笑

子育てフォーラム ●NMSのページ●

みわママ・由美あき子・石井しのぶ

私もひとつと

清水美登子・山名孝香・由美あき子・村田裕美
布施幸子・鴨川典子・みわママ・トト安田・祥 まゆ美
安村豊子・伊藤てる子・山橋ゆり・永田道子・森野樟子
瀬谷栄子・花岡京子・林 直美・太田啓子・日比野都
真野由美子・白井優子・橘 乱花・渡辺早苗

コミック 毎日が平日 海砂

情報コーナー

スタッフから
募集します
編集だより

わいふインフォメーション
投稿のままり

お友だちにわいふを
バックナンバー

147
149
152

31
79

127 70

150 148

父母が大切にしたささやかな幸せ

奈良県生駒郡 高松恭子さん



23歳の父、昭和16年



父母は本当に仲がよかった
昭和19年9月（ハルビンにて）

父27歳、母20歳、昭和20年4月



母の両親、昭和19年3月



今年、五十歳になった。半世紀をふり返って自分の人生に何と両親の生きざまが強く反映していることだろうと思う。

両親は戦争たけなわの昭和十九年に結婚した。当時、満州で仕事をしていた父について十九歳の母も満州に渡った。嫁入り道具はすべて実家に残し、荷物はトランク一つと父に買ってもらったアコーディオンだけだった。

翌春、父が召集され済州島で敗戦を迎えた。一人残された母は奉天で敗戦を迎え、ソ連兵の暴動に青酸カリを持って逃げまどったという。兵士が母のアコーディオンをかつさらって嬉しそうに出て行くのを屋根裏から硬直して



第一回むつみ会、昭和32年

2人はこの17年後に
再会、結婚した



母の姉妹。小柄な長姉が
つま先立ち。見事な連携介
護で両親を家で看取った。
みなわいふを読んでいます

右の写真から44年後の姉と義兄

眺めていたそうだ。そして父の生死も家族の生死もわからぬまま一年後に帰国した。

実家は焼け、父親（私の祖父）は事故で片腕をなくし、すぐ上の兄は沖繩で終戦直前に戦死していた。それでも母より四か月早く帰国した父と再会、無事を喜び合った。

無一文になった父は、満州時代の友人と九州で仕事を始めたが、生活は楽にはならなかった。そのころの友人の息子と幼い姉の写真がある。幼い二人は十七年後に運命的な再会をし、その五年後に結婚した。父はサラリーマンになり、一家はつましい暮らしをしなから父方の祖父母と同居の六人家族だった。

幼いころの楽しい思い出の一つに母方の親戚が、伯母の家に全員集まる「むつみ会」と名づけられた集いがある。娯楽もなかった時代だから皆よほど楽しみにしていたのだろう。写真はどれも楽しそうに笑っている。年一回のこの日を祖父母も母も子どもたちも首を長くして待ったものだ。





祖父母の金婚式で12人の孫全員集合
左から2人目が私。昭和36年

祖父母の金婚式に孫十二人が年齢順に並んだ写真がある。残念なことに事故と病気で二人が欠けた。親の苦勞、子の苦勞、離婚、死別、病氣など様々な経験をしながら、皆それぞれいい生き方をしていると思う。私たちの小さな幸福の原点が、幼い日に楽しい幸せ



2人そろえばこの笑顔
あ～あ 伯父の葬式なのに……



姉とは大の仲よし。今も週3回いっしょにプールへ通っています
昭和33年

なときを共有したところにあるように思えるのだ。とにかく、父方も母方も親戚は仲がよかった。母は同居の祖父母からとても大事にされていた。私が物心ついたころ、父はオルガンを買ってきた。母は夢中になって弾いたものである。テレビさえなかった生



27年後に同じ曲を連弾。
これを機会にピアノのレッスンを再開。毎年一曲連弾しています



中学生のころ
姉と初めて連弾

活の中でこのオルガンは私たち姉妹に音楽の喜びを与えてくれた。
父は四十代初めに会社を辞め、自分で株式会社を作った。それから数年は母も仕事を手伝い、大変なやりくりの中で生活した。そんな中で母は夜遅くまで内職をしながら今度はピアノを買



3人のひ孫と父と愛犬と



子ほんのうな父のまわりにはいつも子どもが集まってくる
(トルコ、イズミール駅にて)



いつまでも笑顔でカメラの前に立てる
夫婦でありたいと思う



ランニング仲間と夫(前列右はし)
いちばん幸せそうな顔、24時間リレーマラソンで

つてくれた。私たち姉妹は五十歳を過ぎた今もピアノを練習し続けている。父の仕事も軌道に乗り生活も楽になったころ、姉も私も結婚した。病気で私はずいぶん心配をかけたが、姉のところには孫もでき、両親がいちばん幸せなときだったと思う。

誤算は母の病気だった。十年前再生不良性貧血で二年の闘病の末亡くなった。しかしこの母のできごとをきっかけに私たち家族の絆は一気に深まったように思う。実家の隣に越してきてくれた姉夫婦のおかげで父は幸せに暮らしている。夫の協力のおかげで父の長年の夢だったヨーロッパへも連れて行くことができた。

私は両親の生きる姿勢から実に多くのことを学んだと思う。努力し身の丈にあった生活をする事、夢を持ち続けることなど……。勉強にせよ、習いごとにせよ、親から強制されたことは何もない。強いて言えばただ一つ、母から強制された手紙を書く習慣が今の「わいふ」への投稿の源になっている。

写真提供・文／高松恭子

ゲシュタルト・セラピーの恵み

松島ひろみ

「ゲシュタルト・セラピーって、なに？」この質問に答えるのはまことにムズカシイ。「うーん、うまく説明できないから、体験してみよう」という答え方しかできない。

体験することは勇気がいる。一番安全なのは「聞く」「読む」、次は「書く」「そして話す」。「からだを動かしてやる」とか、「ふれる」というのは勇気がいる。でもだからこそ、やってみると自信になる。

私はすぐに頭でいろいろ考えてしまっし、用心深いので、ゆっくりと順番にやってきた。ゲシュタルト・セラピー専門家養成講座に入る前、あちこちでカウンセリングを学んでいた。

自分の生きにくさを認めようといういまま、学んだ技法で人の話を聴こうとしたら「うまく聴けたかどうか」という、相手とはあんまり関係ないドツポにはまった。おまけに自分の問題が次々引っ張り出されてき

て、さらに苦しくなる。子育てでも夫婦関係でも同じだった。

肩こり、耳鳴り、頭痛、背中の痛み、微熱、扁桃腺の腫れ、便秘、うつ。症状はからだにどんどん出てきた。さらに子どもが喘息になって、学校に行かなくなってきた。西洋医学ではちっともよくならない。私にはからだのケアと心のケアが必要だった。

ドツポはチャンスだった。ゲシュタルト・セラピーにたどり着いてから少しずつ回復しはじめた。

何が起きているのか、知ることは力になる。知ることが私には必要だった。でも、回復の道をたどるには、知るだけでなく体験することができ、安全な「場」と「仲間」を得て初めてキツプを手にしたことになるのだ。自分と出会う少しの勇気さえあれば、ちゃんとそれは手に入るんだということ。私を私は体験した。体験して手に入れたものは私の宝物だ。

健康になること。楽しむこと。泣くこと。笑うこと。今ここに生きる。何とも考えずに、体験して感じる。そして私自身でいること。

そのどれも私は失いかけていた。

今までひとりでごんばってきただ、「ありのまま」なんてそう簡単になれるもんじゃやない。だから苦しんだ。でも、そこから始めればいんだよ。仲間から愛情をいっぱいもらってやっていけばいい。今の私はそう自分に言っておける。

変えられないものを受け入れ、変えられるものは変えていく勇気を分かち合える仲間を大切にしたい。

ゲシュタルト・セラピー専門家養成講座
・就学期間 基礎課程2年+専門課程2年
・開講時期 春期 秋期
・資格 二十歳以上
・受講費用 六九〇、〇〇〇円
・アロマテラピスト養成講座
・リフレクソロジー養成講座
個人カウンセリング（予約制）

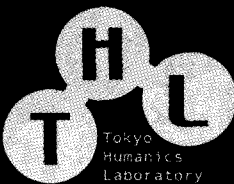
ゲシュタルト・セラピー無料体験日
簡単なエクササイズを体験してみ
るご紹介日。どなたでもお気軽
にご参加下さい。毎月第2水
曜日午後七時から九時です。

東京ヒューマニクス研究所 JR大塚駅南口より徒歩1分

〒170-0005東京都豊島区南大塚3-34-6 MOAビル402

TEL03-3986-2420 FAX03-3986-2422

<http://www.thl.co.jp>



Tokyo
Humanics
Laboratory

特集

私の出会った 奇人・変人



A氏は奇人？ 狂人？

大阪府豊中市 中松ミナ子

その日は、わが家にとって実に記念すべき日であった。そもそも、九年という予想の外の短期間で、二度の店舗移転をやむなくした理由は、最初は大阪モノレール建設に伴う立ち退きでの移転、それまで住居としていた建物を店舗に改築、息子夫婦の新しい出発の店とした。当時から駅前再開発案は発足しており最短で十年後と認識はしていた。

だが、不況下といえども再開発工事は急ピッチで進行、平成十五年三月完成を目標という。すし店二代目の息子夫婦に先代夫婦がビルに入居するか地上権を放棄して外部での元来の営業方式を続行するか――。

あれこれ家族会議の結果、ビル外での独自の店舗を物色し、幸い絶好の場所を確保、二年前の平成十二年九月一日賑々しく新装開店の運びとなった。

当日は、店の外も中も花、花でうずもれ、祝い客もひっきりなしの晴れがましさであった。A氏も祝いに駆けつけてくれた一人で「若！（A氏は二代目の息子を、そう呼んだ）おめでとーう！ いいお店だよ、それに若の人柄と腕前だ、豊中一だよ。いや大阪にもなれるよ。頑張つてね。でも、お客さんはすべて平等に大切にしなさいよ。じゃ、少し落ち着いたところに家内と来ます」と寛大かつ快活な笑顔を残して帰られる。そんな心遣いにも私た

ち全員が「三ツ星お客」と称して歓迎していたのである。当時は……。

そして、一周年記念日、A氏はいつものように夫人と八時ごろ来店した。

カウンターの常席に座ると、あらかじめA夫妻の嗜好に合わせて小鉢ものを調べていた息子が次々と差し出すと「おいしい！ 若、おいしいよ！」「ほんと、いつもおいしいですわ」と夫妻は満足そのもので食事は進んでいた。店内も次から次と客が入った。

さすが開店記念日だからかも……と嫁とこっそり話していた。

そのとき、突然、まさに突然「K君！ 失敬じゃないか！ なんだ、君のその目つき！ 言ってみろ！」と叫んでいるのは、今の今まで食事に舌づつみを打っていたA氏だ。

怒鳴られて何が何だか解らず呆然として「はア？ あの、はあ……」とウロたえているK君。すかさず注文のすしを盛りつけている夫や息子が「彼、ナニか失礼なことをしましたか？」

だがすでに狂ったように怒っている

A氏は「言ってみろ！ 君は前から家内に変な目つきをしていた！ 今も私たちが食事している間、睨んでいたりやないかッ、何？ 知らないと思ってるのか！ バカにしちゃいけない。私にはちゃんと見えてたんだぞ実に不愉快だ！ この店には二度と来ない」とA氏の激憤はおさまることはなく席を蹴立てて出ていった。好感度のようにあしを言う客ではなかったが、それに料理の評価もしてくれて息子はA夫妻に対して充分丁重であった。それが……。

A夫妻がわが家の常連となったのは以前の店からで二年余りである。夜、夫人を伴って「よろしいか？」と控えめな態度でカウンターの端っこに並んで掛ける。「狭くて申し訳ございません」と、お茶を出しながら言う。「いえ、お世話をおかけします」と夫人は、いつもブランドを身に付けエレガントな物腰であった。

カウンターに並んでいた長年の常連客は興味津々でA夫妻をチラリチラリ

と見ていたが二人が帰ったあとと必ず「あの二人理由ありやなア……不倫やでエ」とささやくのを「違いますよ、お年は少し離れているようですが、れっきとしたご夫婦ですよ」と、私たちはA夫妻の名誉のために弁明説明に努めるのだった。

しかし、正直なところ人目をひくカッブルでもあった。

ところで新しい店に移ってから、なぜかA氏は少しずつ変化していった。カウンターを独占し、横に他の客が座ると表情はイライラとし露骨に嫌がるのだ。ついに予約電話で確認する「カウンター空いてる？」と。一人でも先客があると「じゃあまたに……」と避ける。

ある日、夫人が「昨日前まで来たのよ、でもカウンターにお客さんがいらしたので、せつかく来たのに帰ったのよ」「まあ、その時間でしたらお二人は空いてましたのに……」と嫁は答えていたが、「合い席は、どうもねエ」と眉をしかめる夫人。「お客は皆さん



平等に大切に』と言ったA氏本来の意に反するではないか。ともかく、この夫妻のわがままぶりはエスカレートし、天つゆが気に入った、うどんのだしにしたいからポットに入れてほしい。だの、三日連休？ それなら僕たち食べる物がないう、若、見繕って用意してよ。などなど、息子夫婦は心重く感じるようになっていった。その積もり積もった感情が、ひよつとしてK君に伝染し若い彼の表情にふつと浮かんだのをA氏が感づいて怒り狂ったのかもしれない。それに、息子がK君を庇いA氏に対して謝罪の気持ちが見えないことも。

これより一年前の七月なかごろのことである。

私たち夫婦が週末出勤と名づけて和歌山から大阪へ戻ってくるのは金曜日の夜九時すぎであった。ちょうど、店からA夫妻が出て車のほうへ歩いていると出会い「まあ、毎度ありがとうございます。今、お帰りでしたか、お気をつけて……」と挨拶すると夫妻も

上機嫌で「あら、こんばんは、ごちそうさまでした」と応えたが、そのとき、まるで唐突に「お父さん、この車を差し上げます」と言う。「なんでですって？ まさか!」。冗談と受け止めて言う。「いやね、実は外車に乗り換えますのでね、この車が不要なんですよ」「下取りに出されたいじゃないですか」「A氏は車検も済んだばかりでもつたない、とか、この車には大変愛着があつて誰か解らない人に乗ってもらいたくないとも言ふ。「お父さんも失礼ながら、お年だし大きい車のほうが安全性もあり体が楽ですよ」「しかし、私はカローラで充分なんですが」

夫はしきりに辞退しているが、A氏は突然口にした自らの言葉に陶酔したかのように繰り返し「どうせ下取りなんて二東三文でね、それよりお父さんに進呈したほうがいいでしょ」と言う。と、明日また来ますとA夫妻は笑顔を残して帰っていった。

店に入って息子夫婦に話すと「へえ

、厚意はありがたいけれど、進呈すると言われても……困るよなア」「明日丁寧にするか」と話し合った。

約束どおり翌日A氏は一人店に来て、しきりと車を進呈すると言ひ、実は……。A氏が医薬品を納入する病院関係の中には、さまざまな医師がいて、業者が外車で出入りするとプライドの高い医師から反感を持たれることもあつて、すでにボルボを発注済みだが躊躇していたという。最近、その医師がパンツを買つてご自慢らしいので、こちらも心置きなく乗り換えることになつたと言ふのである。

しかし、今まで大切に乘つてきた車を下取りの安価に切なくて……と話されると、夫もとうとう「それではタダでは困ります。それなりの値を言つてください」と承知するハメとなり十数万の格安で取り引き完了となつた。

なんのかんのと云つてもカローラに比べて大型車ならではの高級感と安定性のある乗り心地は上々のものであつた。

ところが名義変更についてA氏は、少し言葉に歯切れがよくなかった。車の名義がA氏ではないこと、それは若いころ、たいそう世話になった女性に大金を用立てたが返金されず、車を譲られたというのだ、しかも、この件は家内に内密なのでどうか心に留めておいてほしいと……。ただ車検まで、このまま乗られてその時点で廃車なり名義変更なり決めればいいのでは……と言うのだ。当時は、A氏への不信感などまるでなく、年齢的な夫の身を案じてくれる善意の人と信じ切っていた私たち一家は、名義変更の件にも別段気にも止めず保険だけは、さっそくに加入したのである。

だが、それが、大いなる間違いのトだった。去年の車税納付期、A氏は夫人と食事をしながら車税が……と切り出し、私は納付書いただければ支払いますと言うと、自分のもあるので一緒に支払いますよ、と気安く言ってくれて五万一千円を預けた。数日後「税金、確かに支払っておきました。領収

書持ってきます」とハッキリ告げたので「お世話さまでした。いつでもよろしいですよ」と、つい答えた私。この時点で商売人らしく領収書をキチンと手にしておくべきだったと、あとから気がつくナントカだった。

A夫妻は、その後も、ひんぱんに店に来てくれたし、そのつど夫人はちゃんと支払いを済まし領収書は夫人経営の薬局名で切るのが習わしであった。少なくとも夫人の行動は、いつもどおりで不審なところはなかった。

去年の九月一日、店舗移転記念の夜までは実に和やかに訪れては帰っていたのである。

さて、怒り狂ったA氏は、その後和歌山の家にまで電話してきて、不平不満の限りを一時間近く話しては、自身自身が、いかに正しいかを強調して切るといふ行動を続けた。ときには、息子の嫁やK君を非難した。そのころには、A氏を知る店の常連からパートさんから「実は……あの……人……」とその奇人変人ぶりが耳に入ってくるように

なっていた。

やがて、去年末、彼が自慢のプラモデルの戦艦、数隻を棚に飾らせていたが引き上げに来て、仕方なく息子も挨拶を交わすこととなり、A氏は再び数か月前を思い出したかのように怒りを表わし「君はね、それで店主のつもりかね、しつかりしろ！ 私、もつとうまい店を見つけたよ。ハハハ。新しい店も手に入れたんだ。K君は今に止める。彼のような者がいたら店の前にならない」などなど、私たち親の前で好き勝手に息子を侮辱するA氏。その目付きはどう見ても奇人から狂人に変貌していた。十二月末の店の夜更け、足元からシンシン冷える中、ひたすら息子を痛めつける言葉を吐く六十歳近いA氏の異常さに戦慄を覚えるのだった。

かれこれ一時間後、ようやくA氏はプラモデルを大事そうに、そつと、そつと車に乗せると走り去り、それを見送ってしまうと「あーあ、これでAさんの残したものの全部なくなっちゃ」

息子はサバサバと言った。嫁も私たち夫婦も同様であった。

が、とんでもない。車検の日が追い追いと迫っていて、夫は廃車にするか継続して乗るかを決めかねていたが、車の性能がよいので名義変更をして乗ると決めた。

そうなると、いやでもA氏と交渉を再開せずにいられない。夫も仕方なくA氏に連絡をとり車検と名義変更を切り出すと「それがですね、実は、あの車の名義人がローンを残していて……」「ええッ!」「それで中松さんに何と説明するべきかと……半分でも負担させてもらいますが……」夫も、すでに愛着を感じている車でもあり、今後に乗るとしたら納得はいかないが全額負担すると言った。A氏は、ほっとしたように申し訳ないと言うが、なんのことはない、いよいよ車検日が迫ってきて去年度の納税証明を請求すると過去三年間が未納と判明。これにはわが家の誰もが絶句。

A氏の弁解「名義人が勘違いして使

ってしまいましたネ」、うそ、確かに納付しておきました、と彼自身が私に



告げたではないか。

車をめぐって、実に腹立たしさが尽

きないのだった。結局、三年間の税金をも負担、夫も去年分は返金請求すると「当然です、今、手持ちがないので来週アタマに和歌山のお宅へ送金します。えーと住所を……」と、まるで口先き約束。

以来五か月近いが連絡なし、A氏は息子のことを人間失格のごとく罵倒した人物その人であった。

だが、あの優雅な、それでいて誇り高い夫人も、ひよっとして同類だったのかもしれない、と疑問に感じるところである。

振り返れば、A氏に関わった数年間、私の得たものは「人をたやすく信じてはいけない」という教訓であった。

それにしても、奇人、変人というよりもA氏は「狂人」と評したいくらいである。

それとも、今どきは、我々一家のほうが「奇人・変人」の部類に属しているのかもしれないと思いはじめている。

(え・弘法堂建二)



エッセイスト・クラブ

迷探偵

大阪市城東区 布施幸子

先日、急逝した従兄の通夜の席で、田舎から来たハツさんに会った。息子の孝夫さんが付き添っていた。

通夜振舞のおすしを食べながら、なつかしい話に花が咲いた。孝夫さんが、「こんなときでなきや、親類ちゆうてもなかなか会えんでの。仏が会わせてくれたんじや」と言った。

「美左ちゃん、どないしたはる？」とたずねると、ハツさんが、「何もかも承知でもらうとくれた人がおつてのう。今は幸せじや。あんどきや、おっ母さんにいかい迷惑かけてもてのう」

とほえんだ。人柄が円満になった分だけ年とつたな、と感じた。向こうから見た私も同じかもしれない。孝夫さんもう初老だ。

平成六年の夏、八十五の母が亡くなる半年ほど前だ

つたと覚えている。興奮した口ぶりで私に電話してきた。「美左ちゃんが今日来たんや」「えーっ、ほんまやの」私も驚いた。家出したまま一年も行方不明だったからだ。げっそり痩せて汚れたシャツを着、お茶漬けを作ってやつたらがつがっ食べたという。

初婚に破れて実家に戻ったが、居心地がわるかったようだ。近所の、妻子ある男性と恋仲になり、美左ちゃんの車で駆け落ちした。車で仮眠しながら、行く先々でパートの仕事をしつと食べていたという。京都に来て少し落ちつくつと、嗟嘆に独り暮らしていた私の母が思い出され「おばあちゃんの顔が見とうなつたの」と言ったそうだ。問わず語りに世間話はしたが、居所はどうしても言わなかった。

「ほな、おばあちゃん聞かへんさかい。田舎のお母さんに電話してあげな。一言でええ、安心させさせて」と説きふせて電話をかけたが、嫌な顔してすぐ切ってしまった。そして「おばあちゃん、帰ります。自分でがんばるつきやないわ。捜さないでね」と腰を上げた。

当時の母は、脳血栓の再発が不安で、ごく近所しか出歩かなくなっていたが、「ちよつと買物があるし、途中でまで一緒に行き」と家を出た。

十分ほど歩いて市場の前に出ると、南側はわりとにぎやかだが、北の方角には田畑が広がっている。美左

ちゃんは「ほな、いろいろありがと。さよなら」と言うなり、田畑の中をまっしぐらに走って行ってしまった。

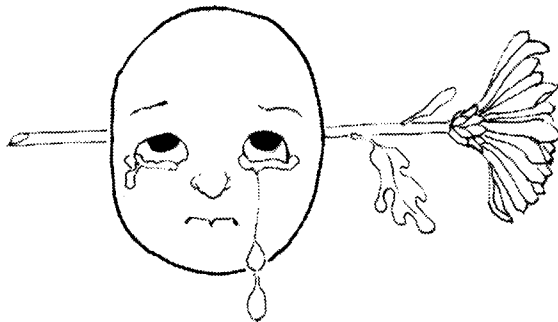
「呼んでも振りむかへんし、今帰ったとこや。つね歩かへんさかい、えらい疲れてしもたわ」と、その日の電話は切れた。

一週間ほどして、「あれからがまた、大ごとでなあ」と再び電話があった。田舎からハツさんが、美左ちゃんの兄の孝夫さんが運転する車で駆けつけたのが深夜。「てっきり引き留めとくれたと思うて来たに。居所もわからんかや、頼りないのう」いきなり母を詰つたらしい。「気持ちにはわかるけどハツさん、あんまりやないか」と怒っていた。

けれど、居所について全く心当たりがないわけでもなかった。話の中で美左ちゃんが、「新規開店のスーパーで働いていて、小一時間かかって歩いてきた」と洩らしたのを、母は心に留めていた。

そのころ、嵯峨にはスーパーマーケットはなく、だいぶ離れた二条に大きなスーパーができたと評判になっていた。そして、美左ちゃんが走り去った方角こそ、まさに二条であった。「それを確かめとうて送ったわけよ」母はちよつと得意気に言った。

「ふうん。それでハツおばさんと孝夫さんと一緒に、三人で二条まで行ってみたん？」「そや、朝になつてか



らな。もし見つかった場合、穏やかにせなあかんでと念を押してなあ。まっこと好き同士なら結婚についても考えてやらなあかん言うたんや。奥さん？ 別れたいらしいえ」

二条には、想像どおり、大きなスーパーがあった。店の人に聞くと美左ちゃんはその日非番だという。困った。が、駐車場にぼつんと置かれていた車が、美左ちゃんのものだとわかった。

「ならば、筋向かいのアパートにいる、わては睨んだ」「なんで？」「勤や。そしていた」「まあ」

名字が変えてあつたが表札を見て母にはピンときたらしい。ノックすると美左ちゃんが顔をのぞかせ、びつくりして閉めかけたが、「孝夫ちゃんが靴でこじあけて躍りこんだんえ。テレビの刑事もんかて、あれほどの迫力はあらへん。男前の孝夫ちゃんの顔がなあ、まるで鬼みたいで……」「で、その相手の男はんは？」「ふとんかぶつて寝てたんを、孝夫ちゃんが叩き起こしてどなるので、わても『約束が違うがな』とどなつてなあ。ハツさんはわあわあ泣いてるし、えらい騒ぎよ」

こわい顔の美左ちゃんに「悪う思わんといて」と詫び、母は嗟峨の家で穏やかな話しあいをしようと思案した。ところが、男は美左ちゃんをもてあましていて「連れて帰ってください」で一件落着。美左ちゃんもあつさり田舎へ戻っていったとか。

「わてはバカみたい。まだ体の節々が痛いわ」

「大丈夫？ けど、お母さんって迷探偵やね」

「名探偵やなんてそんな。煽てんといてんか。けど元気でまだまだ牙えてるやろ。ハハハ」

父亡き後、私たち四人きょうだいを育て上げた母は、嫌になるほど勝ち気な面と、逆にお人よしの面を併せ持つていて、得にもならぬトラブルに巻きこまれるのも再々だった。

祭壇の遺影を眺めつつ、この従兄ともよく揉め「叔母ちゃんは今仇や」と言われて腹を立てたこともあつたのを思い出した。けれど、母の晩年いちばん尽くしてくれたのも従兄だった。「両親と幼いとき死に別れて、叔母ちゃんはよくにとつてほんまの親やった」母の葬儀のとき泣いていた姿が浮かんできた。同時に私の胸がつまり、涙がこぼれた。

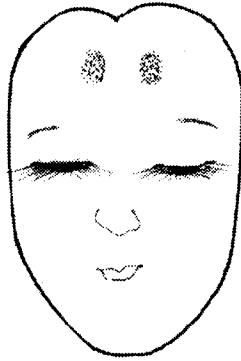
ちんさん

兵庫県川西市 遠山智鶴子（68歳）

「ちんさん」と言えば、人は「陳さん」かと思う。

話はややこしくなるのだが、血の通わない私の叔母のことである。名を「豊美」というその叔母を、私は

小さいときから「ちんさん」と呼んでいた。何でも叔母は、やつと口が回るようになったころから、自分のことを「チン」と呼んでいたのだそう。



もったいないことである。己のことを「チン」とは。「朕」と間違われたらどうする。

私の母は、田舎には珍しく、代々「久兵衛や」と呼ばれた、かなり大きな商家の出である。

子宝に恵まれた祖母であったが、母乳の出が悪く、八人のどの子ももらい乳をしなければならなかった。

母の場合、少し離れた農家の主婦に白羽の矢が立った。「スミ」さんという正直一徹のまことに慈愛深い人であった。半月ほど前、初めてのやや子を失って、涙にくれていたという。

初めのころは、若い子守が母を抱いて乳をもらいに行ったというが、いつのころからかスミさんの手元に置かれるようになった。

母は、子どものないスミさん夫婦の溢れるような愛情を、一身に受けて大きくなった。

昔から競り子というが、そこへ産まれたのが、スミさん夫婦の一人娘・ちんさんである。母とちんさんは二人姉妹のように、くっついてコロコロと大きくなった。

祖父母は、里心がつかぬ間に早く母をわが家に連れ戻そうと試みたが、母は隙を見ては、ちんさんの許へ走ったという。

小学校へ上がるようになって、実家と学校の間、ちんさんの家があるという地の利を生かして、店の若

い衆が連れ戻しに来る夕暮れまで、いつもちんさんと一緒だった。

母は同じ村内むらうちの父と結婚して、ちんさんの家の近くに家庭を持った。

私は両親の第一子である。スミさんにとつては、初孫ということになるか。

実の祖父母のところには、同じ年ごろの従姉妹たちがよく集まるというのに、私にはどことなく馴染めないところがあった。当時の私は祖父母のところでは、いつも一線を引く可愛げのない子であった。

そのくせ、私も弟もスミさんのことを、「ちんさんばあちゃん」と呼んで甘えていた。

ちんさんは今年八十五歳になった。

養子娘であったちんさんは結婚前に母親から、夫を敬い大切に尽くすよう、こんこんと諭されたという。

「あんたは養子娘や。婿さんに入ってもらわなにかん。嫁に行くのと理由わけが違うで。養子娘はわがままや、と世間さまに言われんよう、よう旦那さんを大事にしなや」

その教えは今も身に沁みついているという。ほぼ寝たきりになった夫の看病は、かれこれ十年にもなる。同居している長男夫婦が共働きのため、台所仕事を引き受け、四人の孫を大きくしながら、働きのちんさ

んはちんまりと小さくなつていった。

片時も目が話せない、と夫のベッドの傍で、暇があるとせつせと編み針を動かしている。実に器用な人なのである。

ご本人はちつともお洒落でないのに、編み針の先から流れてくるセーターは、まことにモダンでセンスがよい。

私も二枚いただいた。それを着るたび、ちんさんの温もりに包まれているを感じる。

なかでもちんさんの傑作は、編み物でできた、きんさん・ぎんさんである。

赤と紫の座布団に仲よく並んで澄ましている、ちよつと若いきんさん・ぎんさん。二色の糸を上手に使って緋の着物の雰囲気を編み込んで、なかなか存在感がある。

母の痴呆がすすみ、部屋の隅でケースに入ったまま、埃つぼくなつていたので、ねだつてもらつてきた。

ちんさんは、これを母と自分のためにふたつ作つたと言ふ。

きんさん・ぎんさんにあやかつて、自分たちもいきいきと老後を送りたい、と祈りながら作つたものだろう。尋ねたことはないが、きつとそうに違いない。

私はそれを寝室に飾って、朝に夕に二人にご対面しているのである。

茶飲み友だちを 確保するには

神奈川県座間市 青島典子（47歳）

同じ活動をして親しくなったものの、退会してしまつたから会えなくなつた友人にAさんという人がいます。別の友人Bさんと三人で久しぶりに会つたとき、「あなたはお茶とお花の先生でもあるのだから自宅で教えなさいよ。そしたら週一回会えるじゃない？」とAさんに、まあ字面は可愛らしいが、要はお茶に招待しろと図々しいことを私は言つてのけました。

Aさんは二人を生徒にとるのはさておき、

「お花は鉢一本で教えられるけれど、お茶はそういうわけにはゆかないしね。お道具が必要だから」

と勝手な望みをやんわりとおさえました。その日は電気炉ながら炉をセットし、香をたいてもてなしてくれました。私は、

「お道具か。自宅でお茶を教えていた姑さんを亡くした友だちがいるんだけど、虫干し手伝いでも申し出てお道具を見せてもらおうか？ 定期券を買つて日本橋三越まで通つていたシャレたおばあさんだったのよ」

と、自分勝手な企画を立ててその日のお茶会はお開きになりました。

数日後、亡くなつた姑さんのお道具を見せてもらえなかったと問い合わせると意外な返事でした。

「半年遅かつたよ。おばあちゃんの住んでいた母屋、人に貸すため家の中の物一切合切で古道具屋に持つていつてもらつたの。もちろんお弟子さんにお好きなのをと差し上げたし、何点かは手元に残したけれども何もないわ。おじいちゃんが同郷ということで親しくして直接いただいた浜田庄司氏の作品も、箱がないからと安かつたの。おばあちゃんが三越で買ったお道具なんて、三十分の一にしかならないのよ。デパートのお道具つてそれが相場らしいの」

Aさんにお茶の教室を始めさせるために私はまた考えました。

「隣の大和市で子どものない老夫婦が千坪の土地を寄付し、慈緑庵というお茶室のある公園になつているから見に行こう」

Aさん、Bさん、私の三人で見学に行った慈緑庵はいいものでした。周囲は建売住宅ですから小さく区切られており、どーんとまとまつた千坪の緑地は豊かです。事務所に炉のある和室が続く平屋と、小さな茶室。この二つの建物しかないのです。

平日で利用者がいなかったせいか事務所の女性がつ

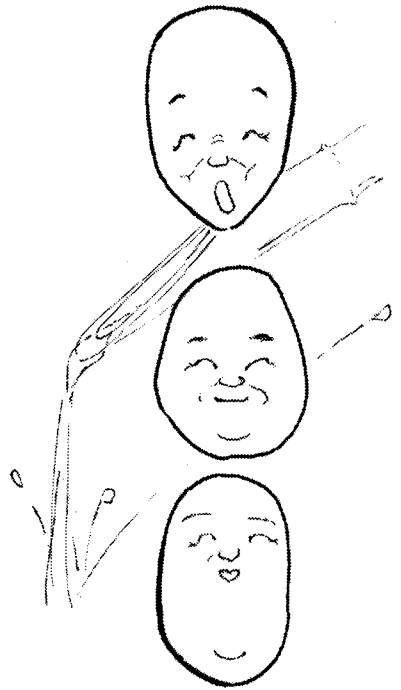
きつきりで説明してくれました。Aさんも茶室の利用状況や利用申し込みのやり方を尋ねていました。日曜にはお茶会、平日には大学の茶道部の学生の利用がよくあるそうです。

この慈緑庵で働いている女性は、お茶室のお世話という優雅な仕事だと思つて就職したのに、草刈りをはじめ庭全体の世話をさせられ、何の何の労働者だったと笑っていました。

「えっ、その小道の中にアメリカシロヒトリがいっぱいついでる木がありましたよ」と私が言うのと、

「えっ本当!? また薬をまかなくちゃ」

帰りについて来た彼女を、アメリカシロヒトリに引き合わせると、ウワーと叫んでふるえ上がっていました。が、そのようすを見て私は、以前教わっていたお茶



の先生を思い出しました。先生のお宅は垣根にムベが植えてあるのですが、濃いビロード色のアケビコノハの幼虫がいるとおっしゃるので、欲しいですと申し出るとこともなげに紙箱に入れてくださったのです。

花屋さんの花を床に生けていたら虫も見ずじまますが、庭や野の花を生けると虫もさわってしまふものですよね。お茶の先生とは虫も観賞の対象、動じられることはないですね。私の知るもう一人のお茶の先生は木彫りもやる人で、かたつむり、かに、亀といった小動物の作品が多かったものです。

Aさんも草花の世話はもちろん、動物の世話のうまい人なので充分資格はあるのになあ、自宅でお茶の教室を始めるのはまだ先のことかしら。

ふーちゃんへの言葉

東京都荒川区 大野風子

湯島の坂をただ黙々とゆっくり上がってゆく。ゆるゆるとした傾斜なのに足元がだるい。左には湯島天神。願いごとをしたらかなうだろうか？ ここを通るたびにほんやり思ってしまう。上りきり、右の小道を曲がった先には大学病院。私は二年前からここで脱毛症の治療をしている。

病院の構内は医療施設というよりは、公園といった雰囲気だ。バスが行き来する広い道、脇の歩道を覆うように悠々と茂る街路樹、古ぼけて赤葡萄色になった煉瓦作りの研究棟。初めこそ新鮮だったこの景色も、もう見慣れすぎてしまった。私は四月の空だけを青く感じていた。

「先生、今年お花見行きました？」

病室に入って、椅子に腰を落ち着けると、私は藪から棒にこう切り出した。変わることはない治療、いっこうに好転しない症状。向かい合う医者との間に会話は少ない。めずらしく話しかけてみたのは、ポカンと

晴れた空のせいだったのかもしれない。

「お花見？ 行ったよ。構内に咲いているヤツを見ただけけど。ホラここ桜すごいでしょ」

医者にはこりと微笑んだが、桜はとくに散ってしまっている。見てないので、なんとも言えない。

「もう、普通のヤツは枯れちゃったよ。でも今は八重桜が綺麗だよ」

意外だった……。言っちゃ悪いが、偏差値しか追ってこなかった「趣」とは縁遠い人だと思っていた。

（桜でも眺めれば、少しは安らぐ）私はそんな気がしていた。生えてはハゲる、ハゲては生える、その繰り返し。もうウンザリだ。四十歳ちよい手前のこんな女に、この先よいことなんかあるとは思えない。だからせめて、桜のときを感じ、薄桃色のその花びらをやりわりと心の中に沈めてみたかった。それなのに、今年桜の開花が早すぎた。おまけに週末の雨が愛でる間もなく花びらを、さらっていつてしまったのだ。

八重はあまり好きじゃない。心に沈めるには、どこか色が濃すぎるような気がした。どうしてだろう、一人取り残されたような心持ち。会計を済ませ、私はそそくさと外へ出た。

桜が去ってしまった構内を、正門に向かって歩いた。時刻は午後四時を過ぎていた。病院から帰る人々に紛れて、ジョギングをする人や犬の散歩をする人がチラ

ホラ目につく。

私の少し前にも犬を連れとおばあさん。体が細く、頭には赤、青、黄色といったほどこ古しの毛糸で編んだ帽子をかぶる。よれた灰色のスボンに黄ばんだまいかけ。その横をバサバサとした毛艶のない白い犬が寄り添うように歩いていった。

後ろをついてゆくうち、私はふと、彼女が木々のアーチを時折見上げては、犬に向かって繰り返し何かを話しかけていることに気がついた。犬はそれが聞こえるたび、ぐわんと顔を持ち上げ彼女のほうを見る。何を話しているのだろうか？ 私は追い越しまに耳を傾けた。

「ふーちゃん、ホラ新緑が綺麗でしょ」

……えっ？ 私は新緑という響きに戸惑った。その言葉が正しい日本語すぎて何だかすぐつたい気がしたのだ。ふーちゃんとは犬のこと。おばあさんは決して答えることのないふーちゃんに向かい、飽きることなく同じ言葉をかけていたのだ。

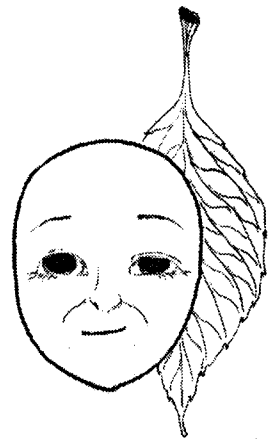
変わって人だなあ……。私は素知らぬふりで足をすずめていたが……。そう……。たぶん……。無意識のうちに、つい私まで声につられてひよいと顔を上げてしまった。

思わず息を飲み、足を止めた。その瞬間、目に飛び込んできたのは陽光に遊ばれた木々の葉の世界。それ

はまるでくるくる変わる万華鏡のように思えた。光を浴び、セロファン紙のように透き通った葉の気まぐれな重なり合いが、風や太陽によって次々と複雑な絵模様を創り出す。私の心の中に、青々とした時がやんわりと沈んでゆく。

木々の緑にこんなにも瑞々しい生命力が宿っているなんて気づきもしなかった。それどころか、私は四季の場面から華やかな部分だけを切り取るうとしていたのだ。けれども、季節の系譜の中、愛でるべき美しさは何気ない身近な景色の中にもいつもある。おばあさんはその尊さを「新緑」という言葉に込め、愛犬に伝えたかったのだ。

正門が近づく。何だか後ろにいる彼女らが愛おしい。おばあさんの想いはふーちゃんにも伝わったに違いない。そう、それは通りすがりの中年女、しょぼくれ、下を向いて歩きがちだった私にも。



新連載

太郎と次郎

千葉県松戸市

山田とも子

昭和七年生まれ。

二年前二人の息子に遺すために初めて書いた記録です。

夫の職業は広告写真のスタジオ経営。

経営よりも作家肌の夫に苦勞し、次男の成人を待つて五十五歳で離婚。

以後、男子寮で寮母として十年勤務。六十五歳で退職。現在ひとり暮らし。

引きこもりの男子をあずかるNPO法人の寮で、若者に囲まれ、

おばあちゃん役をやっています。

五教科以外が得意な太郎

男の子も高校に通うころになると、思春期から青年期に移行する時期で、親とのかかわりはほとんどなくなってくる。

カウンセリングの講習でこんな図の説明があった。

0歳から二十歳までの斜線の上部は、親が子にかかわる時間を示す。

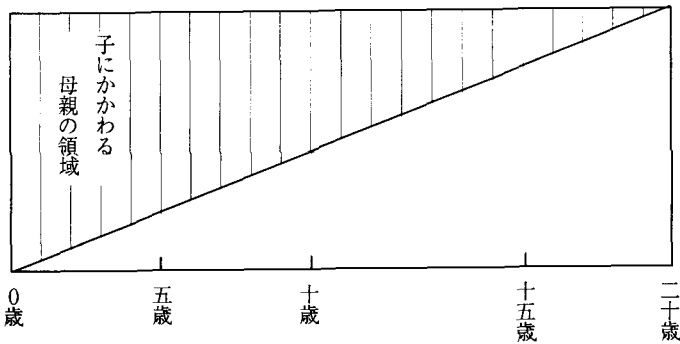
斜線の下部は、子が親離れしていくさまを表している。

0歳は、母親の愛情と保護が絶対に必要で、百パーセント子とかかわる。赤ん坊は母親がいなければ育たない。泣いて訴え、乳を飲みただひたすらに眠る。

一歳を過ぎると一人で歩き始め、二歳、三歳、四歳の間に自我が育つ。

五歳を過ぎると、幼稚園などの共同生活に馴染むようになる。

もうそのころになると、0歳児のころ、百パーセントかかわっていた母親



の手を少し離れて自分でいろんなことができるようになる。

十歳、十五歳は小学校、中学で知識を学び心身ともに成長し、友人もできる。

そして二十歳、青年期になるころには、親のかかわりはほとんどゼロとなる。

(現在その青年期がずっと延び、二十五、三十歳の大人になっても続いている親子関係が問題となっている)。

初めての子である長男も、そろそろ母親とのかかわりが終わりに近づいていた。というのも、高校に入ってから私の役目といえば、食事の用意と小遣い銭渡しぐらいになっていたからである。

さだめし彼は青春時代の到来に歓喜し、外に向かつて忙しかったのだろう。今こうして二十年前の記憶をたどりながら書いているが、そのころの太郎とかかわった思い出が少ないことでもわかる。

太郎は男子校を希望し、私立のキリ

スト教の高校に入学した。

朝の行事である礼拝に臨み、賛美歌を毎朝歌うなど考えもしなかったに違いない。

「オレ、こう見えても、礼拝と聖書の時間は真面目にやってるんだカナ」と言っていたのを思い出す。

しかし、彼は高校時代に、中学時代からの音楽中毒がいつそう深まった。

帰宅すればステレオの前に陣取り、レコードを聴きギターの練習を始める。何種類もあるハーブ（小さなハーモニカ）で曲を奏でる。一心不乱に吹くハーブを毎日聴かされるうちに、私はブルースが好きになった。

それも、黒人の唄うブルースやジャズの一辺倒で、当時放映されたテレビドラマの「ルーツ」は、ブルースが絶えず流れていて、家族みんなテレビにかじりついてた。

高二の仮装大会では、カールしたかつらをかぶって全身黒く塗り、背丈のある細身の黒人女性を仲間と演じたほどである。

美術の時間には、黒人のトランペット奏者を、黒紙で切り取って白紙に張り、額縁に収めて提出した。切り絵である。それを自室に掛け、本人は得意であった。

「今、テレビでブルースやってるよ、早く、早く……」と、姉から電話がかかるほどみんなが周知のブルース好きであった。

彼は黒人の演奏に酔いしれていた。どうしてこんなに惹かれたのだろう。メロディーとリズムは、彼の心をとらえて離さなかった。

高三になると、進学を真剣に考えるふうもなく、高校と同じ系列の大学生と付き合うようになっていた。大学祭では大学生にまぎれて、演奏していた。

ステージの始まりに、太郎が弾くギターのワンフレーズが鳴ったかと思うと、「高校三年の〇〇くん」と先輩がマイクで観客に紹介した。どんなに痛快だったろうか、演奏の味をしめた青春真っ只中の高校時代であった。先輩の音楽仲間を受け入れられ、こ

の上もない青春時代を謳歌したに違いない。ギターとハーブ、は常に彼のそばにあった。

いよいよ押し迫った、大学入試のための面談に私は出向いた。担任の先生の言われることはほぼ察しがついたが、先生は成績表を見ながら、

「これじゃあ、大学は無理です」と引導を渡された。

「まったくそのとおりでございます……」

と、頭を下げるしかなかった。本人は国、英、数、社、化、の五教科以外が、得意なのであった。

「お母さん、私は美術や音楽を、おろそかにしない生徒が好きなんですよ」

と、先生から言われたとき、私の目は一瞬光ったと思う。ああ、先生は息子を理解してくださっていると思ひ嬉しかった。社会科担当の先生であった。

だがいかにせん、彼の頭の髄には音楽が三年間にわたってしみ込んでいた。その当然の結果として大学受験は

失敗したが、親の心配をよそに平気な顔で大学の先輩との交流は続いた。それが愉快らしく、彼は同じ先輩の大学を目指して浪人生活を始めた。

しばらくすると、こんなことを豪語するようになった。

「オレがギャフンと言うような大学生活をつれてこい、そしたら大学に行つてやるぞ！」

「よく言うよ、自分の不勉強を棚に上げてさ」

と、野次っていたが、もうそのころの

私には説得力もなく、ただ息子のこれからの行動を傍観するしかなかった。後に、成人して数年たったころ、

「あのとき、オレが私立の大学に入ったとしたら、家はどうなつてたと思つた、わが家の経済ではとても無理だったさ」

そんなことまで考えていたのか、彼の青春時代の複雑な思いを知って、私は領くしかなかった。

当時、東京の有名大学に通つた長男の友人が、後に私に洩らした言葉が忘れられない。

「僕の青春時代は、なんだつたのかと思いますよ、太郎君は幸せな奴ですよ、しっかり青春を楽しみ、好きな音楽の道を手放さなかつたんですからね」

と、淋しそうに言つたのである。

そんな苦しみをもつた若者もいることを知つたが、私は長男が今後どうするのか、かにもく見当がつかなくつた。音楽では食べられないということ、親は重々知つている。しかし、彼は周



太郎の旅立ち（18歳） 北海道で酪農の仕事

困に妥協することなく、己の道を信じ
て進んだ。

次郎、十五の旅立ち

夕食の用意を始めたときだった。

「上の棚から、小さいほうの土鍋と
つて」と、次郎に頼んだ。

間もなく、ガチャン！と、食器の割
れる音がした。

「ぼくはダメだ……」と言って彼は
うなだれた。

「……」

「ぼくは何をしてもダメなんだ」

自信をなくした力のない声、目には
うつすらと涙がにじんでいる。このと
ころ次男はずっとふさぎ込んでいた。

「なんて言おうと、あんたがダメな
んで絶対、思わんよ！」

「……」

食事の用意をしている台所に来て、
彼がぼんやりして突っ立っていること
は、これまでになかったことだ。何か
追いつめられたようすに、私の料理の

手が止まった。

これはただごとではない、私は知っ
てる限りの彼の長所をならべはじめ
た。彼にこれまでに起こったできごと
や、行動、優しさなどを、つぎつぎに
上げつらねながら、ダメではないと強
調した。

だが、彼には私の言葉が響かなかっ
た。

親にとつて、自信をなくした子を見
るほど辛いものはない。しだいに私は
涙声になっていった。しまいは、

「あんたの顔立ちがいい、あんたの
体格、人格がいいヨ」

などと、すぎる思いで彼に訴えた。

「お兄ちゃんはキリストの学校だか
ら神さんの子、あんたは仏さんの子、
私はそう思うとヨ、あんたたちは
私の宝やけんネ！」

もうその辺りになると、自分でも意
味不明の支離滅裂な言葉を、涙ながら
に羅列していた。なんとか「ダメ」と
いう思いを食い止めようと必死であっ
た。

当時、「偏差値」で泣いた中学生は
多い。次郎もその偏差値で、大きく進
路をはばまれた一人である。偏差値で
高校を選び、人生が大きく変わった子
も相当いたに違いない。

希望校は無理だと担任に言われ親子
で頭を抱えた。中学浪人だけはさせた
くない。

後に分かったことだが、サッカー仲
間は希望校に合格していた。

次郎はずっと後になって「教師の言
葉」にどれほど傷ついたことか……と、
もらしていた。

中学時代は、仲間との別れが辛い。
しかし彼は友だちとまったく違う進路
を歩むことになったのである。

高校選びで、初めて人生の岐路に立
たされた。自分の未来の選択を迫られ、
彼の十五の春は兄と異なって苦しかつ
た。

追いつめられた私は、旧知の高校の
校長に相談した。そしてある高校を紹
介された。

「この私立高校の卒業証書はどこ

高校よりも重いですよ」

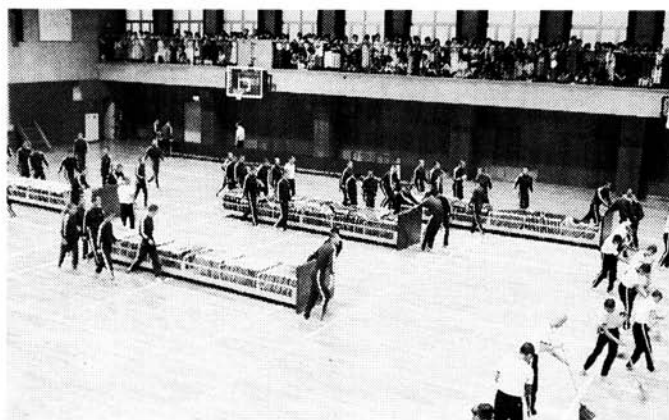
という校長の勧めで私たち親子は話し合い、「体験入学」をすることにした。

その学校とは、なにごとくも「全力でやれ」という厳しい校風の高校であった。勉強はいうにおよばず、食事、洗濯、掃除の日常生活全般を全力でやる。発言するときも、部活でラグビーをするときも、すべて全力でやらなければならない。

全校生徒が集まる食堂で、全力で校歌を歌うありさまは異様に見えるほどで、みな声をからして歌っている。指導の先生は、「全力でない」と何度も歌のやり直しを命じた。

在校生による掃除を見学した。上半身は裸で、床を磨くにも大きなかけ声をあげ全力でやっていた。額から汗が吹き出し生徒のひき締まった体からは、湯気が立ち上がりあたり一面をおおっていた。

トイレの便器掃除は素手でやる。何をやるにも全力なのである。私はこれまでに見たこともない光景に怖れをな



入学式の準備をする在校生

した。

面接の時間になった。

「ほう、国語は一流校なみだな」

教師が成績表を眺めながら息子の顔をみた。

ムスツと、だまつている次郎。

「この学校に入るかァー」

突然、大きな声が飛んだ。

「ハイ！」

教師の声につられて大声の返事。教師の誘導で、迷いつづけていた息子は即座に返事してしまった。もう後に引けない。ついに高校の進路が決まった。

この私立高校は全寮制で、特別でないかぎり外出禁止。買い食いなどはできない。校内には自動販売機もなければ甘いものはいっさいなし。ご飯は麦飯であった。ただあるのは「全力」でやることだけで、これではまるで禪寺のようだと思った。

「エスカレーターにお乗りの際は、長靴、ズック靴にご注意ください。途中エスカレーターに挟まれることがあ



次郎、入学の日

りますので、お気をつけください」
そのような駅構内のアナウンスを聞くと、二十年前の当時の大阪を思い出す。

入学式は父兄同伴ということだったので、あちこちの桜を眺めながら新幹線で福岡から三重に向かった。春である。梅田駅構内は雑多な人の群れが行

き交っていた。構内のエスカレーターを登り終わろうとしたそのとき、次郎の新しい白いズックが挟まれた。

パツクリと爪先が口を開き大きな足がのぞいた。十五歳の息子と別れる日である。そんな旅のハプニングさえも面白がって二人は笑いこぼれた。

食事をすましたが、入学式までの時間はたっぷりある。私にはどうしても決行したいことがあった。

「パチンコ」である。俗っぽい世間の味を、最後に楽しませてやりたいという私の提案に彼は大喜びした。

道頓堀の繁華街に入ると、まず中学生の黒い上着を脱がせた。背が高いので怪しまれない、しかも父兄同伴である。万一のときは私が責任とればよいと強気にでた。

彼はしばしの時間、ときを忘れて熱中した。そしてながしかの勝利をおさめて喜んだ。私の心境はというと、出征兵士を見送る母親のそれに似ていた。

入学式は厳肅な空気に包まれ、教師

も在校生もそろって「全力」で校歌を歌い、姿勢をくずさず私語もなく、緊張感のなかですべて静かに執り行われた。在校生を見ているときながら精鋭の兵士のように、その行動は敏捷であった。

この学校の選択は、果たしてよかつたのだろうかと案じた。

新入生は寮の先輩に引率され、校内の規則や寮の配属、制服、頭髮刈りなどのため、親から離されどこかへつれていかれた。その間、父兄はクリーニングの施設を見たり、二段ベッドと机がずらりと並ぶ広いわが子の寮を見学した。

「ふーん……」といった表情で父兄たちは、わが子のこれからの生活を想像する。全国からやってきた親の胸の内はみな同じである。

別れの時間がやってきた。新入生が揃いの制服におさまり、それぞれの親の前に現れた。生徒が手を入れないよう、ズボンにはポケットがない。

どの子も頭をきれいに剃られて青

い。上着丈の短い作業服ふうの薄緑色の制服に、新しい名札をつけた次郎が明るい表情で走ってきた。息をはずませている。黒い中学服を脱いで変身した子が、ひとまわり大きく見えた。もうだめー、涙がどつとあふれた、しゃべれない！

そんなおふくろを、見下げる息子の目が澄んでいる。私は腰が抜けたようにへなへたと座り込んでしまった。

同じ地元の父兄のお父さんが、
「一緒にかえりましょう」

と、声をかけてくださった。そうでもしなければ、とても一人で福岡に帰れそうにない状態だった。

「おふくろをお願いします」

次郎はそう言って、その父兄に頭を下げた。私はくしゃくしゃの顔をハンカチで押さえながら立ち上がった。

父兄たちを乗せたバスは息子たちに送られ、伊賀の山々の夕焼けを遠くに見ながら学校を後にした。

(つづく)

(写真提供・筆者)

● 太郎と次郎

わいふ文章講座のおすすめ

公民館、女性センター、社会教育課などのご依頼で、しばしば「わいふ文章講座」を開いています。

編集長田中、副編集長和田、「わいふ」から巣立ったライター達を講師とし、五回から十回までのコースがあります。

その他に、「子育て」「教育」「女性」「高齢者」「社会参加」など、各種の問題について講演をいたします。老人ホーム情報センター主任研究員の水落も担当します。

お住まいの地域で開きたい方は、お電話をください。資料をさし上げます。それを持って公民館、教育委員会の社会教育課などの開講を頼んでみてくだされば、引き受けてくれるところも多々と思います。

● PTA主催の成人教育、家庭教育学級での講師としてもご依頼ください。

家族の スケッチ

何が何でも便座カバー

奈良県奈良市 田中慶子（56歳）

毎年大晦日は、私はお節料理を作る日にしている。この日のNHKテレビは見ごたえのある番組が多く、テレビをつけながらの作業である。数年前の大晦日の午後、ある新進漫画家の「何が何でも便座カバー」という作品を紹介していた。

若い一人暮らしの女性が引越しに備えてカーテン、玄関マットなど購入品のリストを作っている。それらを買った後、引越しの日があった。新しいアパートに引越してきてすぐ、主人公は手洗に行きたくなる。ところが便座カバーがない！ ないと冷たくてたまらない。何もかもほっといて便座カバーを買いに玄関ドアの外へ飛び出していく最後のコマが、テレビ画面に大映しになった。リストにはなかった

便座カバーが真っ先に必要だったというわけである。

それを見て私は辛くなった。真冬、便座にカバーが欲しいことは、作品のテーマになるほど切実なことなのだ。

そのころ母は特別養護老人ホームに入所していたが、その一、二年前の九月に両親は兄宅へ引越していた。引越した後、私が兄宅へ行くと両親が使う階下のお手洗いに便座カバーがない。もちろんウォシュレットなど気のきいたものはない。兄の妻によると、父が便座カバーを濡らすのでカバーを取ってしまったと言う。それならウォシュレットをつければいいのに。あれなら水拭きしてもすぐに乾く。後でそう思ってもそのとき即座には彼女に何も言えなかった。後日、十二月八日の母のお誕生日が近いのでそのお祝いにウォシュレットを贈りたいと兄に申し出ると、

「そんなん買う金ぐらい、ある！」
とはねつけられた。しかしその後もウォシュレットもカバーもつけられなか

った。

お正月、兄一家がわが家に来たとき、私は兄の妻に、暖房便座をつけてほしいと、一万円を渡した。お祝いなどの名目がなく、私の好意として渡す額としてはウォシユレット代は高額で彼女も受け取りにくいと思ったからである。それでも相変わらず、便座はそのままだった。



便座の冷たさが身体にこたえた以上に兄夫婦の冷たさが母の心にこたえたのではないだろうか。

手洗いのたびに思い出すわけではないが、早くすっかり忘れてしまいたい。

長男の海外脱出

東京都東村山市 山名孝香

今年の日本のテーマは「家族」だそう。最近私は家族って何だろう？と思う。三人の息子たちが結婚し、それぞれ家庭を持ち独立した。「寂しいでしょう？」なんてよく言われるけどさんでもない。むしろ息子たちから解放され、肩の荷を下ろし安堵している。

八人兄弟姉妹の末っ子の私もやっと一人前に親の務めを終えることができ、これからが本当の《私》のための人生だと思うから。ただ、子どもたちが独立した今、家族って何なのかしら……と考えてしまうのです。

この五月の連休に長男夫婦が遊びに来たとき、カナダの永住権を昨年十月に取得していたことをはじめて知らされた。嫁もいたので、それ以上問いただすのは辛うじて堪えた。

もともと米国の大学を卒業し、日本で外資系に就職し、いずれは海外へ行きたいと再三言っていたので、いつかはそんなときが来るだろうと予感していた。やっぱりね、という感じが先立ったというのがそのときの率直な感想だった。いやむしろこれからは世界を相手に活躍するくらいの勇氣とチャレンジ精神（自分の子であることを忘れて偉そうに）を持ってほしいと願ってもきた。だからこそ中学二年のとき一か月の英国短期留学だつてさせたのに。

一人で大きくなったわけじゃなし、親に一言事前の話がほしかつたと思うのは親の勝手だろうか？ 就学ビザの渡航ゆえ、アルバイトはさせずに仕送り続けた。私が働いていたから行かせることができたのは事実だから……。

上っ面の感謝など期待しているのではない。想う心を相手に映すことって大切なのでは？と思うのです。言葉は必要なきときにはきちんと伝えないと誤解を生むことだってある。

会話をすることの大切さを夫も常々言い聞かせてきた。彼は留学するときも突然だった。一浪の末、気に染まぬままに行った大学一年の終わり、留学のための資料をテーブルいっぱい広げて説明しはじめた。そのときはわが子ながら前向きな真剣な姿に夫も私も心動かされたのをはつきり覚えてい

る。
結婚のときも突然「結婚するよ」と真夜中の電話で一言。次男が前の年にしていたこともあり、長男の結婚を望んでいたので嬉しく即座に快諾した。息子が選んだパートナーに無論異論などあるはずがない。

長男のマイペースはさらに続いた。ハワイで挙式すると二人でさっさと決めた。五月に決心を聞き、六月に先方に挨拶、七月に結納、九月にハワイへと、こちらは次男夫婦、三男の旅費やらで散財の連続であったつけ。

八十一歳の夫の義母が岩手にいるので嫁の私としては初孫である長男の結婚式には出てほしかった。留学中には

何度も日本のお菓子やらラーメンやらを送ってくれた義母だった。仕方なく十二月に日本で披露宴をし、義母にも無事見てもらうことができた。披露宴の三日前に夫が急性胃潰瘍で入院、出席できなかったことは番狂わせだった



けれど……。六月十九日慌ただしくカナダへと向かった。胸ふくらませ海外へ発つ息子の後ろ姿は親としても誇らしくもあった。そつとエールを送った。息子たちの人生である。

前進や冒険はむしろ夫婦で応援してきた。ものごとに順序があると思うのは私の一人よがりか……六年間の留学生活を、経済的に支えるのは本当に大変であったのに……長男の手法に少々不満を感じつつ、自らを責め、慰めている。

「俺とお前たちは永遠にライバルだ」と口癖の夫は私の心配をよそにのんきに彼らの成長を楽しみにしているかに見える。

文系の親父を敵にせずとはかりに、三人とも理系に進んだのには笑えた。私は二十二年間の勤めも今は辞め、《自由》という至福のときを満喫している。

だが待てよ、カナダだって電話もメールもある昨今、これからも子どもた

ちに発信し続けなくちゃー。煩いと思われて結構。元氣な証拠と思ってくれる話の解る息子たちであればいいのだが……。海外へ脱出した長男たちの無事を祈りつつ……。五十八歳、母の独り言である。

孫たちの夏休みに

山形県山形市 加藤智恵子

夏・老夫婦二人だけのわが家に、嫁いだ娘二人と孫中一から小四までの男一人と女四人の計五人の孫がやってきた。年齢差があまりないし、男女の違和感もほとんどなく、五人が会えるのはめつたにないのにすぐに同じ遊びに興じてしまう。

ちかごろの子どもたちの遊びはTVゲームなど静的なものが多い中、孫たちの遊びは動きが激しく、単純で奇声や喚声も非常に大きい。

今年の遊びの中心は、自称「室内ホ

ッケー」である。バドミントンとテニスのラケットとテニスボールを持ち出し、中二階の続きの部屋の襖を取っ払いボールを転がし、打ち合いがはじまる。

最初のうちは「仲がよくていいね」と大人たちは喚声の大きさに喜んだ。何しろこの地も子ども減少が目立ち、子ども同士の会話も意識しなければ耳に飛び込んでこない。わが家の遊びの喚声は子だくさんのシンボル、幸せの象徴だと勝手に思い込んでいるのである。

ところがある日庭に出てビックリ！頭上にボールが落ちてきたのである。見上げると、部屋の障子は大きく破れ、網戸までもヒラヒラと。そしてその隙間からボールが落下したのだった。それでも孫たちは「サンキュー」と満面の笑顔で悪びれるふうもなくボールを投げ返してもらおうとしているではないか。私は怒ることを忘れ、破れた網戸の隙間に狙いを定め、ためらいもなく投げ返した。孫たちの「ナイス！」

にやれやれ。ひよつとして私も昔の悪ガキ的行動に目覚め、楽しんだのかもしれない。

こうしてホッケーに興じ賑やかな何日かが過ぎた。ある日どんなようすかと部屋に入つてあ然と。厚手のマットレスをクッションに、跳躍の練習中だったのだ。マットレスの上布がはがれている。床板が？の心配もよそに強烈な音をたててきばえを見せようとしている。その飽くなき創意工夫と運動には本当に参つてしまった。

赤茶けた畳はラケットに擦られ、すり減つて細かいくずがいっぱい落ちている。

道路に面した部屋のこと、網戸の破れ、障子の破れ、隙間からもれる喚声、夕べの灯りの映し出す騒ぎのシルエツトがご近所の目にふれ、耳にさらすことは少々恥ずかしいが、この夏の家が家の軌跡として休みの終わるまでそのままにし、存分に楽しませようと諦めた。

休みの終わるころ全員で掃除と障子



い。老夫婦だけの生活には音まで沈んでしまい淋しい。

それにしても網戸や畳の交換、障子の張り替えも大変だなあ。金もかかるなあ！

「まんてん」のおばあちゃん

千葉県船橋市 三枝きよみ

嫁いでる娘から電話が入った。「今朝『まんてん』のテレビ見た」「うん、見てたよ」と返す。いつもも見てるわけではないが、わが家の朝の時間帯は、NHKの連ドラとおおかた決まっているようなものだ。

「今日『まんてん』で近所のおばあちゃんという人が出てたよね」「あー見たわよ、千石則子という女優さんでしょ」「そしたらね、一也がね突然、あつ、ママおばあちゃんがねこんな所にいるよ、って声を張り上げたのよ」

と言う。私も一瞬何と答えていいか分からず黙ってしまった。一也は三歳を過ぎたばかりの娘の二男のことである。彼のいうおばあちゃんは、娘の姑に当たる人（ちなみに私は、ばあばと呼ばれ区別されている）。そのおばあちゃんが、昨年、急な病気で「それじゃ一君行ってくるね」と入院したのだが、一週間もせず不意に帰らぬ人になってしまったのだった。孫はそのとき、二歳と二か月だったが、おばあちゃんからは、特別べったり可愛がられていたし、孫もひざにすわり二人でよくテレビなど見ながら話しかけられていたそう。それがあるとき突然部屋からいなくなってしまったのだから変に思ったことだろう。でもそのころはまだ言葉も話せなかった。娘が言うのには「この子何かこのごろ変なのよ、何か気に入らないときの泣き方が凄いのよ」と。それからややしばらくして、少ししやべれるようになったとき、娘から相談された。「一君にね、おばあちゃんどこへ行ったの、いつ帰ってく

の応急処置をさせた。改めて傷みの激しさを実感し、謝りのことばは忘れなかった。

アツという間の夏休み。みんなが帰って我に返る。空気にポカーンと穴があいてしまったように体の置き場がな

るのって聞かれるんだけど、なんて言
つたらいいと思う」と。私は「やっぱり
亡くなったのよとか、天国に行った
のよとかって言えば」と答えたが、
「そんなこと言つて一君がわかると思
う?」「今、わからなくてもそのうち
わかるからそう言うのよ」娘には私が
言つてることが少々不満らしかった
が、そのことはそれっきりになった。

娘たち一家も月に一度は遊びにきて
は泊まつていくことになっているが、
いつからか、夕暮れになると「そろそ
ろ帰ろうか」と一也が言うようになって
いた。「今日は泊まるのよ」と言う
と泣くのだ。上の子は喜んで泊まつて
いるのに何か居心地がよくないのかな
と思つていたのだが、どうもそうでは
ないらしい。今年の夏は一家で越後湯
沢に行ったのだが、ホテルに泊まりみ
んなが寝ようとしていたのに、「そろ
そろ帰る」と靴を履き、パパに叱られ
ていたと聞く。今になって私が思うこ
とは、もしかしておばあちゃんが家へ
帰つているとでも思つていたのか、一

也の脳裏にはおばあちゃんのことかと
のようにインプットされていたのか定
かではないが、でもNHKの「まんて
ん」を見、その後に出てきたときも
「なんだ、家のおばあちゃんは、満天
のおばあちゃんになってるんだ」と
一人合点しているそうだと。その後また
遊びに来、帰つてから気がついたこと
だが、「そろそろ帰ろうかつて、一度
も言わなかつたね」と夫と顔を見合わ
せた。もう一也にとつて、おばあちゃ
んのことはなんとなく整理がついたの
かなと内心ほつとした。

夫の美学

東京都練馬区 瀬谷栄子（73歳）

「男子厨房に入らず」すでに死語と
なつて、神通力を失つた言葉を、男の
美学と思ひ続けている人が私のパート
ナーだ。

夫がサラリーマンだった二十年、そ

して自営業とともに働いた三十年間
は、彼が家族の家計を支え、台所の責
任は私が担つてきた。
会社を三年前に畳んで、二人はやつ
と自由になつた。

今度は同じラインに立つて、平等に
家事を分担できると思つたが、あいか
わらず料理、洗濯、掃除は妻の役目で
ある。

金婚式もとうに過ぎた、夫婦二人の
静かな夜更けに、私が声をかけた。

「このリンゴ食べる?」

「食べるよ」

「それじゃ、台所からナイフとフォ
ークと、お皿を持つてきて」

「持つてきたよ」

「皮を剥いてください」

「えっ、僕が剥くの?」

「たまには剥いてちょうだい、二人
で半分ずつ食べましょう」

夫は新聞から目を離さずに黙つてい
る。

「食べたいんでしょ?」

ノロノロと半分に分ったリングを剥いて、お皿にのせて私の前に置いた。残りの半分は剥くのが面倒というように、わざと皮ごと食べて私に抵抗する。

『甘ったれるんじゃねえよ』と、私は心の中で反発しながら、剥かれたリングを食べた。

彼の母親の躰が甘かったのか、不器用にナイフを使うのを見られたくなかったのか、頑なに『皮を剥くのは、女の仕事』という考えを変える気はないようだ。

私は食事の用意をするのが嫌なのではない。もしも夫が、気軽に料理を作って、

「味はどう？」

なんて私に言ったら、何倍も話題がひろがっていくのではないか、時間はたっぷりあるのだから、たまに二人がキッチンに並んでおいしいものが作れたら楽しいと思うのだが。

着るものも面倒がって「何でもいい



よ」と言う。けれども意にそわないと袖を通さない。「似合うわよ」と言っても、気に入らないものは着ないのだ。ある日、夫が「ユニクロへ行こう」と言う。

鏢のある帽子やハンチングをいくつも持っているのに「帽子がほしい」と私を驚かせる。これ以上もう要らないのにと、不平顔になるのをグッと堪えていっしょに行くことにした。

店内は若いお客が多く、私たちのような老夫婦の姿は見えなかった。

夫は野球帽の形の、濃い黄土色のキヤップを選んだ。青い縦縞のカッターシャツ、麻混の白長ズボン、フラットの白いシューズと四点を揃えて籠に入れ、七千円を払って店を出た。

半年ほど前に私が膝の手術をしてからは、二人でいっしょに車で買い物に行くようになった。始めは私のあとから籠を持ってついてきたが、だんだん慣れてきて、野菜やお菓子を自分で籠に入れるようになり、男の美学に少し変化が表れたようだ。

その日の夕方、付近を散歩してくると言つて、買ったての帽子とカッターシャツ、白ズボンと白運動靴のユニクロ製品で身を包み、

「どうだ、ジジイには見えねえだろう？ まるで若者だ」

と新鮮な自分の姿に満足して、足どりも軽やかに出かけていった。『ユニクロ』が新鮮だったのかもしれない。

夫の美学を尊重しながら、つきあつていこうと考えている。

娘との再会

熊本県八代郡 砂原富美子

私は、女の子がほしかった。出産するまで女の子だと確信していた。買ひそろえた服は女の子用だった。名前も決めていた。

「おめでとうございます。男の子ですよ」

と言われてパニックになつてしまつた。

用意してたのは女の子の服、もったいないから着せることにする。

私の姉たちは女の子を産んでいる。

「いいわね、男の子で、よかつたね」と言われて、絶対次は女の子を産んでやると私は二番目に期待した。

三年後、私は出産した。また男の子だった。長男の古着、かわいい女の子の服で、次男もデビューする。

三歳になつた長男は、ピンクの服を着た弟を妹と思つていたらしい。道で花を取つてきては、弟の髪に飾ろうとしていた。

長男のときは、生後半年で、すっかり男の子らしくなつたが、次男の場合には、顔が私に似たのか、よく女の子とマチガエられた。

そのたびにうれしくなる。本当に娘だつたらよかつたのにと。三番目こそ女の子を考えたつもりでしたが、もし男の子だつたらと決心がつかない。そうだ。今の間だけ、次男に娘になつても

らえばいいんだ。

姉からもらつた女の子の古着もたくさんある。夫に見せなければいいよねと、昼間買物に連れて歩いた。かわいい服にいちばん喜んだのは次男だったかもしれない。

次男が三歳になり保育園に行くことになつた。髪を切り、男の子らしい服装になつても赤い傘や、ピンクの長ぐつをほしがつた。女の子とばかり遊んで、男の子とは遊ぼうとしない。そのとき私は後悔した。深く深く反省した。ごめんねいちばんたいへんな思いをしたのは次男だつたに違いない。男の子の仲間入りをするためスイミングに通い体力をつけて、海や山へ出かけた。小学校一年、二年と進級すると、男の子らしく、たくましくなつた。バスケツト、野球と部活を通して男友だちも多くなつた。

現在、中学二年生。毎日野球の部活に頑張っている。クリクリのぼうず頭、グラウンドを走りこんだ汗臭い泥だらけの練習着、思春期で声変わりした低く

太い声。

かわいい記憶のカケラも飛んでいってしまった。気がつけば、私も二人の息子の母親として、たくましくなったんだ。優しい言葉も今では、息子たちと同じぐらい太い声になったし、食べ盛りの息子のために、せっせと大量に料理も作っている。

私には娘はいないのだから将来嫁さんでもくればと期待しておこう。それまでは猫のシロを娘替わりにしよう。

次男が体育祭の朝、なぜかニコニコしていた。訳を聞いても教えてくれない。

「来れば解るよ」

と言う。私は弁当を持って学校へ行く。プログラムが進み、毎年ある仮装大会。先生や生徒が、有名人やアニメのキャラクターに変身する。よく見ないと誰が誰やら解らない。

校庭を二周した後で、親子ダンスになる。子どもたちが親のもとへと、テントへ走り迎えに行く。

「どうしたんだらう遅いなあ」と他



セーラームーン
男子もおだてりゃー女の子に変身
赤いハイヒールの男の子の足はとくにきれいですね
親バカの砂原富美子でした (写真提供・筆者)

の生徒に聞いてみると、「後ろにいるよ」と言う。ふりかえって私は驚いた。なんとそこに娘に変身した次男が立っていた。照れくさそうにニコニコと笑っている。

十一年ぶりに再会した娘と、ダンスを踊った。胸がキューンとなった。幼

いころの次男の姿が目の前をよぎる。

「似合うね」「かわいかよ」とみんなに言われて、次男はニガ笑い。

ほんのつかの間のできごと。次男は部活の野球のユニホームに着替え、部活戦のリレーへと走っていった。

(え・佐藤瑞江子)

完璧な親なんていない!

J・W・キヤタノ著

カナダ生まれの子育てテクニクス

幾島幸子訳

ひとなる書房

本体一八〇〇円＋税

二〇〇二年八月十五日発行

神奈川県厚木市 鈴木美樹

「自分の生活をだいじにする親のほうが、子どもの面倒もちゃんとみることができなのです」

この文が何より強烈に目に飛び込んできました。実は今まで「自分の好きなことをする暇があれば、その時間を子どもに費やすべきではないか?」と自問自答し、自分を苦しめている自分がいました。

しかし今、子育ては百人いれば百通りあっていいのだと自信をもって言えます、この本に出会えたから。ほのほの、可愛らしい挿絵を見ながら、心のオモリが取れました。

「親がすべき仕事には二種類ある。絶

対にしなければならぬこと・子ども
の食事、休息、請求書の支払い。した
ほうがいいこと・床掃除、ほこりを払
う」

たったこれだけの説明で、何が大切
か、何を優先すべきかストレートに教
えてくれたように思います。ユニーク
な切り口だけにすぐに記憶されまし
た。きつと潔癖・完璧主義ママのカチ
カチになった肩をほぐしてくれるは
ず。

シングルママへの心がけ「子どもの
せいではない、親の愛情は変わらない、
何があっても大きくなるまで面倒をみ
るから心配はいらない、両親別居でも
他の子と同じようにパパママはいる、
これらの思いを発信させ、甘やかさな
い」ここでも端的に箇条書きにしてく
れています。今まで何冊か育児書を読

みましたが、こんなふうにはシングルマ
マへ、優しくそしてしっかりしたメッ
セージを伝えている本は見たことがあ
りません。

読み終えてみると私にとって単なる
育児書でなく、心を開放してくれる
本になっていました。

育児で何が辛いかといえば、怒って
ばかりいる自分を省みるときだと思
います。その原因を取り除くには、目の
前で練り広げられている兄弟ゲンカを
阻止すること!と決めこんでいました
が、そうではない。自分がグッドコン
ディションのときは多少の雑音にも寛
容。精神不安定になれば、ケンカ云々
以前、黙ってほしいばかりに声を荒げ
てしまう……。兄弟ゲンカは単なるき
っかけであって、自分の心を平常に戻
すことが先決と教わりました。

存在にする方法

千葉県 柳沢順子

わが家の十二歳になる娘は本気でサ
ンタクロースの存在を信じている。す
でにサンタから娘のもとへプレゼント
が届くことはないが、しかし「サンタ
がいるったって、それは親と玩具会社
がからんでいるんでしょ」というので
はなく、マジで信じている。小学校で
は低学年のころから友だち同士の間
で、

「そんなわけないじゃん。親が用意
しているに決まっているでしょ」とい
う非常にまともな意見も交わされてき
たようだが、娘はこれに関しては、

「サンタは本気で信じている子の所
にしか来ない!」という確信を持ちち
やっているのだ。娘があまりに強気で
言うので、おおかたの友人たちは、ホ
ントかなあ、と思いつつも、もしかし
たらあの家にはそんなこともあるのか
と黙って聞いているのか、あるいは娘
に話を合わせて聞いているのかもしれ
ない。

「朝になるとツリーのの下に置いてあ
るんでしょ。でもさ、締め切ったマン

ションの二階にどうやって入るの?」

「サンタって忍者とか、泥棒もでき
そうだよな」

「世界中の子どもたちに配っている
んだから単独のしわざじゃないな:
…」

十二月二十四日には娘の友人たち
が、それぞれ母親手作りの料理やお菓
子を持って集まってくるのだが、こん
な会話で盛り上がっているのを聞くに
つけ、私は心底嬉しくなってしまう。

娘は箱入りでも、夢見がちな少女っ
ぽい子でもない。夏休みに企業家養成
キャンプに参加して、その体験談と考
察による社会派の自由研究で市からの
賞を取ったり、運動会や学校対抗の体
育会では男子からもたよりにされる戦
力である。かなり硬派なヤツといえる。
そういう子がサンタを信じて疑わない
のは、ひとえに私たち両親の洗脳のた
まものと、娘の単純な性格ゆえであろ
う。

——ファンタジーは新しいイメージ
をいまくことであり、人間の生き延び

サンタクロースを永遠の



● サンタクロースを永遠の存在にする方法

る道に繋がるのではないか。ファンタジーを子どもに伝えることができなければ人類は何代にもわたって大きなツケを支払わねばならないであろう——
これはミヒヤエル・エンデの遺した言葉であるが、幼いころから「ナルニア国物語」をはじめ、数々のファンタジーや児童書に親しんだものとして全く同感である。

ファンタジーが好きな人というのは現実逃避型の人間か、というところではない。たしかにファンタジーは想像上の産物だが、しかし想像力の欠如した生活や人生は味気なくてやりきれないであろう。想像力というのは、現実をあるがままにただ受け入れるというよりは、さらによきものにしよとする意志であり、人生を積極的に生きよとする生命力である。想像力とはすなわち創造力にはかならない。

小公女セーラが、粗末な屋根裏部屋での惨めな生活に打ちのめされなかつたのは、アンネ・フランクが絶望の淵にあってもなお、「理想が実現できる

日が来る。自分の若さと快活さと強さを信じている」と言い切れたのは、赤毛のアンがどんな局面でもやたらと幸せでいられたのは、彼女たちの知性に裏打ちされた真っ直ぐな想像力のおかげである。

目に見えて存在し、証明できるものしか信じられないのであれば、「心のこもった贈り物」という観念は理解できないことになる。心など目に見えるものではないし、科学のように証明などできない。すべての物は単なるモノでしかないということになる。他の人からしたらどうということのない物が、ある人にとっては特別の存在となりうる時、その『特別』はそう感じる人の想像力の中に存在する。材料がめずらしいとか、特別高価であるとかいうことは全く違う価値観である。それに飛行機だって地下鉄だって摩天楼だって、もとは想像上の産物だったのだ。

サンタクロースはいる。なぜならサンタクロースがいる世の中のほうが、

いないより楽しいからである。八百万の神さまだって観音さまだって、やはりいてくれたほうが楽しい。

しかし大人である以上、ただ漫然と「サンタはとにかくいるんだよ」と唱えているだけで何もしないのがダメなのは言うまでもない。何しろサンタというお方は、神さまと違って本当にプレゼントをくださっちゃうのだから、これに対して子どもに申し開きするための戦略をめぐらさねばならない。

娘のいた幼稚園では、毎年サンタへの願いごとを手紙に書いて、イブの日まで枕もとやツリーの下に置いておく、ということを見せてくれていたの、娘は小四まで何の疑いもなくそれを続けていた。私とダンナはそれを事前にこっそり盗み見てはプレゼントを用意したり、フィンランドのサンタ郵便に申し込んで娘宛てのカードを送ってもらったりした。

二十四日のイブの夜、娘はツリーの下に、サンタさんのためにお湯の入ったポットとティーセット、それから手

作りのお菓子（不格好なゴツゴツのクッキーだったり、ジャムつきトーストだったりした）を置き、ご丁寧に「来たという証拠にここに必ずサインをしてね」などというカードまで用意して眠りにつく。十二時を過ぎて起きている子には来ない、とかたく言っていたので、宵っ張りの娘でも、そのへんは実に素直だった。

私たち夫婦はイブの夜中に、納戸の奥から用意したプレゼントを引っ張り出してきたり、カードに英語でサインをしたり、パサパサのトーストをかじったりしつつ、子どものいる幸せというものをかみしめた。

娘がサンタを本気で信じていることができたのは、ひとつはサンタが娘の要求をきちんと満たし続けた、ということもあっただろう。なにしろ娘の欲しいものは「○○のCMで流れている黒人のおじさんが歌っているみたいな歌のCD」などだったりして（これはルイ・アームストロングの歌う What a wonderful world という歌なのだ）

これは近所のスーパーマーケットの安売りCDワゴンの中に、千円で売られていた。この辺はまだ簡単でこちらも気が楽だった。

ところが、ある年のお願いは「お弁当箱のような形で、取っ手のついたポーチ。できれば色は金か銀にしてください。宝物入れにします」。また小学校四年の年は「メトロポリタン美術館のウィリアムに関するもの。できればペンケースと消しゴム以外だと嬉しいです（もう持っているから）」などとなる。

前者はその年の、とある化粧品会社のクリスマススコフレ（クリスマス用に売り出す化粧品の福袋のようなもの。いろいろ入っていてお得な値段になっている）がまさに銀色の布製のバニテーカー（お弁当箱型）入りだったので、中身を抜いてプレゼントとした。これはデパートで偶然見つけた。

後者のウィリアムというのは、ニューヨークのメトロポリタン美術館のマスクットで、古代エジプトの遺跡から

出土した青いカバの置物がモデルになっている。実物はメトロポリタン美術館にあり、写真で見てもユーモラスでたいへん可愛らしくオシヤレな感じだ。ウィリアムはステイションナリーになっていて、日本で手に入るものもある。それ以外にはバッグやぬいぐるみがあつて、ニューヨークに行けば手に入るらしい、ということも、幼稚園のころお店のお姉さんに聞いた娘は、目を輝かして「いつかニューヨークに行く！」と言っていた。が、ここにきてサンタの存在を思い出したらしい。

いくらなんでもそれはムリだな、と思っていた晩秋のある日、ポストに一冊のカタログが届いた。なんとニューヨークのメトロポリタン美術館から来た、ミュージアムグッズの商品カタログだった。私はときどき、海外通販で安い服などを購入していたので、海向こうで顧客名簿が売られたのだな、ということはずぐにわかった。

ともあれ、それは嬉しい偶然であつた。そのカタログにウィリアムのぬい

ぐるみと絵本のセットが載っていたのだ。このときは私自身サンタの存在を本心に信じたくなつた。ファックスで申し込んで三週間、海を越えてそれらはやつてきた。たかだか十五ドルほどの、小さな布のぬいぐるみと絵本のセットは、娘には特別なものとなるだろう！しかし、その嬉しさや興奮と同じくらい、ある懸念がうかんだ。来年は……どうしよう。

私たち親も毎年、サンタのいるクリスマスを十分楽しんだ。親の特権のひとつに「親ばかりになれること」があげられると思う。世の中に自分の子ほど可愛いものはいないと思ひ、手間隙かけて子育てができるのも、この親ばかり効果ゆえであろう。

しかし行き過ぎた親ばかりは当然子どもをダメにするし、社会の迷惑にもなる。私たちの親ばかり効果によるサンタの魔法もこの辺が限界であろう。限界ならすっぱりやめるしかない。しかしここまで洗脳しておきながら、いきなり来年以降、プレゼントを打ち止めに

したら娘にとってサンタはとんだ裏切り者になってしまう。

今年のプレゼントをもって最後にし、なおかつサンタの存在を永遠のものにするために、私たち親はない知恵をしぼった。結論は最後の贈り物とともに次のような手紙がサンタからEメールで送信されてきた、ということとなった。

娘はウィリアムグッズに嬉し泣きし、その後、手紙の内容を説明されて、寂しさにまた泣いた。

今年もまたクリスマスが近づいてくる。最近、娘は不思議そうにこんなことを言った。

「塾のバイトのお姉さんは大学生なのに、サンタさんからまだプレゼント来ているんだって。去年は掃除機をもらったから、今年はオーブントースターもらうって言っていた。あの人が本気でサンタを信じているようにはみえないんだけどなあ。ウチに来ていたサンタとサンタの種類がちがうのかなあ」

(え・筆者)

Hello, my dear.

I'm proud of you. You have been a very good child so far.

Also I wish you will do your best at every stage of your life in future too.

But I must say that this is the last Christmas gift from Santa Claus, this time.

Because you have grown up enough to understand that my work is very hard.

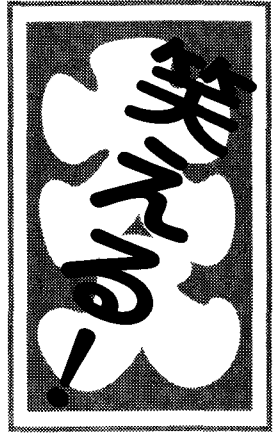
Many new babies are born every day. So many kids are waiting for me around the world.

Now, I wish you give(not take)your kind heart to the people around you who love you, day by day.

Also I wish you would be more happy!

Please believe that I'm proud of you and I love you very much forever.

Santa Claus



ちゃんとあった！ 恋の法則

熊本県天草郡 松本とみよ（46歳）

失樂園、俺が見たらば快樂園……と
うちの夫がつぶやいた。そこまでゆか
ずとも職場に恋はつきもの。

私の職場は銀行なのだが、次長とい
えば支店長の次に偉いナンバー2であ
る。支店長ほどはいばらないし、こと
重大事が発生すれば陣頭指揮をとる。
切れ者って感じ。つい、すてきなおじ
さまねと好意を寄せることになる。

新入行員時代の次長は禿げていた

が、まつ毛が長くかわゆい顔立ちであ
った。この梅干し殿下に始まって、ど
ういうわけか、私は歴代の次長が好き。
検印をするのに、伝票の裏をじっと眺
めるといふ儀式をやらないと次に回せ
ない次長がいた。「ただでさえ忙しい
のに早く伝票回してよ。裏にや何も書
いてないよ!」と陰で愚痴る女子行員。
「かわいいじゃないの」と私。「いった
いどこが?」と女子行員一同のひんし
ゆくをかっておった。

「私って、次長という立場に惹かれ
るのかなあ。みんな違うタイプなのに



●
笑える!

次長というだけで好きになるみたい
すると、後輩のTがすかさず、「い
いえ! 共通点があります」と言うで
はないか。「ヘッ!? それはいったい
何?」と聞くと、彼女の答えは実に意
外なものであった。

「チビで変わってるってこと!!」

あまりにスルドイ指摘に笑ってし
まった。私の恋には、ちゃんと根拠が
あったのである。

そういえば、昔好きだったS氏も：
…そして夫にもこの法則が当てはまる
ではないか。その発見を夫に伝えたと
ころ、彼はさすがに無言であった。

このことがあってもまもなく、以前次
長をしておられたOさんが支店に立ち
寄られた。私の『好みのタイプ』の件
が話題になり冷や汗をかいた。すると
後輩Tが再び「とみよさんはいいです
よ。好きだっていうだけの話なんです
から。私はどうなるんですか。『チビ
で変わってる』なんて言った私の立場
は、いったい……!」

(え・カステラネンコ)

新山姥物語 ①

しもつけやみぞさん
下野八溝山系の暮らし

栃木県那須郡

植竹佳恵^{かえ}



現在の私

はじめに

現在、私は六十八歳。職業欄には林業と書く。根っからの山の小母さんのような顔をしているが、考えてみれば三十年、四十年前は普通の都会ふうの女性だったのだ。

いつの間にかこんなことになったのか。歲月、環境、それにある程度自分の意志も加わって、今の私があるわけである。

自分では当たり前と思っている山の暮らしも、都会の人には珍しいことかもしれないが、そんなことを文章にして、読んでくださる方があるのか、というのが今の私の正直な気持ちであり、結局は自分のために書くとしても思わなければ、ペンを進める勇氣はわいてこない。

独身時代

私は東京生まれの東京育ちだが、どういうわけか自然志向で、高校時代から学校の休暇は神奈川県の大磯町にある家で暮らしていた。

上が兄二人で、はじめての女の子ということもあり、母にはずいぶんと気合いを入れて育てられた。あと妹

が二人できたが母の扱いは全く違った。母の思惑は、家庭的で躰のよい、万事控えめな女らしい子に育てたいということらしかった。

しかし人間の本性は、躰によっても変えられないということを実証する見本のように、私は活発でやや粗暴な子に成長した。それが災いして、せっかく、入れた名門の幼稚園を退園させられる羽目になった。その後、ことあるたびに「そんなふうだから幼稚園をさげられたのよ」と母にこごとの種にされ、子ども心に負い目をしよわされた。

小学校のときに疎開、そして終戦を迎えた。

親は育ち盛りの五人の子どもをかかえて、さぞ苦労したことと思うが、子どものこととて私は辛い思い出はほとんどない。ただ、大学の進学については、大学などへ行くと縁遠くなるという母と真つ向から衝突。結局は母が諦めて、四年制の中国文学専攻の学校へ進んだ。

結婚

見合結婚であった。親に急かされたのである。私がいつまでも家にいると、兄に嫁のきてがない。妹まで婚期が遅れると迫られた。そうまで言われてはと新天地を求めて結婚する気になった。

「天は二物を与えず、お前は器量が悪いけど色が白い」とわけのわからないことを言っておだてられ、「なに、小姑が三人いるようだけど、みな妹だから問題ない」と励まされて送り出されたのだった。昭和三十二年の秋のことだった。

夫となる人は世間擦れがしていて、まだ学生の私を手なずけるくらいは朝めし前。

嫁ぎ先は東京にも家があったが、栃木県のいわゆる旧家である。

私は地方の旧家というものに漫然たる憧れを抱いていた。その内情など深く考えもせず、古風で静かで奥深い雰囲気が好き。私は十二歳から箏曲の稽古を、割合熱心に行っていたので、静かな環境でお稽古さえできれば結構という感じだった。月に二、三回東京の師匠のもとに通えればと思っていた。その交通費をウジヤウジヤ言われるようでは困るけど。

まずはこんなことでスタートした結婚生活だが、私が在学中ということで、卒業までは夫の両親、弟妹とともに東京で暮らしたが、卒業と同時にさっさと田舎に引き込んでしまった。

田舎での暮らし

そこは栃木県那須郡黒羽町という山村で、一応は一

万八千石の大関藩の城下町である。県北で、福島・茨城に接している。「奥の細道」で芭蕉がいちばんながく滞在したというので有名、逗留した俳句の弟子の家の待遇がよかったからというのが定説である。

現在は東北新幹線で那須塩原下車（東京から一時間十分）駅からは車で二十分という便利さだが、当時は在来線に二時間以上揺られ、駅からの道路も未舗装。訪ねてきた私の母が、あまり砂利が跳ねるので「炒り豆街道」と命名したほどだった。

夫の父が国会議員だった関係で両親は東京住まい。黒羽町の家は夫の祖母が長年、守ってきた。この祖母とはその後十六年間、一緒に暮らすことになるが、ものにこだわらず「家柄だか芋がらだか」と言って笑わせるような人だった。亡くなった祖父とは従姉妹の間柄で、十六歳で嫁にきたのだが「お秀でなければ嫌だ」と言わせるほどの美しい人だった。

姑は養子を迎えた家つき娘。よきにつけ悪しきにつけ嫁の立場が分からない。おかげで私は嫁いびりとか、嫁を一段下に見るといようなことをされたことがない。古くからいる婆やさんたちからもまたしかり。私が鈍感で一向に感じなかったのかもしれないが。

職住一致で、大きな敷地に「お店」と呼ばれる格子造りの事務所と、住まいと、仏間と祖母のいる離れ。それぞれの棟が七曲がりの廊下で結ばれていた。



「奥」と称する新婚時代を送った家

新婚さんはどこに住んでいたかというところ、この七曲がりの屋敷と道路を隔てた向かい側にある「奥」と称する一段と立派な接客用の家にいた。京都の大工が泊まり込んで七年半かかったという代物で、私の予想を上回った立派な家だった。夫は日常、久留米紺の和服に紺足袋。下駄をはいて道向こうの「お店」に出勤するわけである。

その生活は昭和三十五年に長男が誕生するころまで続いた。誕生の翌年「お店」を祖母の離れと仏間を除いた全てを取り壊し、事務所と我々夫婦の住まいを新築した。

三年あまりの「奥」での生活は、いま思い出しても現実離れがして物語のようだった。

冬の寒さ。高い天井。だだっぴろい部屋。ざっと百枚の雨戸。地球温暖化とはほど遠く、雪が降れば何日でも解けない。蔵の前の広い板の間には、よく山鳥や雉が美しい尾羽根を見せて吊るされていた。軒には塩鮭が何匹もぶらさがっていたが、寒いので悪くならなかったのだろう。

夫の仕事

夫は大正十四年に、何十年ぶりに待望の男の子として生まれた。大学を卒業するまでは原則として東京暮らしだったが、幼少のころから祖父は当家の跡取りとして扱った。

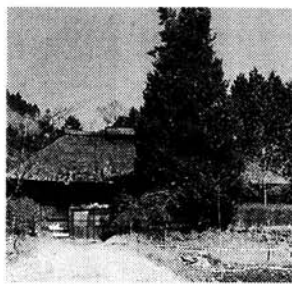
当時は林業はあくまで副業で、本業は地主。ほかに醸造業もしていた。夫は小学生の一年か二年のころ、学校で家の職業をきかれ「大地主です」と答えたという。一緒にいた支配人に（夫は大病のあとで、付き添っていた由）そういう場合は、ただ地主と言うように注意されたという面白い話もある。

小学校のうちから祖父の考えで、小作米の帳付けをさせられ、夏休みになるとすぐに呼び戻されて、手伝い。世間の子どものように遊んだことはあまりないという。

終戦の農地解放で耕地は全て手放し、醸造業も関係

者に譲り、林業に重点を置くようになった。

大学時代の夫はよく山へ入ったようだ。今では道もよくなり、だいたい三十分で現地入りできるが、当時は木炭車（燃料に木炭を使う自動車）で峠を越えるにも雪のあるときは、バックで登ったとか（そのほうが力があるから）。簡単には往復できないので山の事務所泊まり込んだそうだ（わが家を新築してほどなく、当時の茅葺きの山の事務所も建て替えてしまった）。



建て直す前の山の事務所

泊まり込みのときは、山の作業員が「旦那さん、これ」と差し入れがあり、田螺のかき揚げは有り難いのですが、蛇の照り焼きには参ったという。夫は長いものが苦手で、今でもテレビに蛇が出ると横を向いてしまう。

後に私が山の仕事に関係するようになったときは、造林地を区分するのに何の何林班というようになった

が、終戦直後はまだ「樺山」「萩っぼ」「こどろき」などと昔ながらの呼び方で、大ざっぱに区分していた。夫は土地勘がよいのか、何十年も行かない山でも、あそこはああ、ここはこうと地形を言う。

山に育てた樹木（主に杉・檜）を立ち木のまま製材業者に売りさばくのが私どもの仕事だが、その取引の仕方は、現在は毎木調査といって対象になる樹木（これを立木という）を一本一本、挟み尺で測ってはノートにつけ、樹高を推しはかって、契約するその山に何石（一リユーベが三・六石）あるか計算する。お互いに信用があるので個々に作業する手間を省き、わが社で製作した資料を相手方にコピーして渡すわけである。

ところが夫が最初かかわったころは、山の取引は博打と言おうか、勘だけが頼りであった。買手は該当する山を、まずぐるりと外周を歩き、次に真中の沢すじを登って下りて両側を眺める。そして品定めをして交渉に入るわけだが、お互いに符丁を言い合い……一から九までをホン、ロ、ツ、ソ、レ、タ、ヨ、ヤマ、キ、これは香具師のものと同じだそう……と価格を取り決める。不思議なことこの方法での石数は、現在の毎木調査とほとんど差はないそうだ。材木の景気の高かった当時のこととて、契約のあとは芸者をあげてのどんちゃん騒ぎ。これだけの町に芸者屋が何軒もあった由。

いずれにせよ山の景気のおかげで時代だから楽なことだ。夫の大事な仕事は、実は現金のやりくりで、銀行によく行っていた。議員の父の選挙費用の捻出、東京暮らしの両親の生活費など、もろもろの送金。それに加えて、選挙区に住んでいるので地元としての数々の気配りなど……。人には分からぬ苦勞もあつたようだ。

山の仕事にかかわるまで

昭和三十五年に長男が誕生してから二年置きに三人の男の子にめぐまれた。兄弟そろって黒羽町立の保育所、小学校、中学校に通った。当時はかなりの大家族で、夫の祖母に私も親子で六人。それに十代のお手伝いさん二人。看護婦に書生（山からつれてきて町の高校に通わせる）に婆やさん（針仕事など）これで十人です。そこへ週末という母が泊まりにくる。

若さというのはいいもので、私はたいして苦にもせず張り切って何とかこなしていた。食事の世話も大変で、例えばちらし鮓とすると、どんぶりをだーつと並べて具をまぜたご飯を五百グラムずつ秤にかけてよそった。そこへばっばつと海苔や薄焼き玉子をかける。

その間、暇を見つけてはお箏の稽古に精を出した。朝の内、お箏を出して琴柱をたて調子を整え、いつで

も弾けるようにしておく。二十分という時間ができれば一曲弾ける。当時を思い出した一首。

吾の弾く箏のめぐりを子の這へり
夢にはあらず過去といふもの

土地の子どもさんの家庭とはかなりのギャップがあり、親には何も言わなくても、子どもたちはそれなりの苦勞があつたようだ。特に長男は子ども社会に初めて出ていったパイオニアだから大変だつたと思う。

家庭訪問の先生に言われたことにはびっくりした。「お宅は茶の間がないですね。炬燵もテレビも置いてない」炬燵とテレビのある茶の間が一家団らんの理想図なのだろう。

わが家は食事は食堂で。隣の居間にはテレビもある。テレビが食堂にないので、食事どきは次から次へと会話がはずむ。私は口を挟まずに聴いていると、先生の評判やら交友関係など、家の外での彼らの動向が手にとるように分かる。

遊びにきた友だちが洋式トイレを見て「これ何する所けえ？」と。今では信じられない話だ。

また、PTAの会合でたまたま私が、いちばん先にお風呂に入るといふ話にはびっくりされた。嫁はしまい湯と思ひ込んでいたようであった。

陽気のよいときはピクニックをかねて子どもたちをうちの山へ連れていった。背負い籠にお結びや卵焼き

を入れて、ただ林道をか
け回ったり、沢をかきま
わしたりするだけで結構
よろこんだ。茂った藪を
抜けるときなど、いちば
ん下の子は背負い籠に入
れてしよったものだ。当
時は猪を捕獲する仕掛け
が何か所もあり（現在は
禁止）子どもたちは珍し
がった。八畳くらいの広
さの山原を頑丈な棒杭で
囲み、なかにさつま芋を
植えておく。彼らの好物
なので入って食べだす。
すると張りめぐらした針
金に脚がひっかかり、入
口の木戸がばたんと落ち
る仕組みだ。

山を見る私の頭に林業
ということがいささかも存在しなかったのが、のちに
思い出してみても不思議な気がする。

整然と植林された山を眺め（杉だか檜だか考えもせ
ず）、家に帰ってから夫に「私はあんな山よりも、自然



屋敷の裏の川で、小学校時代の3人の子どもと

のままの山のほうが風情があ
って好きなのに」と無邪気な
ことを言ったら、何を言うか。
我々はこれで飯を食っている
んだよ、と叱られた。その後
何年も経たず、仕事として山
に入るようになるのだが、そ
れは次回にまわそう。

子どもたちも高校生とな
り、隣の町の県立高校に順々
に通うようになった。雨の日
も雪の日も、十五キロの道
りを自転車通学した。

冬の朝の体感温度は相当な
ものだったようで、後年、次
男は北海道大学に入学し札幌
に、長男はN T Tに就職して
帯広に転勤したが、高校へ通
ったときの寒さを思えば何で
もないと言っていた。

昭和四十八年には十六年ともに過ごした祖母が九十
四歳で他界。子どもたちも家を離れ、その他の人々も
去り、わが家は大分スリム化した。

（つづく）

（写真提供・筆者）

パソコン ワールド

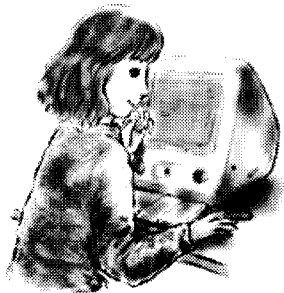
私の異次元ポケット

埼玉県さいたま市 岡島奈央

実は、私はコンピュータは嫌いだった。コンピュータを何でもできる神のようにあがめる風潮にははつきりいつて「NO!」。しょせん人間が作ったものだ。コンピュータは間違えないといつても、最初にプログラムを入力す

るのは間違いだらけの人間なのだから。そして、電気がなければただの箱。

しかし、その考えを変えて「ほほー! おぬし、なかなかやるな」と私を唸らせたのは、大学の同級生の消息を探し始めたときのことだった。恩師が病に倒れ、連絡網の必要性を痛いほ



ど感じたが連絡がとれるのは一人だけだった。そのとき偶然インターネットの「同窓会サイト」で同級生を一人見つけた。早速eメールを送って、彼が知っている同級生の連絡先を教えてください、その人にeメールを送り、また連絡先を教えてください。これを何度も

繰り返して、やっと半数の人の連絡先が分かった。

同級生の実家に葉書や電話をして現住所を教えてくださいもできるが、こちらの素性を話し、信用してもらうには骨が折れる。そして、私は女で、ほとんどの同級生は男性。電話で奥さんが出たらそれこそ大変だ。改めてeメールの利便性を感じた。相手の時間を奪うこともなく、心ゆくまで近況を綴れる。そして、二十年ぶりに四人の友人と同窓会を開くことができた。会ってビックリ。全然変わっていないのだ。着るものの趣味まで変わっていない。時間の流れにも頑固に変わらないものはあるようだ。

そして今、ロサンゼルスに住んでいる友人とチャットを楽しんでいる。インターネットだと、知りたい情報をリアルタイムでしかもボタン一つで手に入れることができる。気がつくと、パソコンなしの生活は考えられない人間になっていた。

(え・渡辺美帆)

視覚障害者との一期一会

横浜市神奈川区
安原みどり

朝のラッシュ時を過ぎた電車に乗ると、盲導犬を連れた女性の隣が空席だった。

こんなに近くで盲導犬を見るのは初めてなので、私はこの女性の隣に座りたいと思った。

背筋を伸ばし、まっすぐ前を見据えた女性は、私と同じ四十代と思われる。「失礼いたします」と、女性に声をかけ、床に寝そべっていた盲導犬を踏まないよう注意して腰かけた。

女性は「大丈夫ですか？ 犬が邪魔ですみません」としきりに気にして謝るので、「いいえ、とんでもない。大丈夫です。全然かまいませんよ」と私も繰り返して答えた。

相手が見えていても、本心が読めず戸惑うことがある。周囲の状況がわからない女性はなおさら気を使うのだろう。あるいは苦情を言われたつらい経験があるのかもしれない。

足元の犬は、車窓から差し込む日差

しを受け、気持ちよげにまどろんでいる。

「かわいい！」と思わず犬に向かつて出た言葉を、「……ですね」とあわてて女性に向けた。ハーネス（胴輪）を付けた盲導犬に話しかけてはいけません、子ども向けの本で読んだのを思い出したからだ。

でも今は誘導中ではないからかまわないのかもしれない。かすかな期待を込め「盲導犬に話しかけたり撫でたり

しては、いけないですよね」と聞いてみた。女性は「はい。犬の気が散るので、駄目なんです」と心底すまなそうに答えた。意に添えず申し訳ないという思いが、気持ちよく私の胸に伝わってきた。

盲導犬は、子どもの躰に難航している私にはいささか眩しすぎる存在だ。躰には愛情と根気が必要だが、私には根気がない。だから「日光猿軍団」の猿が、机に座って授業を受けるようすをテレビで見るときに「猿でさえこれだけ躰けられるのに」とため息をついていた。

まして盲導犬は厳しい訓練を受け、吠えることも走ることも禁止され、マキングという匂いを残しながら歩く犬の習性すら捨て、任務を遂行するため、毎日神経を使っている。しかも猿の失敗はご愛嬌ですむが、盲導犬のミスは人命に係わる。

盲導犬だって寝ていたいときもあれば、気分がすぐれない日もあるだろう。普通の犬はたとえ無芸でも愛され、他

人からも自由にかわいがられるのに、人一倍、いえ犬一倍、賢くてけなげな盲導犬に限って交流禁止とは、あまりにもかわいそうすぎる。

「つい『偉いわね』って、誉めてやりたくありませんけど」と私は未練たらたらず、犬に聞かせるように言った。

「はい。でも仕事を終えてハーネスを外されると普通の犬に戻り、思いつきり遊んだりかわいがられたりできますから。四六時中、緊張しているわけではありませんし」

女性の説明に少し安心し、相づちを打ったが、内心はまだ納得できなかつた。

盲導犬として活躍している場面で褒めてもらえず、給料がもらえるわけなし、特別おいしい餌を食べられるわけでもない。それどころか、気に入った犬に出会っても擦り寄って行つてはいけない、凶暴な犬に喧嘩を売られても無視しなくてははいけないとはあまりに理不尽だ。そしてハーネスを外すと、普通の犬と同じ生活に戻るだけだなん

て、私が盲導犬なら「割りに合わないワン」と反逆するだろう。「強制労働禁止」「犬権蹂躪」。次々と闘いのスロ―ガンが浮かんだ。

女性は「最初は犬が好きというわけではなかったんですよ」と小声で言われた。盲導犬と暮らすには、大好きなことが第一条件だろうと思っていたので意外な感じがした。だが目が見えないという運命をただ嘆くのではなく、障害を補うために不得意なことにもチャレンジしている。なんと前向きな生き方だろう。

訓練された犬でも、当然ながら個々に性格があるので、視覚障害者と盲導犬とのマッチング（相性）が大事らしい。

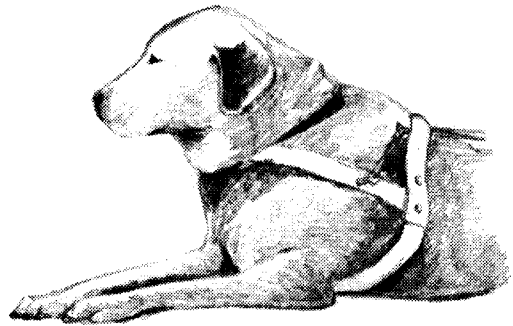
「この犬も私ものんびりやなので、友だちに『あなたたちはのんき過ぎて見ていられないわ』って呆れられています」と女性は柔らかに笑った。「あなたたち」という言葉は、こんなに温かくほほえましい言葉だったのか。私は改めて女性に目を移した。

意志的な面ざしに、潔いショートカットの髪型がよく似合っている。きれいに引き上がった口角には、幾多の困難を乗り越えてきた人だけが持つ自信さえ感じられる。私はこの女性に、すっかり魅せられてしまった。だが、せっかくの機会なのに、予備知識も少ないので、ありきたりの質問しか思い浮かばない自分がかもどかしい。

犬は時折、垂れた耳をそば立て薄目をあけるが、(またか。ご主人様もよく面倒がらず毎回、同じ質問に答えるよ)とでも言いたげにフウーと鼻息を漏らした。

視覚障害者の中で盲導犬を持てるのはごく限られた人だから、この女性はたぶん啓蒙活動も自分の役目と心得ているのだろう。

十分ほどで、下車駅に近づいたことを女性は犬に知らせた。私と話をしながら、さりげなく車内放送に注意していたらしい。女性が頼りとする聴力への心配りが、私には欠けていた。盲導犬だけでなく、障害者自身も話しかけ



られれば注意力が散漫になり、本当は迷惑なはずだが、女性はそんなようすは微塵も見せなかった。

盲導犬は女性にうながされ、すつくと起き上がり、女性を誘導して降りていった。一心同体というのだろうか、

強い絆で結ばれている姿は、羨ましくさえあった。笑顔の女性を見送りながら、私は最初に下車駅を聞くべきだった、次回から気をつけようと反省した。

帰宅後、盲導犬についてもっと知りたくなり、パソコンで調べてみた。

老犬になると目が悪くなるので、盲導犬が活躍できるのはせいぜい八年程度らしい。日本全体で一年間に育成できる盲導犬の数は、百三十頭が限度だそう。ポランティアや寄付金に頼っているが、一頭育てるのに二百万円近く必要だという。二〇〇二年現在、日本の全盲者は約十万人だが、盲導犬はたったの八百九十五頭しかないらしい。

気の遠くなる数字にうなってしまった。それゆえ盲導犬の育成に情熱を捧げている方々の地道な行為に、頭の下がる思いがした。

盲導犬の代わりに、盲導ロボットも開発されているらしい。無骨なロボットを見ているうち、何か変だと思えて

きた。犬やロボットに頼らなくても、視覚障害者の周りには、目の見える人間がたくさんいる。動物や機械ほど気楽には使えないだろうが、晴眼者が進んで道案内をしたり、バリアフリーの施設を整えば、障害者も行動範囲がかなり広がる。

それから二週間ほど後のことだ。

横浜駅のホームで、白い杖をついた高齢の男性が立ち止まっていた。雰囲気からして中途失明者ではと察せられたので、「何かお役に立てますか」と聞くと、「各駅停車に乗りたいたいのですが」と言われる。頻繁に各停と急行、特急が止まるので、乗車位置をずらし、混乱を避ける工夫がされている。これは晴眼者にとっては便利でも、目の不自由な人には乗車位置の区別がつけられず逆に不便なのだ、私は初めて気づいた。

私は紳士と腕を組んで乗車位置まで進み、電車を待ち一緒に乗った。込んでいたが、紳士は両足と杖でうまくバランスを取って立っている。品格のあ

る方で、何も話さずとも知性が漂っていた。そばにいるだけで、私の背筋もいつしかすうと伸びた。

下車駅を尋ねると、偶然にも私と同じだったので「どのようにお手伝いすればよろしいですか」といつもより丁寧な言葉遣いで聞いてしまった。人を見て態度を変える自分が、浅はかで愚かな人間に思え、首をすくめていると、上背のある紳士は、「肩を貸してください」と言われた。鋭い。どうやら乗車時に、小柄な私の体型を察知したらしい。

紳士は私の肩に、杖と反対側の手をそつと置いた。「電車を降ります」、「ここから階段になります」と、私は盲導犬きどりでエスコートした。紳士は、私の肩に重みをかけず軽く触れるだけだった。

駅にある点字ブロックに沿って杖を使えば誘導者は不要かもしれないが、紳士は私の好意を快く受けてくれた。むげに断れば、他の障害者への手伝いも躊躇される可能性があると考えされ

たのかもしれない。紳士が私に全幅の信頼をおいてくれているのが、温かい手を通して伝わってきた。それは何も心地よい喜びだった。

そうか、きつと盲導犬もこの心地よさというご褒美を得ているに違いはない。私は盲導犬を不憫だと勘違いしていたが、人の役に立てること自体が嬉しいはずだ。任務を終え、ご主人に頭を撫でられ感謝されたら、それで充分なのかもしれない。嬉しい発見に、胸が高鳴った。

改札を出て、知人を待つという紳士に「ありがとうございます」とお礼を言われ、「どういたしまして。お気をつけて」と別れを告げた。私が犬ならシッポを振りたい気分だった。

この紳士も、前述の盲導犬を連れた女性も凛とした姿勢が印象的だった。

私は人がいないのを確かめ、大口あけてあくびをしたり、お菓子にかぶりついた途端、人に見られてあわてたりする。つまり目が見えるから、「人の



目を盗む」という見苦しい行為をしてしまふ。せっかく見える目に、卑しい役目を負わせてはいけない。それくらいなら、あくびもお菓子にかぶりつくのも、堂々としたほうがいい。

乙武洋匡さんの『五体不満足』の本の中に「障害者と交流しても、どうしてもうまくいかないときは無理しないでいい。交流を断つて障害者差別だと言われたら、うまくいかないのは、あなたの性格が悪いからだ」と、障害者に言えばいい。それは健常者同士との付き合い方と同じでいいのだ」という趣旨の箇所がある。

きっぱり言い切る乙武さんの見解には、思わず後ずさりしてしまうが、障害者と対等に接することの大切さはなんとか理解できる。だが、慣れないと実行はむずかしい。

私は生来人見知りが強く、見知らぬ人に声をかけることはほとんどない。まして障害者なら、誰でも手助けしてあげたいと思うようなやさしい人間でもなく、むしろどう接していいかわか

らないので、関わりを避けようとするほうだ。だから盲導犬を連れた女性が先に話しかけてくれなかったら、私は黙って盲導犬を眺めるだけで終わっていたはずだ。

ところがあの女性が私に働きかけ、出会いを作ってくれたことがきっかけで、盲導犬への理解も少しは深まり、さらに視覚障害の紳士とも交流ができ、いい経験をした。

できることなら、あの女性とまた会いたい。そう思い続けていたのだが、ある日、はっと気づいた。

晴眼者は見知らぬ人と話しても、再会すれば顔見知りになれるが、視覚障害者は相手から声をかけてもらわないかぎり「一度話した人」との再会は困難なのだ。

それゆえあの女性は、そして視覚障害者の紳士は「一期一会」とまではいかないまでも、人との出合いをいっそう大切にしている、そんな方たちだったように思う。

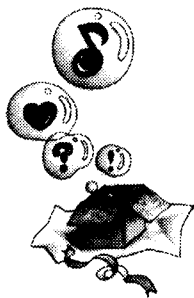
(え・荒田ゆり子)

言葉の力を贈りたい

ねじめ正一著

NHK出版

本体一五〇〇円＋税
二〇〇二年八月三十日第一刷発行



ませんか。

本の中ほどに、筆者と井伏さんのエピソードがありました。「小説を書く以上、商売（乾物屋）はやめるべきか」と訊ねたところ、たいていの人は文筆一本にすべきだとの意見だったが、井伏さんは「両方やって儲けなさい」と楽しそうに笑われたそうなのです。

この本には、二十三人の詩人が書いた詩が紹介されています。いちばん初めに、井伏鱒二さんの詩が載っていました。

埼玉県新座市 田口香織（37歳）

井伏鱒二というと、太宰治の遺書の下書きに「井伏さんは悪人です」と書かれてあったイメージが強くて心に残っていました。この本では、そのような感じが全くしないのです。

私は井伏さんのファンになりました。

私の好きな石垣りんさんも載っていました。

私は石垣さんの詩もさることながら「石垣りん」という名前がお気に入り

で、自分もこういうペンネームが欲しいと思います、いろいろと名前を考えた時期がありました。

ところが石垣さんの詩は、血の出るようなコトバ、詩を書くことは生きることそのものであったそうなのです。ここでもまた、私自身がお気楽な主婦であることを思い知らされたのでした。

実をいうと私は、詩集は二冊しか読んだことがなく、詩について好き嫌いのみで判断しているのです、よしあしは、さっぱりわかりません。ねじめさんから、本を通して「言葉の力」を贈られました。が、きちんと受けとめることができたか疑問です。

ただ私は、詩が少しだけ好きになりました。

（え・佐伯和泉）

ウチラデテミリヤアテドモナイガ
正月キブンガドコニモミエタ
トコロガ会ヒタイヒトモナク
アサガヤアタリデ大ザケノンダ
詳しい解説は本を読んでいただければと思いますが、なんとホンワカしている詩（正確には漢詩の訳）だと思

ラジオで感じる国、 アメリカ

埼玉県北埼玉郡 嵯峨久美子



いつもラジオから流れてくる放送が、ある日、急に聞こえなくなったら……。

九月二十六日の朝、夫と子どもを送り出し、ラジオをつけたときの私は、まさに、そんな場面に出くわしたのだ。私が毎日のように聴いているのは、AFN（米軍ラジオ放送）。

特に気に入っているのは、周波数の

810 KHZにちなんだ「イーグル・

エイト・テン」という音楽リクエスト

番組。七十年代、八十年代のヒット曲

や、映画の主題歌、全米の最新ヒット

チャートなど、幅広い音楽が流れる。

一昨年流行った、バックストリート

・ボーイズの「I WANT IT THAT

WAY」も、日本国内よりかなり早く、

この番組で何度も聴いて、大好きにな

った。

話を戻そう。

なぜ、急にAFNが入らなくなったのだろうか。リモコンでラジオの周波数を変えながら、TBSや文化放送、NHKなど入ることを確認していく。

どうやら、AFNだけがラジオから聴こえないようだ。

納得がいかないのです、二階にあるC

Dラジオカセをつけてみた。一階にあったのはMDコンポで、アンテナもさほど動かせないが、ラジオカセのほうは、アンテナを自由に動かせる。持って移動することもできる。

試してみたものの、雑音と、かすかにNHKの第2放送が聴こえるだけで、下で聴いたのと同じ。

新聞のラジオ欄を見れば、何かわかるかもしれない。そう思って、新聞を広げて見る。

FM・AMラジオ、地方テレビにBSテレビと、たくさんあるのに、肝心の『AFN』はどこにも見当たらない。以前は、ちゃんとあったのに。

テレビのニュースで、何か言っていたのだろうか。

私は、娘のお弁当作りと、夫と娘が七時前に出かけるのとで、毎朝五時半に起きている。そして、朝食やお弁当の支度をしながら、テレビのニュースを見ている。

だから、私の知る限りでは、今朝、AFNに関する話は、何も出なかった

と思う。

——もう少し、ようすをみてみよう。一時的に、電波障害が起きたのかもしれない——

ところが、次の日も、状況は変わらない。

聴かない、というのと、聴くことができない、というのでは、心理的にかなり違いがある。

そして、自分がこんなにAFNの放送を楽しみにしていたことに、改めて気がついた。

そもそも、この放送を聴き始めたのは、英語の勉強をしよう、と六年前に思ったからだだった。

初めのころは、単語を聴き取ることので精一杯だった。聞き覚えのある単語でも、意味となると、私の頭の中からスポーンと抜け落ちていて、「あれっ、何だっけ？」の繰り返し。

でも、四年前からNHKラジオの英語講座を聴き、テキストの英文を何度も音読するうちに、ラジオから流れてくる英語が、少しずつわかってきた。

折にふれ、公民館の短期英会話や、短大のオープン・カレッジの英会話のクラスで、カナダ人の先生のレッスンを受けたことも、私にとつてとてもプラスになったのだと思う。

今までわからなかった英語のコトバが、聴き取れる、言っている意味もわかってきた、ということは、私にとつて、ものすごく興奮するできごとだった。言葉を習得するって、こういうことだったのねっ、と。

そうなると、音楽だけでなく、英語のニュースや天気予報のほか、CMとして流れる、日本語教室の案内や基地周辺のお店のオープン情報など、聴くのが楽しくなってきた。

その他、子育て中のママへのカウンセリングの呼びかけや、IDカードの盗難に注意！なんていうのもあって、日本との違いを実感させられることも。

ところで、その日、つまり聴けなくなつて二日目の夜、帰宅した夫に、「ラジオのAFNが入らないの。他

局は入るのだけれど」と言うのと、

「あ、そうなんだよ。会社の行き帰り、車の中で聴こうと思ったんだけど、入らないよね、あれだけ。車は走っているから電波障害というより、放送していないんじゃないのかな」という返事が返ってきた。

そんなことってあるの?! 絶対おかしい。

翌日、私は手元にある『ぴあMAP/2002』で、テレビ・ラジオ局の電話番号のあるページをめくった。

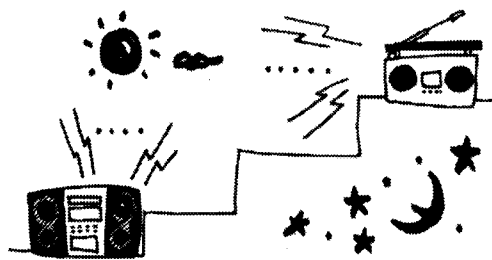
けれど、載っていない(米軍ラジオ放送だから、載ってるわけ、なかったんだだけ)。

番号案内に問い合わせ、ラジオ局に電話してみようかな、と本気でちょっと考えたりもした。

でも、やっぱり勇気がいる。それに、相手の言っていることがわかったとしても、とっさに、英語で質問や受け答えができるだろうか。

悔しいけれど、今の私の英語の力不

足を痛感し、もうしばらくようすをみていることにした。



毎日、朝と夜のテレビのニュースを見て、新聞に目を通し、ラジオのスイ

ッチを入れて確認する。そんな日が、二、三日続いた。

そして、ついにみつけた!

十月一日の朝日新聞に、小さな記事があった。

米軍ラジオAFN

十七日まで放送中断

「米軍横田基地は三十日、米軍ラジオ放送の『AFN-Tokyo』を十月十七日まで中断すると発表した」

たったこれだけ。なぜ中断するのか、詳細はわからない。

もつと不思議なのは、誰も騒いだようすがないことだ。ある日、ほんとに急に放送が消えたのに。

今日は十月二十三日。AFNの放送も再開されている。

でも以前はたぶん、耳にしたことがなかったこんな言葉が流れている。

「テロリストは、いつでも、どこにでもいる。自分の身を守るように」と。

(え・イシノフミ)

あなたは主婦が好きですか？



石川結貴著
中央論新社
本体1400円+税

著者は結婚後の自分の問題を見つめ、「わいふ」への投稿やミニコミ誌発行などを経てフリーライターになった。取材で見聞きしてきた主婦の現実、家族や社会の問題、「主婦業ライター」と言われて経験する当惑や疑問を、「主婦」をキーワードにまとめた本。現代の主婦についてあらゆる角度から考察されている。

「主婦」という呼称には、本人と周囲の人それぞれに、先入観や既成概念が多分に含まれている。主婦であることを誇る人もいれば卑下する人もいるが、主婦という名前に束ねられずに、「主婦力」には自信を持つとう！ 筆者の冷静で熱いメッセージが伝わる本。

(A)

椿の咲く日まで



秦野純一著
日本評論社
本体1600円+税

骨髄移植。よく耳にする言葉だが、正確な知識を持つている人はそれほどいないのではないだろうか。

骨髄バンクを四国地方に広めるために企画されたのが、「ツール・ド・空海」という四国の八十八か所の寺院をまわる、自転車ラリーである。才能あふれる方々の努力に、頭が下がる。それなのに、骨髄移植推進財団と日赤の縄張り意識は何だ。腹が立つ。

引用されている、白血病で亡くなった和泉省作氏の童話が、優しくて切ない。彼が皆から愛されていたためだろう。また、骨髄提供の手続きの煩雑さや、ドナーの重すぎる負担にも詳しく触れている。

(T)

勇気づけの心理学



岩井俊憲著
金子書房
本体1800円+税

現在の日本は「勇気欠乏症」ともいえる状況。国としてばかりでなく、親は子を、上司は部下の「やる気」を知らず知らずのうちにくじいていることがいかに多いか。その結果、人々の自己否定の気分が強くなり、最悪の場合は自殺にまで追い込まれてしまう。

どうしたらそんな過ちに陥らずに、人間同士が勇気づけあい、幸福に暮らせるようになるだろうか。

アドラー心理学に基づくこの一冊は、「勇気づけ」の必要を理論的に説くと同時に、カウンセラーとしての豊富な実例にもとづいて「勇気づけ」のやり方を具体的に教えてくれるすばらしい実用書でもある。

(N)

ブ

ツ

ク

情

報

あ
なたへ

ス
マッシュ

「もしかしてアダルトチ
ルドレン?」について

川崎市多摩区 鈴木貴子

「もったいない」

二九八号のみわママ様へ。なんだ
かもったいないなあと思いました。
人間関係に悩んでいて、ご自分を
「アダルトチルドレン」ではないかと
分析していらっしゃる。

私も人間関係で悩んできた人生な
のでアドバイスなどはできないので

すが、「幼稚園ママとの付き合い……
挨拶のみ」というのが気になりまし
た。園に直接お迎えに行っているの
ですよ? 文面からすると。

私も今年から一人息子を年少から
入園させたのですが、園バス利用で
バスが家の前まで来てくれるので他
の母さん方となかなか会う機会が
ないので。園のようすもそんなに
わからない。そんなわけでたまに直
接迎えに行つて、他のお母さんと話
をしたりします。幸いうちのクラス
は役員さんが気を使ってよく親睦会
を開いてくれるので、そこで話が合
ったり、子どもが仲のよさそうな子

のママをうちに呼んだりしてお友だ
ちを増やそうとしています。でも毎
日お迎えに行っているお母さん同士
はとても仲がいいんですよね、家も
近いせいでしょうけど、毎日顔を合
わせていれば、仲よくなるきつかけ
はある気がします。私からみると。
「私と子どもの存在に気づいて仲よく
して……」とありますけど、そこま
で人に期待するのはどうでしょう
か?

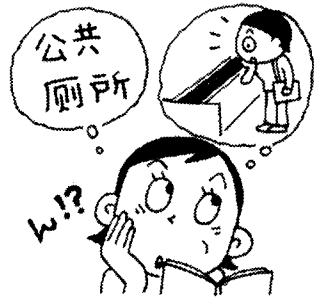
かく言う私も入園前に育児サーク
ルに入ったばかりのころ、他の人た
ちが盛り上がりつつある輪の中に入れ
ず、どうして話しかけてもらえない
のかなーと思ったこともありまし
た。だんだん慣れていって、話してみ
ると決して意地悪な人たちではないの
です。そのうち自分も古株になつて
いって気がついたのですが、自分が
楽しくおしゃべりするのに夢中でそ
れ以外の人が眼に入らないのです。
もちろん、中にはぼつんとしている

人に声をかけてくれる世話好きな人もいるでしょうが、そんな人を待っているより自分で輪の中に飛び込んでいったほうが早い。もちろん、それができれば苦労はしないんですね。私も人見知りするほうなので難しいものがありました。でも何もしないと何も始まらないんだなあというのが私の経験から得た答えです。

「わいふ」は 役に立つ！

神奈川県藤沢市 本間美恵

わいふ二九八号が届いたのが中国旅行に出る一週間前。出発まで一緒に出かける人たちと話題になったのがトイレのこと。トイレにドアがない、ティッシュがない。トイレに入っている間、交替でトイレの前にたっている必要があるなど、最大の関心事でした。



伊藤琴子さんの書かれた「中国—トイレの思い出」はとても参考になりました。特に典型的な中国式トイレについての写真及びその説明は役に立ちました。初めて接していたらしばし当惑したことは確かです。

書かれてある内容の中で少し違ったものがあります。もっとも私は大連、旅順、瀋陽と回ったのですが、町中は中国人にも日本人にもほとんどスカート姿はみかけませんでした。トイレは洋式もあり、移動の前にホテル、空港などで用を足して

いけばほとんど困ることはありませんでした。紙はあつたりなかったりで、ティッシュを持ち歩くことは本当に大切な助言でした。みんなニコニコと親切でとてもよかったです。帰ってきて、武藤徳子さんの「ひとすじの深い川（ズバリ一言）」を読んでギョッとしましたが、でもとても楽しかった。

「夫の転職大作戦」の 岡島さんへ

奈良県生駒郡 高松恭子

夫の転職大作戦を読み、よく思い切られたなあと感じました。私の身近なところでも夫のランニングクラブの友人二人が転職に踏み切っている。どちらも五十歳を過ぎてからで、一人は外資系企業に、もう一人も一部上場企業に勤めていた。

二人は岡鳥さんのご主人同様、職業訓練校に通い、それぞれ庭師と大工になった。この二人が今どれほど生き生きハツラツとしているかぜひお伝えしたくてペンを取った。

もつともこの二人は、すでに子どもは独立し、それ相当の年齢に応じた退職金ももらっている（と思う）ので転職といっても悲壮感はない。それを思うと岡鳥さんのご夫妻協力しての転職作戦には胸を打たれるし、拍手を送りたい気持ちでいっぱいだ。

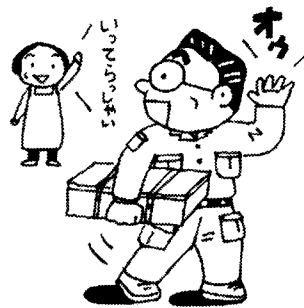
庭師になったKさんは次々資格を取り、今年は政府から派遣されてウルクアイで日本庭園を作る仕事をしてきた。四年前、彼が庭師になって間もないころ、植えてもらったキンモクセイと伊予サザンカはすくすくと伸びている。ときどきやって来ては、子どもを慈しむような目で満足そうに眺めている。決まって言うことは、

「最高！ 辞めてよかった。木を植えるっていい仕事だよ」

もう一人の大工になったTさん、初仕事は私が紹介した。わいふ友だちの家の家具を地震に備えて固定することだった。双方から喜んでいただけ嬉しかった。大工さんには職人気質で頑固な方もいるようだが、長年営業で鍛えたTさんは人当たりがソフトで、お客の話をよく聞いてくれると評判で、結構忙しくしている。小さな仕事でも心を込めて……を肝に銘じているという。

彼が仕事を辞めたのは娘の結婚前だった。お嬢さんは某大学教授の息子さんとの結婚が決まっており、お前の結婚に父さんの肩書が必要かと聞いたところ、いらないう返事で転職を決意したそうだ。お嬢さんは、「彼はお父さんの肩書で私を選んだのではないわ」と言いたかったのだろう。いずれにしても転職には家族の理解が欠かせないというのを実感した。そして本人の強い意志と家族の協力があれば、何とかなるものだという思いも持っている。かつ

て私の父がそうであったように。職業をがらりと変えることは大変だろうと思う。しかし前の仕事の経



験が役立つことも少なくないような気がする。岡鳥氏も営業職を生かして面接をクリアされたように、仕事でもきつとそれを生かされるに違いない。

命あるものに携わる仕事つきつとやりがいがあると思いますよ。

女たちのラジオジャック

大阪市城東区 布施幸子

テープで楽しく聴かせていただきました。「少子化は悪くない！」と「年金の話」、とくに印象に残りました。

私は、長女を幼く亡くし、長男の出産直後に手術して、体力的に無理で結局ひとりっ子を育てることになりました。その息子がまだ独身です。で、「少子化は悪くない！」に賛成です、身勝手な賛成かもしれませんが。

明治のはじめ人口三千万だった日本列島に現在は一億二千万人、多すぎます。少子化を憂う声には「老人が多すぎる」が隠れているのだらうと、老女である私はひがみまです。若者が減ると国の活力が消える、ともよく耳にしますから。

現在、一人の老人を五人の勤労者が支えているが、二、三年後には二人で一人が支えねばならない。年金についての話です。

「困る！」と若者から聞いています。でも疑問なのは私の場合、子どもが産まれるまで十年余り働いて厚生年金を払っていたし、厚生年金脱



退後はずっと国民年金を払ってききました。「今の額よりずっと安かった」と言われますが当時としては、「そんな先のことよりこのお金を世帯の足しに使えたら」と思った金額でした。そのころは集金に來られて、集金人に説得されて払いました。タダで恵んでもらうってとは思えぬのですが、どうでしょうか。

それに、年金受給者はできうる限り子どもに迷惑をかけず暮らしている。どころか、むしろ世帯ざかりの子どもが暮らしを助けています。私の知る限りでは、米を送ったり、孫の学費を払ってやったり、保険を払ってやったりしています。共働きの場合孫を預かっている人もいます。

昔は、高等小学校卒ほとんどが十代で就労し、親の生計を助けていました。暮らしに困らぬ家でも「飯代」を出すのは当たり前でしたし、結婚しても仕送りをするのが珍しくありませんでした。今はそれが「珍しく」なっています。

親類の取り込みごとでも、老人は義理を欠かせないと相応の出費に踏みきるけれど、子の世代は「義理など古くさい」と無視する傾向が多いのを、この一年とりわけ身内に不幸が続いた私は実感しました。

それだけ老親が肩代わりしているのであれば、税や社会保険料が増えても「支えてやってる」と恩に着せられることはないのでは？

「ラジオジャック」のお話の中で、「高齢者も働きたい人は働ける世を」と聴きましたが、「税金が納められるほど働きたい」と考えている高齢者は大勢います。仕事がないのです。

また、勉強嫌いの子どもに勉強を強制して進学させるより、十代から働ける世の中にするよう考えるのも一法ではないでしょうか。仕事の中で、嫌でも勉強せねばならないこと、それに好きな仕事をとおしてならがらんばれる学習、修練はいっぱいあると思うのです。考えてみればいかに立派な学校を出た秀才でも、一生の

うちにあれもこれもできるわけではありませぬ。まあこれも、わが息子がエリートなら念頭にない発想でしょう。べつの考え方が山ほどあることはわかっております。

年金受給については、現役高級取りに劣らぬ高額受給者（十二％と聞いています）と月額一万円ほどの受給者との差が問題です。しかも年額十八万（月一万五千元）以下でも介護保険料を払わなければならぬことに驚いています。ラジオジャックのお話で、遺族年金が妻でなく愛人のほうへ行く場合があることを初めて知りまして、亡夫にあらためて感謝いたしました。

以上、「少子化」「年金」についてのみ書かせていただきましたが、他の話題も考えさせられることばかりでした。「情報コーナー」に書かれていたとおり「すごく面白い」です。ときに「お山の大将の専業主婦」など耳が痛い内容もありましたけれど。

（え・小沢恵子）

**お友だちに「わいふ」を
おすすめください**

新しい定期購読者をご紹介くださった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介くださるごとに誌代プラス送料とも一号延長。

**「わいふ」年間分を
プレゼントにお使ください**

●御結婚、赤ちゃん誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションどうぞ。お申し込みいただければ、新読者に、送り主のお名前とプレゼントのおしらせを同封の上、一年分、計六回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介の場合と同様に、お一人につき一号分延長させていただきます。

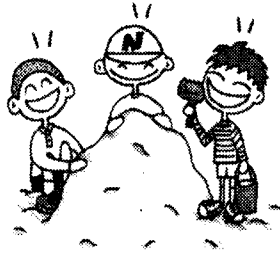
●また十冊以上ご購入くだされば割引がございます。

音羽「お受験」殺人

歌代幸子著

新潮社

本体一四〇〇円＋税
二〇〇二年九月二十五日発行



茨城県龍ヶ崎市 柴尾恵子

事件が報道されたときから、被害者の罪もない春奈ちゃんには誠に気の毒ではあるが、なぜか、山田みつ子への同情を禁じえなかった。裁判を傍聴しようともでは思わなかったが、彼女の子どもたちはどうしているのだろうか、折に触れ考えていた。

この本を読むと、やはり、やはりと

思うことが多く、傍聴席で涙を拭う女性が多かったという点でも共感してしまふ。母親への憎しみなのに、なぜ春奈ちゃんを手にかけることになってしまったのか、その心の経緯は本人にも

誰にも未だにわからないままだ。が、日常のささいなできごとには二人の間に多くの食い違いがある。「私が嫌いでいいから子どもは傷つけないで、受け入れて」という山田みつ子の心の叫びが聞こえてくるようである。彼女はここでの人の輪に自然に溶け込めず、相当の努力、忍耐をし、ストレスから子どもを叩いたり、子どもを乗せた自転車で走り回ったりしている。私はマンションで子どもの小さなできごとがきっかけで仲間外れにされ、辛い二年間の後、働き始め、保育園で母子ともに救われたのだが、山田みつ

子も長男が嫌がっても夫が反対しても自分を押し通すチャンスが何回かあったのにと残念でならない。

そして夫の三度の食事の世話というのがますます彼女を縛りつける。自営業の夫を持つ他の女性の例が書かれてあり、母乳もやれずに夫の食事作りというくだりがある。サラリーマンの私の夫に話したら「子どもは二人の宝だから子ども優先が当たり前、親父の飯なんか大人だろう。自分で作りゃいいじゃないか」との返事。私は相当幸せな主婦であり母親なのかもしれないと思ってしまった。

被害者と加害者、二人の出会いには公園だった。公園デビュー、公園ジプシーの言葉がいつ生まれただかも書かれてあり興味深い。

(元・広瀬のりこ)

てつま先立ち^上

— 地方議員としての8年間 —

長崎県長崎市 中田慶子 (52歳)

「議員をやっているってどんな気分？」と聞かれるたびに、「毎日ハイヒールをはいてつま先立ちを続けてみたい気分よ」と答えていた。本当はハイヒールなんかはいたこともないし、もっぱらスニーカーで自転車という日常なのだが、少なくとも気分はそのようなものだった。つまり、いつも精一杯の背伸びを強いられているような精神状態といったらいいだろうか。

地方議会で審議すべき内容はおどろくほど広範囲だ。学校、上下水道、道路といったハードの整備、地震や不況への対策、かとおもうと犬猫の避妊費用の補助、ゴミの分別方法、成人式の内容の是非、学校カウンセラーの配置、公園の使い方、地下水汚染、老人福祉、少子化対策、奇想天外なものも混じる市民からの陳情請願の審議など、何が飛び出してくるかわからない。まさに政治は生活そのものである。

一介の主婦からいきなり議会に飛び込んだ以上「わかりません」とは口が裂けても言いたくないと、何かあるた



議会の合間に街頭で活動報告をかかさない(1993年)



初当選決定！
トップ当選でみなウルウル

ハイヒールはい

び資料を探し、仲間たち（生活者ネットワークのメンバー、通称ネット）とも一から勉強する一方で、議会の情報をかいつまんでネットに説明し、議案への賛否を決める。

議会の場では質問の持ち時間を精一杯活用できるように、四苦八苦しながら直前まで原稿を何度も書き直して準備する。必要に応じて行政の人たちに聞き取りをし、他の議員とも相談（根回しというが）する。勉強が足りなければ行政マンからは、あきらかに馬鹿にされる。面と向かってはセンセイ呼ばわりしていても、後ろを向いたら舌を出しているのが見え見えだ。

古参の議員は「一期や二期は見習い同然、議員は三期目からが本物。二期交代なんて議会をなめている」と最初から言い切った。「だからシロウトは困るんだよな」と言われるのもしやくで、毎日が緊張の連続。有権者の目も厳しい。好意的な目ばかりとは限らない。何かあれば「議員のくせに」という視線を感じる。いくら背伸びをして

● ハイヒールはいてつま先立ち



2回目の当選。毎回当選証書なるものが渡される（1995年4月）



2回目の選挙。団地の一角で演説（借りものの赤いスーツで。1995年）

もしたりない、そんな気分が八年間を過ぎた。今思い返せばあの緊張感もなかなかよかった。大学時代ですらあんなに熱心に勉強したことはなかったように思う。

ゼロから3へ——社会は変わる

私が東京都下のF市（人口二十三万人）で市議会議員になったのは一九九一年の四月である。

F市にはその八年前、長女の小学校入学を機に引越してきた。田畑や緑が多く子育てにはいいところだろうとの判断だった。

団地には同世代が多く、すぐに子育て仲間がたくさんできた。生協の共同購入を始めたり、趣味のグループや読書会をしたり、病気のときは子どもを預けあい、場合によっては米や調味料の貸し借りもして、核家族の子育て環境としては理想的な長屋のような助け合いができて楽しかった。

一九八七年から八九年は、夫の留学

にともない家族でノルウェーに滞在した。帰国して二年目、やっと子どものことや生活が落ち着いて矢先に議員になったわけである。私は四十一歳で娘たちは小五と中二だった。

立候補の発端は当時加入していた生協が母体のグループが、あちこちで女性議員を出す運動をしており、その候補者として説得されたのがきっかけ。候補者として必要な条件は小さい子供がない、介護すべき親がない、夫が反対しないなど、要するに女が世に出られない理由の数々が無いということ。もちろん求めるべき理想、主張があるのは大前提ではあるのだが。

しかしそれから八年後の一九九九年になると事情はがらりと変わって、ネットの候補者でも幼児がいるのはもちろん妊娠中の人すらいたし、介護もハードルではなくなっていた。喜ばしい変化である。社会は急速に変わりつつあることが、この一つをとってもわかる。

立候補を決めたのが選挙の五か月前

の十一月、遅いスタートだった。選挙にかかった費用は準備期間のすべてを含めて三〇〇万円ほどで（事務所費、選挙中のスーツ代なども含む）、候補者の負担はゼロ。すべてカンパやバザーとボランティアで賄った。ぞっとするようなハードな毎日だったが、私はかりでなく、かかわった二十数人のメンバーのすべてが初めての選挙へのかわりに戸惑いながら寒風の中、支持者を増やす活動に文字どおり足を棒にした。

私は手厳しい友人らに「演説がへただ」「服装が地味、もつとなんとかして」「笑顔が足りない」「化粧がへた」「アピール力がない」など、まあよくもここまで言ってくれるわと頭にくるほど、毎日毎日善意のご指導を受けて、寒い駅頭に立ったり、ミニ集会をはしごして駆け回り、全員の靴と自転車のタイヤがすり減る毎日が無我夢中で過ぎていった。

F市は古い神社を中心に栄え、二つの大企業の工場があり企業城下町とも

いわれ、三十人が定数の議会は保守と企業の議員が圧倒的な強さを誇っていた。他は政党の議員がほとんどだったから「市民の手に政治を取り戻そう」という私たちの訴えは新鮮に映ったらしい。水面下では好意的に受けとめられたようだった。

水面下というのは、農家のお嫁さんたちや企業人の夫を持つ妻たちは、決して表立って本心を明かしてはくれなかったからである。

その後四年ごとに選挙をするたびに、当初態度をあらわにしなかった女性たちが「今度はあなたたちを応援するわ」「夫にも言ってみるね」と変化していったのは感激的だった。

初めての選挙で訴えた公約は、福祉の充実や給食への地場産野菜の導入、ゴミの分別収集推進とリサイクルといった内容だったので、「そんなことで票が取れるものか」と支援者からさえ批判を受けたほどだった。

いまや環境、福祉、食の安全は、BSE、雪印事件、温暖化、介護保険な

どで分かるように政治のメインの課題になっており、F市でも地場産野菜や分別収集も当たり前になっているのだから、これもたつた十年ほどで世の中確かに変わったと思う。

初めての選挙の結果は、三十人中トップという信じられない快挙で、小さな選挙事務所は正確の電話で涙と歓声に埋まった。しかし、これでようやく議会への切符を手にしただけに過ぎ



正月に夫と。ほっとするひととき（1993年）



カンボジアヘスタディツアー。プノンペン周辺の農村で
（水質調査のためとった水を手に）

ず、本当の勝負はこのあと延々と続くのだ。

四年後、もう一人の候補者を立て、二人一緒に当選、念願の交渉会派の設立（F市議会で二人以上いないと正式な会派にはなれない）。そしてさらに四年後の一九九九年には、私は二期八年という当初からの約束に従って現職を降り、かわりに新人二人を立てて、合わせて三人当選というところへ漕ぎつけた。市民の議席がゼロから3へ！八年間の思い出が走馬灯のようによぎった瞬間だった。

議会は典型的男社会だ

入ってみれば議会は男社会。それも数十年遅れた男社会だった。議場で座る席順も新人は前の低い席、当選回数が多い先輩は後ろの高い席、まるで猿山のようにだと思つた。

議会内で同じ考えをもつグループを会派と呼ぶが、その会派の人数で控え室の部屋の大きさも決まるし、議長や

常任委員会の委員長といった重要ポストは大会派から順に割り振られる。こういうポストは名誉心をくすぐるのはもちろん、市民の前に出る機会も多く、名刺の貫禄も違つてきて、次の選挙に大きなメリットになる。また、行政マンも長がつく相手にはたいへん気を使う。つまりは、住民要望の仲介などには有効なポストといえる。

したがって、毎年議長選挙の時期には、あつちでこそこそ、こつちでこそこそ、伝令が走り回り、大会派同士で人事の決着がつくまでは、こちら弱小会派はつんぼさじきで、半日以上も控え室でひたすら待機するのみといったことを毎年繰り返している。有権者にはとても見せられない光景だ。

その結果、議長などのポストを得た方々は何かのときにご祝儀を出す立場になり、そのご祝儀が少ないと「あれは議長の器じゃねえな」とか陰口をたたかれるのだから男社会はほんとに悲惨だ。いまだに全国の議会でこのポスト争奪戦が行われているかと思うと

おかしくなる。

議会は議論をする場所、と信じて入ったが大間違い。地方議会は圧倒的に市長の与党が多いので、すべては市長の思うままというのが現実に近い。市長の権限の大きさに対して議会の権限は意外に小さい。

行政はすべて予算で決まる。予算を作るのは市長、審議するのは議会となれば、できることは限られている。議会にかかる前に大きな会派と市長（行政マン）の間ですべては決まっている。

今の議会のあり方では、せいぜいそこに割り込んで、市民の視点で納得がいかにないことに異議を唱えることぐらしかできない。しかしそれでも、変だと思つた情報をこまめに市民に伝え、またできるだけ納得のいく対案を出していくことで、税金を有効に使うことができる。

「発言が多すぎる」「質問が長すぎる」とか言われながらも、しつこく食い下がりがつづけた八年間だった。



複数議席をめざして街頭演説
手話通訳はまだめずらしかった



2人当選の感激！

議員と支援者の関係とは？

いわゆるムネオ疑惑で政治家の役割に関する議論が毎日賑やかにマスコミを飾っていたが、保守・革新（この言葉も古いが他にいいようがない）にかかわらず市議会議員のレベルでも「支持者の面倒見がいい議員がよい議員である」という構図は確固たるものがある。面倒を見ることが次の選挙の票固めに確実につながるのだから、議員にとってこれほど大事な活動はない。それをするなどいわれたらみな途方に暮れるのではないだろうか。

確かに自分の理想の実現のために次期も当選することは大切である。そう思うと有権者の顔がすべて票に見えてしまうのが実感で、私自身も次期の選挙を意識したとたんにそういう感じを持ったことがあり、自分でぞっとしたのでよくわかる。

支援者の面倒を見るというのは実に甘い誘惑である。しかし議員の役目は

「市民の代表という立場で公正に行政をチェックし、税金の配分が適切かどうか判断する」に尽きるのではないだろうか。すると実はムネオ的活動は議員のありかたの根幹を揺るがしていることになる。

この甘い誘惑から議員本来の役割を守るために、ネットは個人的な頼みには支援者といえども応じないというルールを最初から作っていた。

当然、支援者個人から市政にかかわるいろいろな相談が持ちかけられるが、まずネットの中で討議して、個人的な問題でもそれが普遍的な意義を持つと判断できれば、学習会をしたり、行政と話し合ったりして問題解決へ動いた。

融通の利かないグループだと思った人もいただろうし、役に立たない議員と思われたかもしれない。しかし支援者の個人個人の役に立つために議員があるのではないということ、早い段階からはつきりさせていたことは、とてもよかつたと思っっている。

そのせいかどうか、任期中を通じて、保育所に入れてくれ、老人ホームの待ちの順番を上げてくれ、仕事の口利きを、といった依頼はほとんどなかった。また行政の人からも、「ネットさんは無理難題を持ち込んできませんね」と一定の評価を得ていたと思う。

これは私たちのグループが個人の議員を出して終わりとするのではなく、一緒に活動して一つの議席を共有するという意識を持っており、次の選挙も一緒に担うという覚悟ができていたからこそ、ここまで徹底できたことだと思う。

議員と行政の関係とは？

議員になってびつくりしたことはそれほどあるが、なかでも行政マンの方たちの議員への気の使いようはすごい。「センセイ」呼ばわりされるたびに「一回百円の罰金ですよ」と言ってもなかなかやめてくれない人がいる。一介の市民だったころは、市役所で担当

者をつかまえて話を聞くことすら至難の技だったのに。議員になってからは必要な資料があれば電話一つで持ってきてくれ、丁寧に説明もしてくれる。

市で新しく始める事業があるときは、何とかスムーズに議会で認めてもらいたいので、事前に懇切丁寧に説明に来て「よろしく」という。

何がよろしくなのかと思えば、要するに議会でごまごまとつついた質問をして、足を引つ張らないでほしいということだ。問題点は議会の場で堂々と議論をすればいいのにと思うが、議会で取り上げられること自体をひどく嫌うのだ。なまじ議論になれば、わけのわからない議員が中途半端に口を出したあげく臍を曲げて、通るものも通らなくなることもあるようだ。結局、無風議会がいちばんということになる。

議員のほうも、普段から行政の言うことを通してやっていけば、自分の頼みごとのときに快く無理を聞いてもらえるので、双方の恩の売り合いは相当なものである。

小さな市役所でのささやかなやりとりは、きつと霞が関で数百倍の規模で行われていることだろう。なかには骨のある行政マンもいて、こっちとこっち議論をしてくるし、言いたいこ

とを言い合う関係が作れる場合もある。しかしそういう人は少ないというのが実感だった。

(つづく)
(写真提供・筆者)



議会の建設環境委員会でゴミの燃料プラントの見学
大分県津久見市（1995年7月）

自費出版は「わいふ」くどいぞー！

「わいふ」編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

イラストも用意できますし、お書きになれない方のために、聞き書きのまとめもいたします。

費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実に安いんです。事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

ちなみに最近では、読者からのご依頼により、「紅の雲」、「春のかたみ」、「出会いに合掌して」などを制作いたしました。

皆さまも人生の記念に計画されてはいかがでしょう。

ズバリ一言

お天道様に 恥じないように

東京都 田口恵子（38歳）

次男が生まれたばかりで、田舎から母が手伝いに来てくれていたときのことだ。田舎育ちで、自宅にシャッター付きの車庫のある母には、自転車に鍵をかける習慣などなかった。彼女は、

私の自転車を買い物で使った後、いつもと同じように鍵をかけずに駐輪した。翌日、私の自転車は盗まれた。そのとき、私は、

「まったく、お母さんが鍵をかけたかったからこんなことになったんじゃない」

と、ひどく母を責めた。いつもは厚顔な母もこのときばかりは、恐縮して、かわいそうなくらいだった。そんなようすをみかねたのか、普段無口な夫が言った。

「お義母さんを責めるのは間違ってるよ。悪いのは盗んだ奴なんだから」
そうだった。母はちっとも悪くない。夫のおかげで当たり前のことに気がついた。

最近、大手企業の不正事件が起こるたびに私はこの一件を思い出す。マスコミは必ずこう言う。

「食品の不正表示がおきたのは、法律の罰則が甘かったからだ」

「BSEの企業による不正買収取りおきたのは、行政の買収取り対策に

問題があったせいだ」

新聞の読者投書などにも同じような考えをよくみかける。不正表示に伴うスーパールの返金騒動のときでさえ、

「日本人のモラル低下は嘆かわしいが、そのような行動を誘発させた企業の行動はもっと悪い」

などといった新聞もあった。

確かに、不正が起きた原因や誘因を分析し、行政や法などを監視するのは大切だと思う。だが、

「どんな理由や状況があろうとも、悪いことは絶対いけないのだ」

という論調が、新聞にもテレビにもほとんど見られないのに、私は、一種の恐怖すら覚えた。

こういった考え方の背景には、まず、高度経済成長期以来の利益第一主義がある。

「儲けるチャンスがあるときは、なにをしても、儲けにや損」

と、いった考え方。男社会が産んだ悪しき慣習とも言える。これは、経済社会ばかりでなくて、要領のよさが尊重

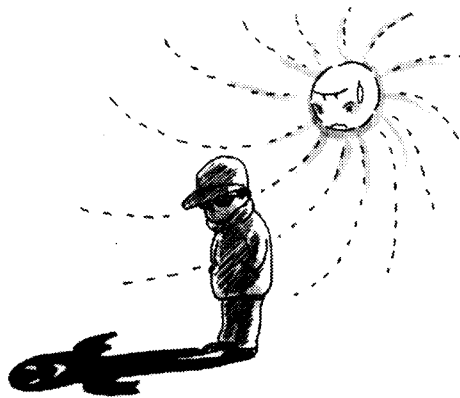
される普段の生活にもあてはまるだろう。

もうひとつの背景は、過保護な日本人の甘え体質なのではないだろうか。夫は、

「マスコミは行政が、責めても何の害もない対象だから責めるんだよ。広告のスポンサーでもないし、責めても弱いものイジメだと言って批判もされないからね」

と言った。私は、自転車盗難で母を責めたときのことを思い出した。母を責めても安心だもの。しかも、私は母に甘えているからぐだぐだ言えたのだ。日本人は、「お上」に甘えずぎていないだろうか。甘えても、期待したものは全然与えてくれないのに。

さらに言えば、自然がまわりから減ったことも関係しているかもしれない。都会の人が道で転んだら、道路工事のやり方や、道の整備をなかなかしない役所などに責任を転嫁することが多いらしい。でも、山で転んだ人は、誰のせいにもできない。自分の責任な



のだ。この国の人には、自己責任という概念が乏しい気がする。

このままで行くと、「レイプされたのは、挑発的な服を着ていた女性にも問題がある」とか、「イジメは、いじめられるほうにも問題がある」といったおかしな考え方が、どんどんまかり通るようになってしまわないだろうか。

話は少しそれてしまうが、前に企業のお客様相談窓口で働いていたときのこと、

「おたくの営業車に乗った人が、西湖にパンの紙袋を捨てました。名前はわかりませんが注意してください」という苦情があった。担当地区などからすぐ社員は誰なのかバレた。そのとき、同僚がこう言った。

「小さいころ、どんなことをしていたても、お天道様とか神様が見てるよ、って母に言われてきたけど、本当ね」
企業も今さらながら、自主行動規準とかコンプライアンス経営とか言っているけれど、すべての基本はここにあ

るような気がする。

「お天道様に恥ずかしくないこと」を価値の規準にして行動することだ。そうすれば、多少の誘惑があったって悪いことはできない。人のせいにもできないのだ。

えらそうに言いながらも、いつまでも未熟な私なのだけど、自分も含めてみんながそうできたらいいな、と思う。

危機意識から

鹿児島県始良郡 石井みち

六月に小学校で環境講演会があった。地球環境フォーラムの塩川氏の話は二時間ほどだったが、もつともつと聞きたいと思わせるものだった。

マスコミから毎日のように地球温暖化、環境ホルモン、ダイオキシン汚染といった情報を得ているが、たとえばの事例が身近なところだと、ああ、そこまですべて知っているのかという危機意識

が高まる。

環境ホルモンの影響で隣の国分市の貝は百パーセント奇形であるという報告にどきっとした。

日本が毎日、世界の一千万人の飢餓を救えるぐらいの生ゴミの量を捨てている現状、中国の温度があと二度上昇

すると七八パーセントの米がなくなるという予測、穀物自給率二六パーセントの日本の行く末まで聞くと自然、私たちの子どもが大きくなったころはどうなっているのだろう!?と暗たんたる気持ちになった。

今年の正月の新聞で南極大陸の西の



部分の水が溶け出していることは知っていたが、来たる二〇二五年には五メートル前後の海面上昇で津波の心配も出て、食糧危機になるだろうとの説明をかみしめるようにして聞いた。

ＯＨＰでオーストリアの子どもたちが耳の後ろをおおったつばのある帽子で遊んでいる姿を見た。オーストリアの人たちはUVの測定器をペンダントのようにぶら下げて生活しているらしい。昔と違ってオゾン層が破壊されているから、午前十時から午後三時にかけて子どもたちが戸外で遊ぶことは危険で、それは日本に於いても同じことらしい。

つい最近読んだ地元のミニコミ紙で紫外線の影響により鹿児島県の人の四十代の肌年齢と東北の人の六十代のそれが同じというグラフを見てもショックだった。この十年で白内障も皮膚ガンも今までの三倍増えているとか……

先進国は「安全が立証されていないから規制する」やり方をとるのに対し、

日本や発展途上国は「危険が立証されていないから規制しない」という姿勢をとっていることにも怒りをおぼえた。

危機意識にかられた私たち有志は、メンバールのひとこえで環境サークルを結成した。話を聞いて熱くなったこのときこそ、行動を起こさねばという気持ちがお互いにつながった。

小学校の校長先生も話のわかる方で講演会の翌日にはプールの横に簡易テントをつけてくださった。

行動第一弾として七月に町内のリサイクルセンターに向き（私たちメンバー以外の人にも声をかけ）、今の街のゴミの現状を知る機会を作った。私に住む隼人町ではリサイクルに厳しくなっており、分別ルールの徹底がなされている。ルール違反のゴミにはシールを貼って、リサイクル小屋に置いたままにして出した本人に取りに来させる仕組みになっている。この近年の双方の努力により隼人町の天降川あまのりがわには天然の鮎あやが戻ってきたという嬉しい報告を得

た。

行動第二弾として『身近なところで環境を』というテーマに添ってさきの塩川氏に講演をいただいた。私たちメンバー八人以外に二十七人も集まり、皆がくい入るようにして先生の話を聞いている姿に満足感が湧いた。

七月から月一回、定例会を開きお互いに環境についての実践のやり方や情報を教え合って学んでいっている。それで少しずつ小学校のほうにも私たちが学び得たことを提案できたらと思っている。たとえば、グラウンドで昼休みに遊ぶときや体育の時間には、子どもたちが日焼け止めクリームをつけて活動するほうがよいといったことを――

講師には子どもたちは未来への預かりものだというメッセージをいただきたい。それを忘れてはならないから、できることから始めたい。

(え・栗田笑)

恐怖のミニミニトレッキング

愛媛県 馬場紹美 (31歳)

ネパールへ

四年ほど前、私は夫に連れられて、
はじめてネパールという国へ行きました。
ネパールといえばヒマラヤ、そして
トレッキング(と、私は連想するの
ですが……)。私はいつも、ネパール
中のトレッキングルートであらかた制
覇した夫から、輝かしい思い出話の
数々を聞かされていたので、トレッキ
ングに行ってみたくて思っていました。

私たち二人がネパールへ入国したの
は九月の末。とりあえずタイのバンコ
クへ飛び、バンコクの安チケツト屋で、
ネパールの首都、カトマンズ行き航空
券を購入するのがいちばん安上がり
な方法。ところが、翌十月は、ネパー
ルのお正月のような、お祭り月間なの
で、ネパール行きのチケツトを入手す
るのに少々苦労しました。なぜなら日
本と同じで、やはりお正月は外国へ出
稼ぎに出ているネパール人たちも里帰
りをするからです。しかも十月ともな

ると、完全に雨期も終え、厳しいヒマ
ラヤの冬が来るまでの、ほんの束の間
のトレッキングベストシーズンでもあ
るのです。夫いわく雨期前は暑くてイ
ヤ(山の上は寒いのですが)、雨期の
最中はガケ崩れなど、ルートが荒れる
のでイヤ、となるとこのシーズンがい
ちばん好き、となるそうです。と、当
然トレッキング目当ての西洋人もこの
時期、ドドドっつとネパールへ向かう
わけで、かなりの込みようになるの
です。

山はカトマンズ

やっとなにしたチケツトで、首都カ
トマンズへ飛び、数日カトマンズの町
をブラブラしてから、私たちはバスで
ポカラという町へ移動しました。

カトマンズからポカラへ向かうバス
から見える景色は、よく日本に似てい
ると言われます。じゃあ、日本のどこ
に似てるのだろうといういろいろ考える
と、そう、四国のうんと山奥の、過疎
化してひっそりと静まりかえった、



ポカラの朝。はじめて晴れた日

段々畑と谷や川。そんな感じですが。ただ、ネパールのほうがスケールが大きいですね。

山の中の危なげな道を、くねくねと走ったバスは、七時間ほどかけて、ようやくポカラへ着きました。

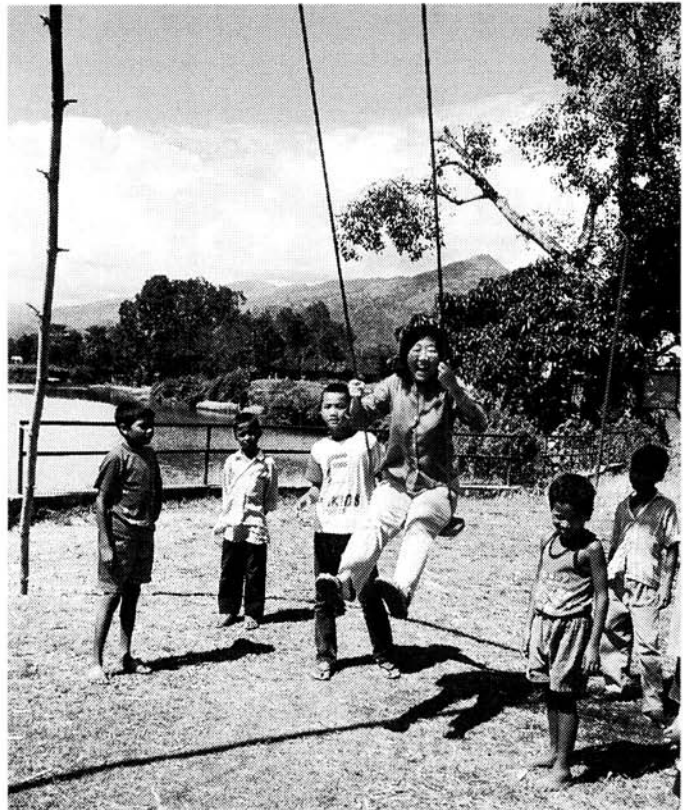
さあ、あの有名なマチャプチャレやダウラギリ（山の名前です）はどっちなあー！と期待したものの、ポカラの空には雲が多くて、山なんざちっとも見えない。私は夫に「ちよっとお、雨期も終わって雲一つない天気って言ったのはダレよ」と、チクチク言ったが、夫に文句を言ったところで雲が晴れるわけもない。一日だけ、バァーと雲が切れて、美しい山並みを見ることができたけど、毎日ほとんど雲ばかり。ある夜は、この世の終わりかと思うような、もの凄い稲妻（しかも横に走る！）と大雨で、道はいつの間にか川になったりで、「この分じゃトレッキングは無理だな」と夫。しかも「いや、実はさ、今回トレッキングに行くつもりはなかったんだよね。だって一か月の

滞在じゃ時間ないよ」などのたまう。えー！ 一か月もあるのよ。私はなにも、アンナプルナのベースキャンプまで行きたい、なんて言ってるんじゃないのよ。せめて気分だけでも、二泊か三泊ぐらいの軽いトレッキングでいいの。行きたい、行きたい、お山に行きたいよーと、毎日さわぐ私をしりに、夫は湖のほとりで読書三昧。ポカラには、日本の本を置く店が何軒もあるの、本には困らないのです。

ブッダのお告げ

あゝ、つまらないなあ、と一人湖の近くの公園で散歩していると、ネパールの若者に「コンニチハ」と声をかけられました。日本人女性は世界でもトップクラスの尻軽人種として有名なので（旅していると、そうよく言われるのです）、私はちがうわよ、の意味を込めて、「何か用ですか？」とブスッとして答えました。

その彼、ブッダ君（また大層な名前をもらったもんだ）は、日本へ行った



お祭りの期間中のみ設置されていた竹とヒモでできたブランコ。ポカラの子どもたちに「これはピンというんだよ」と教えてもらった

こともあって、日本人の彼女もいるのだが（プリクラを見せてくれた）、最近、彼女からの電話が少ないので、ひよっとしたらこの日本人（私）は、彼女の友だちかもしれないと思って（お

いおい、日本人だって一億人もいるんだゾー）声をかけた。とのことでした。私も暇をもてあましていたし、彼は自称、敬虔な仏教徒（そうだろ、すごい名だもん）だといっているので、日本語と英



語のチャンボンで、世間話をしました。その話の中で私が、雨のせいでトレッキングへ行けず、残念に思っていると言うと、ブツダくんも「そうです。今年はどうもイゾーキソ（異常気象）みたいよ」と答えました。そして「でも、そんなに山へ行きたいのなら……」と、ブツダ君は教えてくれたのです。

（指をさしながら）この道をずっと行くと小さなつり橋があって、そこを渡ったら、畑にそってどんどん山へ入って、そうすれば（今度は目の前の山をさして）あの山の頂上へ出るから、それはそれはナイスビューだし、ブッディストテンブルもあるから拜んできなさいと。「とても近いけど、それでもトレッキングの気分は味わえるでしょう」そう言うとブツダ君は白い歯をニキーンと見せてほほ笑みました。

いやいや、ありがとうブツダ君。私は面倒くさがる夫を説き伏せ、なんとかそのナイスビューの山（というか丘）へ行く計画をたてました。夫は「カラツと晴れたら行ってもいいよ」と言っ

たのに、出かけるその日の朝になって、やっぱり「なんかイヤなんだよな、まだ雨が残ってる時期に山入るのは……」とブツブツ言う始末。でも、後で夫のこのことばをイヤというほど理解するのですが……。

ゴーゴートレッキング

カラツと晴れた朝でした。そのせいか、ポカラの飛行場から飛び立つ飛行機の数も、いくぶん多く感じます。経済的に余裕のある旅行者なら、小さな飛行機でヒマラヤの山々を間近に見る、マウンテンフライトというツアーに参加したり、ジヨムソンという標高の高い村まで、一気に飛んだりします。それには天候の安定が何より大事ですから、こんな日はツアー会社も儲けませえと、張り切っているのでしょう。私たちも水とおやつを持って出発しました。道をずっと行って、小さなつり橋は……つと、あっここだね。畑に沿って登って……。どんどん山の奥へと入っていきました。ブツダ君が教え



つり橋を渡ったあとに、あんな恐怖が待っていようとは……

てくれた「ナイスビュー」と「ブッデ
イストテンブル」を目指して。

蠢く大地?!

山に入って、改めてネパールは熱帯
なのね（正確には亜熱帯?）と思いま
した。ここ数日間、雨が続いていたこ
ともあったのですが、森の中は蒸
し暑く、暗く、木の枝からピロリンと
へビのようにツタがたれ下がって、正
にジャングル。とても気味悪い。そん
な私の気分が夫にも伝わったのか、
「こういう所って出るんだよなあ……」
と夫。私は思わず立ち止まって「ちょ
っと、こういう所って、何が出るのよ。
へんなこと言うのやめてよ」と夫に言
いました。だって周りは、お日様も入
らない、まっ暗なジャングル。亡霊だ
の幽霊だのが出没しても、思わず納得
しちゃうシチュエーションは揃ってい
る。夫はまた一言。「立ち止まらない
ほうがいいぜ」

そうは言うものの、もうだいぶ長い
こと歩いて疲れてきたし、どこか座れ

る場所を見つけて休憩したいと思いましたが。ところが夫はきつぱりと言うのです。「日の当たるところに出るまで休憩はなし」と。で、がまんして歩いてけれど、いかげん休みたくて、「もうここで休憩！」と私は地面に座ろうとして、気づきました。

「ち、ち、ちよつとお、なんか地面が揺れてる〜」いえ、違うのです。周りはちつとも揺れてません。おかしいなあと思つて、さらに私は地面に顔を近づけて、よく見ると……。「ンギヤ〜!!」私は大急ぎで立ち上がり、そんなことしてもムダなんだけど、足をバタバタして夫を呼び止めました。夫は冷静に「あ、やっぱいた?」。やっぱいたじゃないわよ! なんだと思います?

なつなつなんと、地面全部がムニユムニユ、ニユルニユル、黒くてらてらと光るヒルなのです! 前も後ろも、もちろん私の足の下もヒル! して、さつきからポタポタと雨音かと思つていたのは、まつまさか……。」「ああ、

ヒルが木から落ちてんだろ。だつて獲物(私たちのこと)が通るからなあ。ハハハハハハ」

ハハハハなんて笑つてる場合じゃないでしょう。もう私は何も言えず、さつきまでの健康的な汗は、あぶら汗に変わり、全身にゾワ〜とトリ肌がたちました。

そうしている間に、ヒル軍団はどんな私の靴ヒモの穴から入ろうと、あの黒いからだを、キューつと糸のように細くしていたり、ズボンの裾に張り付いてうろろう(ウネウネ)してるじやありませんか。

夫は「もう納得したろ。雨期がきちんとあけない山はこうなんだよ」そう言うのと、私にくるりと背を向けて、来た道を猛ダツシユで戻りはじめました。私も、はつと我にかえて、夫の後を追いかけてました。

身をもつて学ぶ

走りに走つて、明るく日の当たるつり橋のたもとへ辿り着きました。「よ

し、ズボンめくつてチェックしていいぞ」

夫に言われなくなつて調べますとも! 山の中を走っているあいだに落ちたのか、血はダラダラと流れていました。が、スネの部分にヒルは見つかりませんでした。私も夫も、ほんの二、三か所しか咬まれていないのが幸いでした。でも、靴のメツシユになつてるところには、何匹ものヒルがそのメツシユの小さな穴に頭を突っ込んで、もつと奥へ進もうとウネウネ頑張つていました。

ブツダ君の言つた、トレッキング気分とはこのことだったのでしようか。夫によれば、こんなヒルなど、地元の人パーリーは全く気にせず、チャップパル(サンダル)で山へ入るのだそうです。

さて皆さん、ヒマラヤのトレッキングで、山賊、ゲリラが怖いのはもちろんですが、ジャングルのヒル地帯にもぜひご注意を。

(写真提供・筆者)

ひとに教えるときの言葉

東京都世田谷区 佐分姫子

初心者また年配の方々にパソコンの使い方をお教える仕事は、私にはいつも新鮮で楽しい試練です。

仕事の前に受けたインストラクターの研修の大半は、言葉遣いについてでした。自分より年長の方々に失礼のないように。不安な初心者を萎縮させないように。理解や操作が遅くても、自信を失わせないように……。

教える者は教わる者に、これほどに下手に出なければならぬのか、と一瞬驚きましたが、すぐに当然のことだと考え直しました。受講生は、パソコンの習得のために料金を払っている。講師は、受講生が理解してこそ賃金を受け取れる。そのためには適切な言葉遣いがあるのです。

「ダメ」とか「違う」とは絶対言いません。

「初めは皆さんそうです」

「ここまでではできています」

「ここは間違いやすいところです」

など、まずできたところを認め、決して否定的な言葉を使いません。それはその方自身を認める

ことにほかなりません。

「大丈夫ですよ」

「ずいぶん早くなりましたね」

「繰り返しことで慣れてきますよ」

そういう言葉で、私自身も穏やかな気持ちになれます。

質問があれば受講生のそばに飛んでいって、身をかがめて教えるこういう講習会を參觀した公立中学の先生が、びつくりしていました。

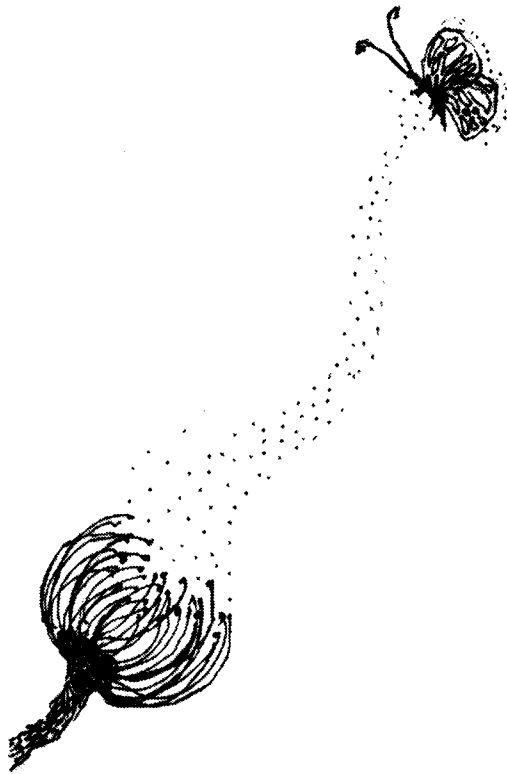
「中学生に教えるのはこういうふうにはいかないでしょうね」と私が言うと、「ヘッドフォンごしですが、ばかやろう、何やってんだって言ったりしますよ」ということでした。

ひとりで大勢の子どもに、興味のあるなしに関わらず教える先生と、学ぶ意思を持つてくる方々にお教えるのでは、状況が全然違うとはいえず、従来の教育界には、まだまだ人権を軽視したような言葉遣いが横行しているようです。

自分の子育てを振り返っても、「ダメ」とか「違う」という言葉の残酷さに、私はなかなか気が

つかず上の子にはかわいそうなことをしました。親や教師は、軽々しく使つてはいけない言葉だと思います。対等の立場である人にさえ、自分を否定するような言葉を投げつけられたらどれほど自尊心が傷つくことか。まして、年長者や権力者に

言われたら、精神的に萎縮してしまいます。子どものときから言われ続けたら、自分の存在に自信をもてないまま成長することになるでしょう。教える仕事をこれからも続けていけるように、自己研鑽の毎日です。



FREE TALK

フリートーク

賛美、激励

川崎市中原区 和田美代子

遠い昔のことだが、私の結婚話が決まったとき、当時はまだ元氣だった母が夫に、

「美代子は、おだてるといい子になりますよ」

と、操縦法の一つを伝授したそうだが、夫はよほどそれが頭に残っているらしく、折あるごとに私をほめてくれる。何だか照れくさいぐらいに……。

いい気なもので、ほめられることに慣れてしまった私は、最近めつきりずうずうしくなつて、ほめられても感動しないし、よりよくなる効果も薄れているように思う。

と、ところがこの私め、今、

「やるぞー！」

と、年甲斐もなく張り切る気になっている。それは、合唱の練習にである。

私は若かりしころはママさんコーラスで、そして高齢になった今では、六十歳以上の女性（最近では五十五歳よりになった）で成り立っている「おたまじゃくしの会」に参加して毎週近くの市民館で練習をしている。

その練習のとき、指導の先生が、私たちのことをぜんぜん年寄り扱いしない。ただただ美しいハーモニーのみを追究するのだ。年寄りには無理と思える難曲や、早いリズムの輪唱を何度も何度も実に根気よく歌わせる。

「僕の言っているやり方さえ守れば、必ず美しい音になる！」と叫ぶ。そして、

「年をとっているから……とかこの年ではもう無理、と思つたらもうおしまいだ。『何くそ、やってやるぞー！』と立ち向かうか向かわないかで、できる、できないの道ははっきり別れるんだ。あきらめないで頑張れよ！この時間だけでも……」

と、叱咤激励する。「大したことない声でも『皆さんお

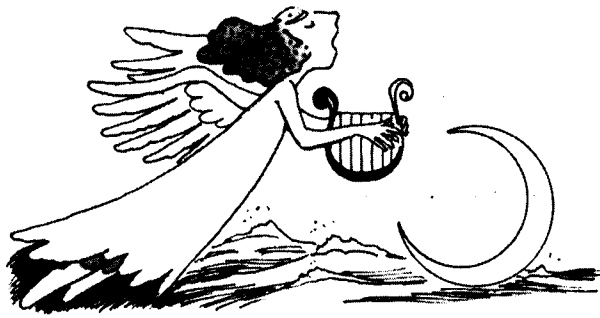
年の割にはおじょうずですな」って言うつてもらいたいの？ 僕はそういうほめ方って、かえって相手に失礼だと思ちな」

いつもほいほいほめられて今日まで来ている私は、この叱咤にとても衝撃的な感動をおぼえた。

そうか、人に聞いてもらうには無理のない年寄りらしい声を出していたのでは、感動を与える音色にはならないのだ。よし、ふんばってやってみよう！という気になった。

たまたま、十月二十七日には出演が決まっている。それに向かってやるしかないのだ。先生の注意や練習状態をテープにおさめ、家に帰っても料理しながら、はたまた洗濯物をたたみながら聞く。とかくながりがちな仏頂面を改善すべく、鏡を見ながら表情の研究をする。口のまわりや、のどの体操なるものをやってみる……と、何かと忙しい。

「あなた、お食事ですよ」



のかけ声も、メゾの声で、これをソプラノだと……アルトなら……と、いろいろな音の高さで夫に話しかける。どちらかと言うと、私一人芝居の気はあるが無口の夫にいまさらテノールで返事しろとは言わない。

「奥さんが楽しそうなのは何より、じょうずだじょうずだ」

と夫は相変わらずおだててくれている。私の変貌ぶりを喜んでいるご様子だ。

私にとってコーラス参加の利点は、「いくら一人だけいい声が出るからと力んでは美しいハーモニーにならない。全体の中の自分の位置をわきまえ、その中にとけ込む」

この精神は家庭生活、ひいては社会生活にも応用されるように思う。

加えて先生の説明の中で何度も言われる、歌詞の意味を自分のものとして味わって音に表現する。これも今の私にととても大切なことに思える。

子どもたちも一応独立して、私たち夫婦は残る人生を音楽にたとえれば第

四楽章に入っているのだ。そう考えた
とたんに、今のこの時間をどう過ごし
たらいいかがわかってくる。

吹く風の音、鳴く鳥や虫の声、音で
はないが輝く強烈な太陽の光、これら
がすべてとけ合って午後を演出してい
るのだ。この中にいる自分（人間）は
どの辺に存在するのかな。

やる気になった歌への夢は、限りな
く広がる。

思いこみは禁物

—悩める太い足の方へ—

埼玉県富士見市 神定黎子（61歳）

今日も言われた。ラジオ体操のとき
に。

「あなたの足、すごい筋肉質ね、丈
夫そう。もももぎっちりしていて、体
が柔らかいのね、二十代みたい」

「何か運動しているの？ 均整がと

れている」

「いいえ、別に……」

「あなた恥ずかしがることなんか
いわよ。丈夫なんだから、羨ましいわ。
私なんかブヨブヨしちゃって」

暑いから短パンをはいていたら、
早速、二、三人から声をかけられた。
私の足、相当目立つのかな。

私の足は、ももは他人と見比べたこ
とがないからわからないが、見えると
ころでは、特にふくらはぎが太い。高
校生のころは悩みの種で非常に恥ずか
しく思っていた。六十歳を過ぎても、
この太さはほとんど変わっていない。

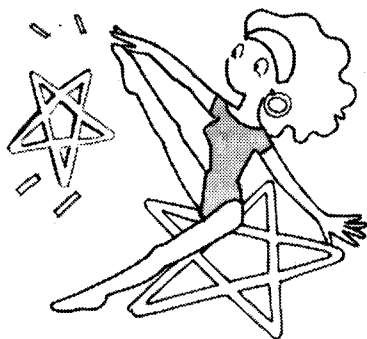
足の甲をぐっと下げると、膝下裏側
の筋肉がデッコンと出る。ハート型を
した桃かリングが中に入っているよう
で、ひっくり返したボートの底のよう
にも見える。あんなに足を使うバレリ
ーナだって、私のような醜い塊は出て
いない。スラッとしていて細い。ある
人は私の足を評して「ばん馬」と言っ
たことがある！ サラブレッドではな
い！ 重い車両をひく、あの土着の、

太い足の馬だ。「言い得て妙、ハハハ
ハ」と笑い飛ばしたが、私の心の中は
誰ぞ知るだ。

何で私はこんなに筋肉が出るんだろ
う。生まれつきなのかしら。運動は確
かに好きだが、選手生活をしているわ
けでもない。ラジオ体操や水泳、散歩、
思い出したようにやるジョギング程度
である。やっぱり食べすぎかな。人よ
りちよっと多めの運動が功を奏して健
康体を作り、取った食物が運動選手の
ようにエネルギーとして消耗されず、
その多くが体内に蓄積されていって
いる。「筋肉質」というのは、若いころ
からの、もうやめてしまったが、体操、
ダンス、登山、空手、かけっこなどな
どの運動が今の私を形作っているのだ
ろう。

さてあるとき、腰が痛くなって接骨
院に行ったときのことである。「うつ
伏せになってください」と言われ、わ
がふくらはぎはおのずと医者目の目に留
まることになった。

「まあ、立派な足ですね。こんなに



太い足をしている人はいけませんよ。一人卓球の選手をしている人で、おたくのように太い足の人がいけませんよ」
「ええ!? 私、太いの、すごくいやなんですけど……」

「足が太いのは丈夫な証拠。老いは足から来るんです。足は大事なんですよ。重い身体や頭を支えるんですからね。よく歩いて足を鍛えるんです。あなたの足は健康でとても立派です」

「へーえ、そうなんですか」
今まで負い目感じていた足をほめられたのである。

ふーん、わが足よ、君は立派なんだから。なにやら登校拒否をしているのをほめられたような、きまり悪い感じである。ならば、なぜいったい、だれがいつ「太い足」をよくない足、醜い足と始めたのであろうか。

「太い足こそがいい足なんだよ」と小さいときに誰かが言ってくれたら、卑屈な思いをせずに青春時代を過ごし、これなのに。「大根足」は軽蔑的に

語られる。しかし私の足は「大根足」以下なのだ。大根は白くて細いではないか。

「思い込み」で一人悩む人がいる。ひどいときには殺人、暴力沙汰、自殺やとじこもりにならなくて発展する。幸いにして私の場合は、気になりながらもエネルギーの大半は毎日の生活に向けられていた。ために、新聞沙汰になるようなことは毛頭なかったのである。

要するに、真実の一つ。紛れもないピカピカ光るわが足である。これをよしと見るか、いやだと見るかだ。いやだと思っていた長い長い半生。それがガラツと百八十度違う観点を与えられた。同じものでも見ようによっては、いぶん違う考え方があるということだ。

現在、世の中でいろいろ苦しんでいる人を見るにつけ、もっと広く違う観点から物事を見ることができれば、楽になるのと思う。科学的に、客観的に広い視野から見つめ、プラス思考と心の状態を安定させていくこと、これ

が肝要だ。これができればおおかたの世の事象は解決の方向へ導かれていくに違いない。

さて今日も朝からカッカと照りつけている。迷わず短パンをはく。決して誇らしくみんなに見せつけるためではない。ただ暑いからにはくのである。多少の開き直りである。わが足よ。せめてむくんでこの上太くならないように。乙女の恥じらいも少しは保持しつつ。

小さな幸せ

埼玉県三郷市 大川まり子

もうすぐ花火大会。

去年の日記を読むと「花火大会。角の駐車場の所で母、弘子、茉奈、佐枝子と見る。楽しかった。幸せ!!」とある。

平成十年四月、主人とともに社員数名をかかえて経営していた会社が倒

産。会社名義のマンションなど全て売却した。

迷惑をかけてしまったにも拘らず、「うちも大変だけれど社長もこれから大変だ。でも体には気をつけるよ。奥さんから伝えてくださいヨ」と言ってくださる業者もいた。

何の迷惑もかけていないのに私たちと距離をおいた友人もいた。所詮この程度の『友人』だったのかと思った。何事もなかったときには判らなかつたことだった。

平成十二年三月、自宅も売却した。自分たちで間取りを考えた三階建ての家。小さな家だったが小さな庭もあった。たった九年間しか住めなかつた。

引越しの日、荷物も車につめ終わり、「おかあさん、それじゃもう行こう」と主人がよびに来て、玄関に立って振り返ってガランとして静まり返った家を見たとき、涙がどつとあふれた。

もう二度と入れないわが家、戻れないわが家、そう思ったら涙がとめどな

く出て立っていられなくてしゃがんで泣いた。泣いても泣いても涙が出た。本当に悲しく辛かった。三月半ばだというのに寒かったのを覚えている。

主人、娘たちとともに母一人で住んでいた私の実家に引越してきた。

強い心で生きていかなくは。前向きに生きていかなくはいけない。私たちは事業には失敗したけれど、それは人生に失敗したことではない。でも、もう五十歳……いやいやまだ五十歳。こんなことを何度つぶやいたか。

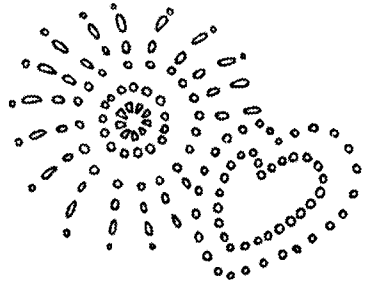
あれから二年半。

長女は結婚して女の子を産んだ。

次女は保育士となり、主人も会社へ勤め働いている。

私はヘルパーの資格をとり訪問介護の職についた。

とり方によっては負けおしみと思われるかもしれないが、会社で経理担当として資金ぐりに追われた苦勞を思えば、ヘルパーとしてのオムツ交換など何でもない。景気のいいころ、コートを買に行き予算の十倍くらいのミン



クのコートをボンと現金で買ったことがある。不思議とあのころはよかったという思いはなく、「なんてバカやっていたのか」というのが正直な気持ちだ。前に住んでいた所に知り合いも多くなると、たまに行くときがある。私は回り道をして必ず自宅を見て足をとめる。庭はなくなり駐車場となっている。ハゼの木があつて、秋になると葉がいつぱい落ちて朝夕前の道路をはいたものだったが、その木も今はない……。

今でも前に立つただけで涙ぐむ。手

離れた自宅がおしいのではなく、倒産してから引越しまでのいろいろなこと、そしてまた今日までのさまざまなことを思い涙がでる。

でも立つただけで涙がでてくるこの地は、私の人生の原点の地だと思う。諸々の辛いことを乗り越えて今があると考えさせてくれる地。あの辛かったことを思えば今の苦労なんてと思わせてくれる地。そのような場所を持っている自分が好きだ。まだ片付いていない問題も残っているが、今を精一杯生きていく自分が好きだ。愛しい孫を産んで週一回くらい見せに来てくれる優しい長女も好きだ。その娘を愛してくれる婿さんも好きだ。教育関係で働くしつかり者の次女も好きだ。

「おかあさんに苦勞をかけるね。オレ、一生懸命働くから」と言ってくれた夫も好きだ。私のことをいつもいつも心配し、腰痛を気にしながら、私の帰りが遅くなると夕食の仕度をして待ってくれる母が好きだ。

そんな気持ちの中で毎日を過ごして

いるので幸せを感じられるのではないか。

昨年は、膝の上でだっこして花火を見た孫ももう二歳。今年はずっとしては見ないだろう。

女四代、皆で夏の夜空いっぱい広がる花火を歓声あげて見られるなんて、なんと楽しいこと！ なんと幸せなこと！

人生これからもいろいろなことがあるだろう。小さなことに幸せを感じながら前向きに明るく生きていければ……と思う。

心の病氣

神奈川県横須賀市 チコちゃん(39歳)

心の病を患って、五年。週一度の病院は、生活の一部となった。いつ悪くなるかわからないので、友人と会う約束すらできず、主人としか話をしない

毎日が当たり前となつてしまつた。

しかし、五年の間に二度の入院をし、また、たまたま電話をかけてきてくれた同級生が、「自分も入院して、今もそんなに調子がよくない」と自分から話してくれたりと、入院友だちや同病仲間、また、この「わいふ」を紹介してくださつた難病と闘っている先輩など、近ごろは病氣を通じた人々との交流が多くなつてきた。

一度目の入院中には同室の人とけんかをし、本當につらく悲しい思いを言つた。ただ、そのこととは別に彼女が言つていたことを最近になつて実感したので、感謝の気持ちを伝えた葉書を送つた。けんか別れした人だから、返事などくるとは思つていなかったが、忘れたころになつて、返事がきた。「私の言つたこと覚えていてくれてありがとう」と。

私自身は、やつと少しずつよくなつてきたところだが、同じように通院しながらもよくなつてい人もいれば、退院後ひどく悪くなつてい人もい

る。もつと皆と連絡をとりあいたいと思うが、まずは自分が無理をしすぎないことだと思つて、ほどほどにしている。すぐによくなくなる病氣ではないことは、もう十分わかつていたので、うまくつきあつて、人並みの生活ができればと思つてゐる。

夏の夜の珍事件

長野県小県郡 花岡京子（53歳）

それは、夜の十時過ぎベランダへ洗濯物を干しに出たときのことだつた。夕方、農作業をし、その作業衣など干し始めたとき、なにげなく空を見上げた。

曇り空で、月も星もなく、雲が厚く覆つていた。すると、東の空に白くボロとした三十センチくらいの丸い物体が、何やら動いている。よく見ていると、それは楕円を描きながら動いている。その物体が、わが家の上空まで来

たときには、私は未知の世界へ連れて行かれてしまうのではないかという錯覚に囚われた。そして、それは恐怖へと変わった。干していた洗濯物をそのままにして、すぐ近くの部屋にいた娘を言うと、娘もベランダに出てきてもう一度一緒に見た。先ほどと同じような光る物体は、変わらぬ動きをしている。娘は、

「下のほうのライトじゃないの？」

と言いつつも、

「UFOじゃないよね」

と言つて、しばらく二人で見ている。先ほどの恐怖は、少しはなくなつた。それからカメラを持つてきて、

「多分、写らないと思うけど、撮つてみよう」

と言いながら、娘はカメラのシャッターを切つた。

結局、ベランダで三十分もこのえたいの知れない物体を見てから布団に入つたものだから、普段夢を見たことがないのに、この夜は夢を見た。銀色の

丸い光る物体が、わが家の上空に来て、下のほうの扉が開き、ペランダにいた私を吸い上げようとしていた。そのときの恐怖で体は硬直した。

次の朝夫に、

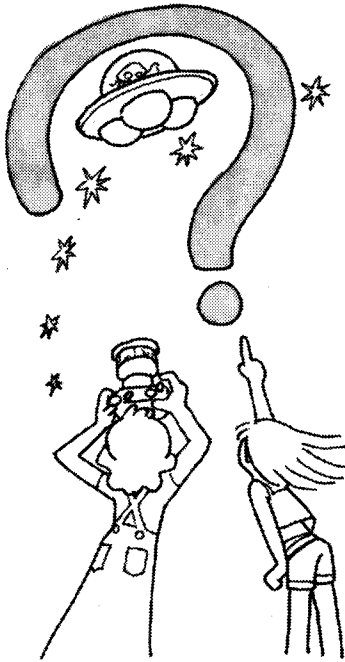
「昨夜、おまえうなされていたぞ」と言われた。夫に昨夜のできごとを話

すと夫はいとも簡単に、

「俺は何度も見ているよ」と言うではないか。

「天気の良い雲の多い夜、下からの

ライトがカーテンの役目をしている雲に映るのさ」と言った。昨夜は、パジャマのままで、UFOか、未知の物体



にどこか知らない世界へ連れて行かれてしまったら困ると、本気で思っていたが、今朝夫の話を聞いて、自分ながら笑ってしまふ。

数日後、娘の撮った写真には、変な物体はどこにも写っていない、グレーの空だけがどこまでも広がっていた。今日も天気が悪いので今宵もあの物体は現れるのであろうか。

私とテレビ

東京都小平市 田川哲子（42歳）

わが家のテレビの番人が家を出てから、一年ほどになる。

テレビの番人こと十九歳の娘がいたころは、大音響で音楽かテレビのどちらかがLDKを支配していた。

高校受験のときも大学受験のときも、娘が教科書を広げる場所は、マイルームでなくて、きまつて居間なのだ。それはそれでいいのだが、なんせ大音

響つきだからたまらない。「ねえ、テレビ消したら」と注意すると「だって音がないと落ち着かない」「音もう少し小さくしてよ」と頼んでも「大きい音にしておかないと眠くなるんだもん」の返事。そのうちこちらもあきらめてしまった。人生何事も忍耐である。

音楽はともかく、私はテレビ、特に娘の大好きなバラエティ番組が嫌いだった。

『ながら族』なる言葉が、出回り始めたのは、私が十代のころのような気がする。今どきの若者は、ラジオをつけながら勉強をしているなどと言われている。

当時、今どきの若者であったはずの私は、ながら族にはなれなかった。

信州の山奥の静寂なる環境で、中学まで過ごした私は、音があるかどうか集中できない。自分の部屋から聞こえるのは、川の音と家の池に水が流れ落ちる音、カエルとか蝉とか虫の声とか季節ごとの自然の音だけだった。

家族もだらだとテレビをつけるこ

とはなかったし、高校時代に一人暮らしを始めてから結婚するまでは、テレビのない生活をしていた。

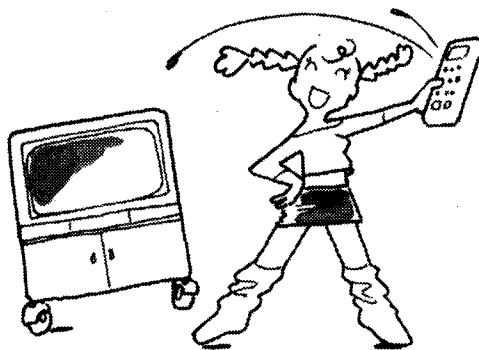
面白い本を読むことが私にとって何よりも楽しみだった。やりたいことは山のようにあったので、テレビがなくても全く困らなかった。そのかわり三本立ての名画座には、よく通った。

結婚していちばんとまどったのは、テレビの存在である。新居のアパートは狭く、当然ながら居間も寝室も食事をするのも同じ部屋である。そこにテレビ様は、まるで自分の存在を誇示するが如くでんと居座っていた。

悲しいかな夫はテレビ大好き人間だったのだ。

夫の職場はマスコミ関係なので、常に何台ものテレビが置いてある状態。そんなところで仕事をしていると、音があると集中できないなんて悠長なこととは言っていられないのかもしれない。

かくして私の結婚生活は、テレビとの共存から始まった。子どもが小さい



ときは、まだ素直に親の言うことを聞いてくれて、視聴時間もセーブできたのだが、思春期ともなると、そうはいかない。ジャーニーズ系アイドルに夢中になった娘がテレビの前に陣取る時間は、延びる一方。ドラマ、歌番組、バラエティと彼らが出演する番組はかたっぱしからチェック。もちろんビデオでもしつかり録画。

ホント、一日が二十四時間では足りないんじゃないかしらというくらいテレビづけの毎日だった。

テレビの番人がいなくなつてから、私のテレビの視聴時間がいきなり増えた。仕事から帰つて、犬の散歩をすませ家に入るのはい夕方六時過ぎになる。

とりあえず、テレビをつけ、夕ご飯の支度などろもろの家事労働を始める。それから何となくテレビをつけっぱなしの状態で、就寝時間にいたる。何て無為な時間の過ごし方をしているのだらうと頭の片隅で思いながらも、一日の労働ですつかり体力を消耗して

いるので、何となくだらだらで過ごしてしまうのだ。いつの間にか娘からテレビの番人を譲り受けてしまったような感じである。しかも娘と違つて私はながら族でないから、テレビだけになつてしまうのだ。実に虚しい。

私の、毎日を怠惰にしてしまう二つのもの。それはテレビとビールである。頭ではわかっているのだけれど。

クラクション 鳴りっぱなし事件

川崎市多摩区 岡田美幸（48歳）

七月二十日、中三の娘の卓球の試合を娘に内緒で観に行つた帰りのことでした。とどろきアリーナの駐車場から出るとき、自動車の後ろのほうで何かが当たっているような音がしたので。その上、触らないのにクラクションが鳴るじゃないですか。

一、二年ほど前からクラクションを

鳴らしたつもりがないのに鳴つてしまふことは何度かあったのですが、私が触つてしまったのかもしれないと思つたりしたのです。でも今は確かに私はクラクションを触つてはいないぞ、と思つていたら、多摩堤通りに出るところでいきなり、クラクションが鳴りっぱなしになつてしまったのです。

「私はクラクションを鳴らしてはいない」、つて他の自動車に知らせたくても知らせようがない。ハンドルから手を離しても、鳴りっぱなし。クラクションは押して鳴るのだから、とハンドルを引っ張つてみても鳴りっぱなし。「ハンドルを引っ張つていてそのままハンドルが抜けてしまったらどうしよう。私は鳴らしてないよお」と泣きべそかきたくなりながら減速して路肩に停車しても、エンジン止めても、キーを抜いても、鳴りっぱなしです。

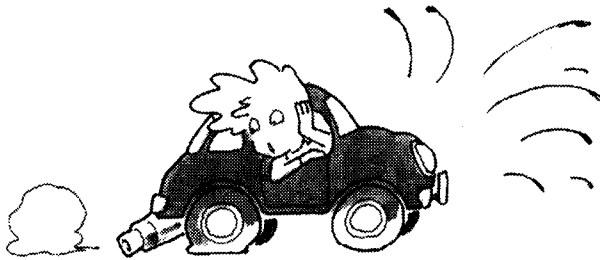
携帯電話を持っていたので、JAFを呼ぼうかとも思つたけど、JAFが到着するまでこのままクラクションを鳴らせっぱなしでここに停車している

の？ 勘弁してよ。というわけで、鳴りっぱなしのまま、発進。いやはやその恥ずかしさたるや、想像してみてください。

私は暴走族でもないし、鳴らしたくて鳴らしているわけではないということとをわかってもらいたくて、減速してなるべく左端を走っていたのですが、登戸あたりまで来たらなぜかクラクションが静かになったのです。そのあたりから商店街に入ったので、ホッとすると、そのままいつも車検などで世話になっっているガソリンスタンドに行き、事情を説明し修理をお願いできないだろうかと相談したところ、後ろのほうでヘンな音がした原因は、下を覗いてみたらなんと、マフラーの一部が落ちてぶら下がって地面を擦っている音だったのです。

クラクションのほうは電気系統の故障だから、キーを抜いてもライトがつかっぱなしのこともあるし、クラクションもそれと同じことだと説明され、納得です。

この自動車は、昭和六十三年十一月



に購入した三菱シャリオなので、「マフラーを取り替えるにしても型が古いし、部品を取り寄せなければならぬ

し、修理も外注になるから、ディーラーに直接持っていったほうがいいですよ、と言われ、またクラクションが鳴り出したらどうしようとドキドキしながらも、そのまま三菱自動車に向かいました。ところが、その営業所がようすが変なのです。ただの定休日ではない感じ。車が一台も置いてないし、車庫の中も空っぽ。四月いっぱい閉店したということで、最寄りの営業所の連絡先が掲示してあるのです。その掲示を読んでいたらそこを自転車を通りかかった親切な人が、「あなたの自動車、何かを引き摺ってますよ」と声をかけてくれるのです。「ええ、修理をお願いしようと思っただけで来たんですけど」と言えば、「ここはもうやってないですよ」「どうも、そのようですよ」ということで、掲示してある最寄りの営業所がどこなのか電話で確認し、そしてなんとかクラクションが鳴らないまま最寄りの営業所に着くことができました。

十四年経ったものの、まだ五二〇〇

○キロくらいしか乗ってないし、二十年間は乗りたいたいと思うから修理を見積もってほしいと言ったのだけれど、車体下部が結構錆があるので、どこまで修理をすればよいか見積もるのはちょっと難しいということでした。

夏休みに帰省する自動車がなくなつてしまつて、途方にくれてしまいました。

それから一週間後、なんと、カーナビ付きの日産リパティ―を購入することにしたのです。十四年間、活躍してくれた思い出いっぱいシャリオは廃車となりました。

新車は八月の帰省に間に合うように納車してもらうことができました。十四年間で自動車もずいぶん進化しているものと、目下ナビが物珍しくてナビに案内させて喜んでるところです。
あの日に自動車を運転していなかったらあの車で帰省して、ひよつとしたら高速道路でクラクションを鳴らしながら走ることにしたのかもしれない！

うつ病になつちやつた人々

千葉県船橋市 祥 まゆ美

どんな体験も、決してムダではないもんだなあと、このごろ一人で感じている。ましてそれが人の役に少しでもたつたとしたら、もうけものだ、なんて。

私の身近で、ここ五、六年の間に数人、うつ病にかかった。それも長年親しくつき合ってきた友人ばかりだ。

「朝起きられないし、夜は明け方まで眠れないのよ、食べたくないし、何もしたくないし、何だか涙もろくなつて……」

そう電話の向こうで力なく話すA子。聴いていると、数年前の自分を思い出出し、ハツとした。もしかしたら……。

「あのね、イヤかも知れないけど、神経科に行つたほうが、早く楽になると思うよ」

心の中で、うつ病という病名が浮かぶ。A子は同年代で、今は二児の母だ。教師として長年、きまじめに働き続けてきた彼女の生き方にはかなりのガンバリがあつただろう。

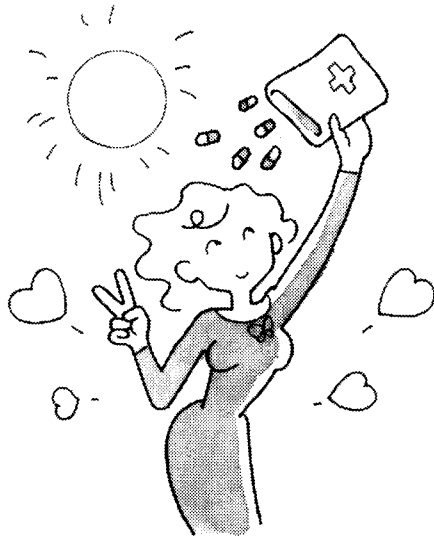
元来うつ病になりやすい体質というものがあるそうで、きまじめ、ガンバリ屋、自責の念が強い人が無理を重ねたあげくに発病するようだ。

A子はまもなく心療内科に行き、うつ病と診断され、闘病がはじまつた。

同じように学生時代からつき合っていたB子も、夫の母親と同居が始まつてもまもなく、心の不調をしきりに電話でうつたえてきた。

「何もできなくて、家の中は汚れほうだいよ、でも起きられないの、私なんて、みんなの迷惑になるだけよ」

フトンに横たわつたまま、電話してきたというB子。彼女のその後、某精神科に入院。重度のうつ病だった。そ



して実は私の身内にも発症した。

気分障害の一種である「うつ病」にかかる人は、ここ数年急激に増加しているという。

脳内物質セロトニンが減少して、生きる気力を失ってしまう病気なので、薬物療法が有効なのだ。生きるエネルギーが、自らの体から復活するまで、

休養しながら待つ。しかし、本来が、まじめすぎる人々。自分を責め続け、けいにエネルギーを消耗してしまう。

私はまじめ人間のつもりはないのだが、数年前の離婚前後に、その病にとりつかれた。

息子の非行について悩み、児童相談所へ通っていたときに、相談員の一人

が私に言ったのだ。

「お母さん、なるべく早く、精神科へ行かれたらどうですか……だいたいぶつらそうに見えますよ」

私はその言葉に激しく動揺した。自分が精神病だなんて信じられなかったし、病院に行くことも怖かった。病気について何も知らなかったことで、なおさら心が滅入ってしまった。

そんなとき、数年前から、心の病で通院している友人を思い出して電話をかけた。すると彼女は明るく言ってくれた。

「心配なら、私の行ってる病院を見に来てごらんよ、変な所じゃないって分かると思う」

他県の病院だったが思い切って行ってみた私は、心の病にかかる人の多さに驚かされた。待合室に座っているたくさんのお患者さん……妙に静かな雰囲気だった。

自宅の近くにある精神科クリニックをさがして行ったのは相談員に病を指摘されて一か月たったころだ。まるで

大正時代に建てられたみだいなオンボロ医院。木造の平屋で、普通の民家と見まちがえそふだ。ガラリと玄關の戸を開ける。

並んでゐるビニールのスリッパをはいて上がり、受付をさがしたが見あたらない。

待ち合ひ所のようなところに長イヌが一つ。先に座つて待つてゐる若い男性のとなりに並んだ。一応予約を入れてあるので待つていれば分かるだろうと思つても何だか不安だつた。私の名前が呼ばれるかと思つたが、しばらくしてただ「次の人どうぞ」と医者が言つた。

診察室に座つてゐたのはでつぷりと太つた医者だつた。おっとりした表情で、どうしました、と聴く。今の状態、生育歴、性格テストなど、たつぷり二時間かけての初診だつた。

先生の背後から窓際にかけて、セントポーリアの温室がずらりと並んでいて、色とりどりの花が、うすあかりの下に咲いてゐた。

さぞかし花好きな医者なのだろうと思ひながら、見てゐると、彼は自分の身の上話などを話し、やはり庭や畑いじりが趣味だと言つてゐた。その後、ようやく肝心の病名を言われた。

「あなたのは、仮面うつ病というんで、心の不調が、痛みとして体に出てゐるんですよ、神経から来ているから、薬で楽になります」

医者はそう言うのと、机の引き出しから薬を出して袋に入れ、私にくれた。代金はその場で手渡し、替わりに領収証を受け取つた。

つまり、受付はおろか、この医院には、診察室だけしかなかつたのだ。診察した医者が、薬も出して、お金も受け取る。

なんと不思議な精神科だろう。もちろん看護婦の姿もない。しかし私は不信感を感じなかつた。何だか信用できる気がしたので。

待合室には私が診察を受けてゐる間に三人ほど並んでゐた。先生の声がある。

「次の人どうぞ」

私は玄關の戸を開けて外に出た。庭には季節の花が咲いてゐた。やはりどう見ても、ただの一軒屋にしか見えなない。精神科の看板がなければ……。

二年間、私はこの医院に通つて完治したので、こんな経験をしたことで、身近にうつ病らしき人がいた場合、すみやかに医者への通院をすすめてゐる。心の病だつて体の病と同じだ。昔の「キチガイ」というイメージは、おどろおどろしい。心と体は一体なので、おろかな偏見はすててしまおう。

しかしそれにしても、身近に心の病にかかる人が多くて不思議に思う。類は友を呼ぶということわざは本当なのかもしれない。

うつ病にならないように、自分に甘くやさしく、休み休み生きてゆこうと思つても、やはり、きまじめな人には無理なのだろう……。私だつてまたいつ、再発するから分らない。しかし、不安はあまりない。休みたいと自分の心身がうつつたえてゐるんだから、医者

へ行ってゆっくり休めばいいのだ。
そうは思っても……やっぱりもう
「うつ病」はこりこりだなあ。

子ども芸能大会

沖縄県那覇市 仲里貞子

孫娘は生まれたときの体重が二千九百グラム、身長四十六センチで可愛いダイエツトベビーでした。

母親は一年間の育児休暇を取り母乳で育てました。二歳の誕生日で断乳し、三歳になっても人見知りがはげしいので保育園に入園させました。それから見違えるほど成長しました。そして、親子で琉舞道場に通い始めました。稽古一年目に先生から子ども芸能大会への出場を是非にと勧められました。親は不安でしたが、本人がやる気になり、一日二時間の稽古を週三回頑張りました。当日鮮やかな衣装を着せてもらい、



子ども琉球芸能奉納祭
(前列左から2人目)



長男家族と



左が孫娘の安奈
あんな

化粧をし、髪を結び可愛い舞台姿に変わりました。

私たちは孫娘の初舞台なので前列の席を取り、母親はビデオをまわし、私はカメラを準備しました。孫の出番の前奏曲が流れたので落ち着いてカメラをかまえました。

ところが、孫の一つ一つのしぐさにもとれ、終にシャッターを押すことを忘れてしまいました。孫は年上のお姉さんたちと一緒に堂々と踊っていました。舞台終了後、「ご苦労さん」と声をかけるのが精一杯で涙してしまいました。後日食事会があり、実行委員会から、参加賞と副賞をいただきました。

また、五月五日の子どもの日には「子ども琉球芸能奉納祭」で平和祈念堂での舞台にも参加しました。それらの体験が自信につながったのででしょうか、今は週二回、保育園の帰りに喜んで琉球道場に通っています。

家でも滑稽な踊りで家族皆を楽しませてくれます。私はそんな孫の成長が楽しみです。
(写真提供・筆者)

ミドルエイジの決心

アメリカトリトルロック市 伊藤琴子

十月も半ばを過ぎ、アーカンソーはやつと秋らしくなった。つい二、三日前までは家の中でも車の中でも冷房をいれていたのが嘘のようだ。

馬肥ゆる秋、食欲の秋、と、日本ではいわれるが、確かにクソ蒸し暑い夏は食欲がなくなるので、気候がよくないと何もかもおいしく感じられるのかもしれない。また寒い冬に備えて、脂肪を貯えるのは熊だけではなからう。

今年の秋こそは太らないようにしよう、私は大決心をしたのだ。

なぜか？
語るも涙、聞くも涙の物語。

私は中華料理が好きだ。大学四年生のとき、友人と韓国、台湾、香港、フイリピンと約一か月旅行したとき、本

場のおいしさに感動した。

当時、友人が教えていた高校に留学していた林君のお父さんが、台北一の大飯店（レストラン）に私たちを連れてつてくださった。お店には古典的伝統楽器を奏でる民族衣装を着たおじさんがいた。高級なお店はいたるところに赤の色を使っていた（中国では幸運、幸福の色らしい）。

「ここじゃ食事は無礼講。自分の箸で好きなものをどんどん食べてください」

林君のお父さんは流暢な日本語でおっしゃった。

あれから二十三年。私は何を食べたか記憶にはないけれど、ただ、ただ楽しく、友人と林君のお父さん、お姉さんと食事をしたことを覚えている。

台湾の中華料理が、日本人の口に合うのは長い統治の歴史も影響しているらしいが、なにしろおいしかった。

次に行った香港では、香港人の友だちが飲茶なるものに連れていってくれた。ワゴンに一品料理（しゅうまい、

餃子、ちまき、肉まん、杏仁豆腐などをたくさんのせてウエイトレスがテーブルにやって来るのを、一皿ずつ取って食べる方式である。

飲茶は中国語のメニューが読めなくても目で見てお皿を取る。お勘定は、

お皿の色と枚数で払うというシステムである。

アメリカには中国系アメリカ人がたくさんいるので、大都市の中華街チャイナタウンにいかなくても、ある程度の大きさの街なら中華料理店が必ずある。



他の民族料理のお店に比べチャイニーズは量が多くて安いときている。アメリカ人に人気のあるわけだ。

日本の中華料理のお店に比べ、アメリカで食べる中華は大胆な味付けがされている。たとえば酢豚など、角切りにした豚肉を、タミコ（玉子、水、小麦粉をまぜたもの）の衣で揚げ、その上にまっ赤の甘酸っぱいトロっとしたあんをぶっかけただけの代物がでてくる。日本からいらした方は、「な、なんじゃ、これー？」と、皆さんびつくりする。

ここ一年の間に中華のビュッフェスタイルの大型店がリトルロックでは数軒オープンした（ビュッフェといっても座って食べる）。

「チャイナキングは安くておいしかったわよ。キンコも行くといいわ」

隣に住んでるエレナが言うので、行ってみるとすごい列で入れなかった。そりゃそうでしょ。七百元以下で、食べ放題。百近い料理、サラダ、デザートが所狭しと並べてある。

六月にサマースクールを教えていたとき、私は毎週この中華ピュツフェによく通い、よく食べた。壁には大きな万里の長城と天壇の写真があり、「サマースクールが終わったら行って見るんじゃない!」と、思っていた。

七月に二週間、中国を旅行した。アメリカの旅行会社の主催するツアーで、ホテル代、観光代、そしてほとんどの食事が含まれていた。朝、昼、晩とピュツフェだった。

私は食い意地が張っている。ごはんイール命なのね。その上に質素節約が好き。お金を払ったらその分だけは、いや、それ以上に食べてしまう。ピュツフェは取り放題、食べ放題。

そんなことしてはいけけない。わかっていただけやめられない。毎日三食ピュツフェで二回も三回もおいしい中華料理を食べた。次、またここに来る機会はいつあるだろう? またこのおいしい料理を食べるのはいつのことか? そんなふうに考えだしたら、やっぱりもう少し食べておこう、と、

いうことになり、私は食べ続けたのである。

アメリカに帰ってきて、友人に、「なんか最近服が小さくなったような気がするけど」と言ったら、「それを言うならキンコが太って、入らなくなったと言うほうが正しいわよ」と言われてしまった。そうだよ、子どもじゃないんだから……。

八月に日本に帰って、しばらくぶりに友人たちに出会った。

「なに、琴ちゃん、おめでたー?」
「おいおい、わしゃシングルマザーなんかにならないからね。腹の中にはないよ。」

スポーツ医学を教えている友人は、「そのお腹八か月ぐらいいかなー。もう中年なんだから、新陳代謝メタボおちてんだから、運動をしないかんとよ」(博多弁)

と、おおせになる。

婦人科の医者イールの友人によると、私のお腹は妊婦と言っても疑われなといか……。

確かに私は太っていた。ある日、父と二人で体重を計ることにした。ガン。私は父より一キロ多かった。

「この体重計、こわれとれせんか? よし、お父ちゃんが直してあげる。もう一度、さ」

うちのお父さん優しいの。私の体重の多いのは体重計のせい、だなんて言ってくれたけど、二度目もやっぱ一キロ多かった。

中華料理は油を多く使うので、知らず知らずいっぱい食べると、和食と違って太るといふことがよくわかった。腹八分目が健康によろしいということだ。ま、いくらおいしいといえども、適量といふことを念頭におかなくてはいかんのじゃ。

日本から帰って来た。ヒューストンの空港で即やせた気がした。現在、アメリカ人の三分の一が肥満で、政府もこの事実イールに注意を払うようになってきた。肥満といつても、日本人が太るといふのとはわけが違う。体の大きな相撲の力士のようなアメリカ人が男、女

を問わずいっぱいいるのだ。ホットドッグ、ハンバーガー、ステーキ、ピザ……そういうものを食べ続け、どこにでも車で行き、カウチポテトで運動をしない。こういう生活習慣がアメリカ人を肥満の国へと導いたのだった。

私は食べる量を少なくした。「豚のように大喰いするから太るのよ。あなたは背が低いんだし、そんなに食べちゃ食べ過ぎ」と母は言って、茶わんにごはん半分しかくれなかったが、私のこと pensando のことだった。

自転車こぎを一日三十分から四十五分にした。週末は、それを二回する。汗のすること。TVを見ながらこぐから時間は気にならない。が、おかげですごいふくらはぎ！

日本から帰って二か月。やっと元の体に戻った。スカートがずり落ちるようになった。身が軽くなると動きやすくなる。階段も上りやすい。運動というのは精神衛生上にもいいらしい（うつ状態の人は特に運動をすると、脳より自然のホルモンが化学物質が

で気分がよくなるとか……）。

私はこのまま体重をキープしようとして堅い決心でいる。太い、と、本当のことを言ってくれたお友だち、サポートしてくれた両親に感謝の日々である。

T君のこと

愛知県瀬戸市 武藤徳子（44歳）

姑は、瀬戸市内で陶器店を営んでいる。九月の第二土、日は、全国レベルでニュースに流れる「せともの祭り」。

瀬戸中の陶器店がメインストリートにずらりと露店を並べ、進むも戻るもままならぬような混雑の中に、威勢のいい呼び声が飛び交う、にぎやかな祭りだ。姑は、自分の店の前に露店の権利を買うので、けっこうな規模になり、毎年人手集めに苦労している。特に力のある男の子は絶対必要。そこで孫たちの出番となった。三年前従兄から、

高一になったわが息子に、その役がバトンタッチされ、息子の友人も一泊お食事付きで来てくれるようになった。初め息子は、中学時代の友人を二人誘った。しかし祭りの初日、久しぶりの同級生は三人になっていた。

「あの子、ふらっと遊びに来て、そのまま働き出しちゃった」——それがT君。私も小学校のときから知っているが、最近車から見かけるのは、頭が金色になっていたり、コンビニの前で、たむろして煙草をふかしている姿ばかり。

「久しぶりだね」と声をかけると、

「どもッ！」

と明るい返事。テキパキと客に応待し、茶碗を包む手つきも、つり銭を出すしぐさも堂に入っている。昼ごはんをごちそうし、いつ帰るのかなあと見ていたら、結局夕飯も食べて片づけまで手伝った。

「明日も来る？」

「あつ、いいッスよ」

彼は、二日目最後まで手伝い、姑は働きぶりに感心してバイト料を出した。

「来年、来る？」

「あっ、いいッスよ」

で次の年は、お泊まりリストにはいっていた。相変わらずよく働く。しゃべり方も好感がもてる。しかし見た目がこわい。昔から、トランプの神経衰弱ができるくらいお母さんにそっくりの顔は、可愛らしいのだがいかつい体に丸坊主、細いサングラスなんぞかけて、ドスの利いた声で呼び込む姿は、もうすっかりテキヤの兄ちゃん。ときどき、友だちが遊びに来て、店の横でジュース片手にベッタン座りされると、客足もちよっと速のく。姑は困った顔をして私に耳うちした。

「T君、ゆうべうちを抜け出して、どこかで遊んでたらしいよ。そういうことされると困るねえ」

評価がずいぶん下がってしまった。

「夜遊びしたらだめだよ」

「あっ、だいじょうぶッス。高架下



で、ハンカチ落とししてただけッスから」

「そういう問題じゃない。夜中に遊んでたら、周りから不良のレッテル貼られちゃうでしょ」

彼は、首をすくめた。小さいときから、この子は少しませていた。写真の中でも、どこか斜めにかまえている。たぶん中学時代は、ツツパッていたんだろう。私の中でおぼさん虫が動き始めた。

「ねえ、Tちゃん、友だちは大事だけど流されちゃだめだよ。親や学校に腹が立つても、反抗して、バカなことしたらいかん。自分の人生大切にしながら」

うるさがられてもいいから、言いたくなくなった。炊事係として一日台所にいる私は、交代で食事に来る子たちとしゃべるのが、けっこう楽しんだ。あとの二人は素直にすくすく育った明るい子たちで、一人は、調理師になる夢に向かってコツコツ努力しているし、もう一人は水泳大会で県大会に出たと自

慢し、

「マジ、彼女欲しいッス！」

なんて高校生活をエンジョイしている。T君もけっこう饒舌でいろいろ話すのだが、内容があとの二人と少しズレている。携帯のアドレスには女の子がびっしり。

「帰国子女、けっこう知ってますよ。すげえマンションに一人暮らししてる女の子とも付き合ってるし、ギャク玉のりますよ、俺！」

「デートは、どこ行くの？」

「まあ、炉端ッスかね」「ハア？」

二日間、食事のたびに三人と冗談言つて話しながら、私は、彼の話がなんだか自分を大きく見せたがっているように感じた。十六、七歳の少年にしては、経験が多すぎる。本当なのか嘘なのか、あとの子たちが素直に「へえ」と驚くの反比例して、私はだんだん「ふーん」と答えるだけにした。そして彼が一人のとき、

「Tちゃん頭いいし、スポーツ万能だったから、なんかすごいことできそ

う」

と話しかけた。

「英語は好きなんスけど……。だから英語の塾だけは、まじめに行つてますよ」

「お兄ちゃんいたよね。サッカーうまかつたでしょ」

「あー、兄貴はすごいですよ。あの人は、もう別格ですごい人ッス」

何度も「すごい」をくり返す。ピンと来た。小さいときから、どこか上目使いの彼の心が見えた気がした。そこからお兄ちゃんの話は二度と切り出さないことにした。

「Tちゃん、好き嫌いないでしょ」

「全然、ないッス」

「おばさんね、Tちゃんは日本を出るといいと思う。人なつっこいからどこへ行つても順応できるし、何が出てきても食べれるし、英語がんばつて、そのパワーで世界を見ておいで！こんな狭い田舎で夜遊びなんかしてないで。きつとすごい経験できるよ」

彼は黙つて聞いていた。

祭りのあとに姑が、

「来年は、T君頼むのよそうかねえ。夜遊びするし、友だちがちよつと……」と言つたとき、

「私が注意しておきます。うちに来たかつたら夜遊びするなって！」

と少々むきになっていた。それ以来、夕方のショッピングセンターで、よく彼を見かけるようになった。きつと前は気づかなかつただけなのだろう。私がいちばん見ないふりをして、通り過ぎたい男の子の中にいるのだから。しかし今や見つけると、すぐかけ寄つて、手にしたレジ袋を彼の足にぶつける。

「コラ！夜遊びしてないだろうね。夜遊びしてたら、もううちでは雇わな

いよ」

坊主頭に黄色サングラス、えたいの知れないダボダボズボン。他の子の視線を感じるけど、この際無視。私は必ずT君の目を見た。サングラスの奥の目がちゃんと私を見つめて答えるかどうか、じつとのぞき込んだ。

「してないッスよ」

彼は、ちゃんと私を見た。気がつく
と、わざわざ夕方買物に出かけて、
ウロウロ捜し、見つけるとダツシユで
近づいた。親だつたら、

「ウルセンダヨ、テメエ！」

と怒鳴られるとこだと思いやめにした
が、今年、また祭りで会えるのかと、
息子たちの次に心配な子となった。

「Ｔさあ、なんかすごいまじめに塾
行つてゐるらしいよ。携帯も勉強のじや
まになるつて処分したらしい」

ある日息子が言った。ほおっ！ 絶

対に夜遊びしませんと息子の携帯に連
絡してきたので（最後まで私には電話
をくれなかった）、めでたく今年も雇
うことになった。忙しい高三の九月を、
三人とも変わらず来てくれたのは、す
ごくうれしい。一人は、とうとう夢が
叶い、有名な調理師学校へ推薦をもら
えたと言う。そのために三年間無遅刻、
無欠席、成績優秀で通したのだ。もう
一人のどこかお坊っちゃんだった子
も、

「親は、食いつばぐれがないから、

電気関係の大学へ行けつて言うんです
けど、俺、建築やりたいンス。今、建
築業界どん底ですけど……」
と語ってくれた。

「自分のやりたいことやるのがいち
ばん。苦しいことにおつかつても、自
分がやりたいことならがんばれる」

「そうッスよね！ やつぱりそうで
すよね！」

うれしそうに叫ぶ彼を見ているほう
がうれしい。

そしてＴ君は、

「俺、夜遊び絶対しませんけど、ど
うしても塾に行きたいから、六時から
九時まで出してもらえませんか？」
と体をかがめて、ささやいた。

「がんばつてゐるみたいだね。携帯処
分したつて本当々！」

「ハア、彼女と毎日何十回もメール
してたら、何か勉強できないなあと思
つて……」

「彼女怒つたでしょ？」

「うん、でも勉強したいからつて言
つたら、わかってくれました」

「本当は、彼女にあきただけじゃな
いの？ この色男！」

志望校も決めて、留学のことや、第
二外国語を中国語にしよう（好！）

思っているなどいろいろ話してくれ
た。私は聞きながら、彼が去年よりず
つと年相応になつてゐるのに気づい
た。ああやつと等身大になつた。今ま
でエネルギーがあり余り、それを向け
る先が見つからず、イラついていたの
かもしれない。大人っぽく見せること
で、友人に差をつけたかつたのかわし
れない。でもどこか嘘っぽく、すぐ色
あせることに、本人がいちばん気づい
ていたのだろう。今年の彼は、いちば
ん落ち着いて、いちばん自然だった。

「あんたたちは、将来に夢を持つて、
夢に向かつて進んでる。今の高校生と
しては、ものすごくラッキーな、超幸
せなエリートだね。おばさんは、うれ
しい」

ほめられて照れくさいのか、たこ焼
きをほおばりながら、三人は急にまじ
めくさつて、ひそひそ話し出した。

「で、さあ、アイツはどうすんだろ
う……」

「まあ、ラグビーしか考えてないか
らなア」

「困った奴だな……。ねえ、おばさ
ん！ どうするンスか、アイツ！」

「アイツ」とは、文化祭を口実に、
この三年間ほとんど祭りの手伝いをし
なかつたわが息子のことであった。

テレビのスタジオ 観覧に参加して

東京都足立区 島村君子

この夏、友だちから電話があり「テ
レビ朝日」の『徹子の部屋』のスタッ
ジを観覧に行きませんか？」と誘われた。
この番組はあらゆる分野で活躍されて
いる方々のトークが聞けて勉強になり
毎日かかさず見ているので即、OKを
した。

当日、原宿駅から「竹下通り」を歩
きスタジオへ。観覧者は女性ばかり十
八人。始まる前に係の方から「徹子さ
んに握手を求めたりしないこと。携帯
電話は切っておくこと」などの注意が
あった。

いよいよ本番。その前に徹子さんが
私たちににこやかに挨拶されたが、い
つも画面で会っているせいか初対面と
は思えなかつた。

その日は三分の録画撮りとのこと
で、まず最初は写真家の長倉洋海さん。
始まる直前、髪の毛は当然整えると思
っていたのだが、意外だったのは、ス
タッフが出演者の顔の汗を拭いてい
た。徹子さんは、ゲストが訪れたアフ
ガニスタンの美しい民族衣装。カメラ
が回りはじめ、しばらくは脇に貼って
あるアフガンの写真をとくとき映しな
がら会話が続く。その後は、コマーシ
ヤルの時間が入るたびに収録は中断。
家でテレビを見てみると、その間は
「スタジオにCMが流れているので
は？」と思っていたが、CMは全く映

らず小声でゲストと打ち合わせなどを
しているようだった。

アフガンでの暗殺、その他緊迫した
状況の話で一回目が終わり休憩。

二回目はベテランの歌手、黛ジュン
さん。黄色のミニのワンピースの下は
スラリとした脚線が美しい。「更年期
で何もしたくなかつたが猫に餌だけは
あげなければならなかつた」とのこと。
徹子さんは真白な衣装に白い靴。終了
後、徹子さん、黛さん、観覧者とも
に記念撮影をしてくださり、後日、写
真を送っていたのだ。

その後五十分の休憩。スタッフで休
んでおられる方もいたので私が「カメ
ラマンは三人、その他のスタッフは十
数人おられましたね」

と言うと、「いや、他の部屋に二十人
いるのですよ」とのことです。

そして最後三回目はベテランの女優
さんでCMでも活躍中の大森暁美さ
んがゲスト。

その収録前にカメラ操作の女性がイ
ヤホンで会話し指示を受けているよう



黒柳徹子さん、黛ジュンさんと記念撮影。後列左から6人目が私

だったので、「別室からだな」と察した。

とにかく主役は徹子さんとゲストの二人だが、出演者と事前の打ち合わせをする人、ゲストに合わせた飲物や花を生ける人、スタジオを作る人などなど、目には見えない大勢の人々によって収録が成り立つことを改めて知った。有意義なスタジオ観覧であった。

私たちは拍手と笑い声だけの参加だったが、一時四十五分集合で終わったのは六時。徹子さんは三回の録画撮りでさぞお疲れでしょうに、はるか向こうの控室の廊下から、帰ろうとしている私たちに手を振ってくださる姿が見え、心あたたまる思いで帰路についた。

スタジオ観覧の後、「徹子の部屋」の番組により親しみを覚え、私と年齢は変わらないのいつまでも若く美しい徹子さん。「これからもずーっとこの番組を見せていただくのでお身体を大切になさってください」と毎日テレビに向かって呼びかけている私である。

(写真提供・筆者)

同級生のよしみ

東京都青梅市 福島みさを(81歳)

夫は二十年留守にしていた郷里に帰ってからは、同級会に出席するようになった。私は手作りの菓子を作り皆さんにと届けていた。ある年よもぎを摘んで、嫁、孫、私の三人で草餅を作って持っていくてもらった。

嫁しゅうと

まるめてぬくしよもぎ餅

とお褒めの句をいただいたし、男性の方からも「旨かったよ、また食べたいね」と言われた。お会いしたことはなくとも、何となく知り合いのように親しみを持たれていた。電話でも手紙でも「奥さんによろしく」とおっしゃってくださいました。

何年か後の同級会のおり、鎌倉の方が御岳の友人宅に泊まり、帰り道他の方を誘って女性四人でわが家へ寄って

くださることになった。私は自分のお友だちのようにお迎えした。全然知らない間柄と思っていたが、先様は私のことをよくご存知だった。

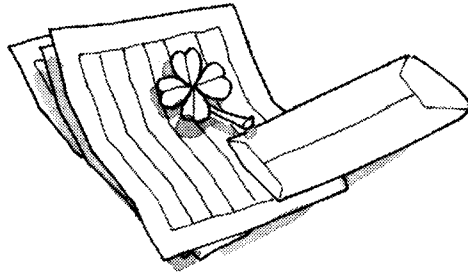
るいさんは、私の実家の製材所始まって以来の職工長である吉松さんの姪ごさんだった。言われてみれば私は幼いころ、軍畑川原での灯ろう流しに連れてきてもらった覚えがあった。

戦時中、木材が統制になり「木材組合」ができた。父は工場は工場長に任せ、自分は会社へ通って事務を担当していた。そのとき事務を手伝ってくださったのが中野さんだった。縁とは不思議なものである。急に親近感がわき話題も盛り上がった。

原島さんは師範学校を出てずっと教職にあり、長男の担任でもあった。

梅ちゃんは建築業のご主人を支え、お子さんを立派に育て、今は若夫婦に譲り楽隠居で趣味を楽しんでおられる。

それぞれの立場で女どうしの話はいつまでも続き同級会とは違った楽しさ



であった。

その後お手紙などいただき、お互い昔の思い出を懐かしんでいた。年賀状、暑中見舞いの他にも夫ははがきをよく書いていた。

八十歳の坂を越えてからはお互い筆不精になり、文通はわずかな人だけになった。それでも夫は書くことが楽しみでよく出していた。お会いした方から「返事書けなくてごめんさい」と言われると何か申し訳なく、「おとうさん、先方様が負担になるといけないから、相手を考えて出したほうがいいかもね」と言ったことがあった。

夫は「男の方は返事をくれないから書かないことにする」と言って何人かに絞った。女性の方は鎌倉の中野さんは筆まめで俳句の達人でもあり、手紙をよくくださった。しばらく便りがないと「一人暮らしだから筑波の息子さんの所へ行つたかな」とつぶやいていた。すると向こうからは「便りがなければお元氣ですか」といつてくる、そんな間柄であった。

原島先生はお手のものだから達筆である。滝島さんは平成七年ごろペン習字教室で私も一緒だった。そのころ封書でくださった表書きは毛筆で端正、見事で感心したものだ。つてには聞いたが特別見舞いの手紙も出さなかった。

「おばあちゃん、お客様です」と孫の千紗が呼んでくれた。玄関に出てみるとお会いしたことのない男性が紙袋を下げて立っておられた。

「御岳の滝島です」「ああ、梅子さんのご主人様！」私は慌てて座蒲団をすめた。

ご主人の話によると、

「いつもお手紙をいただき有り難うございます。今年一月ごろから腰が立たなくなり介護5です。嫁と、娘四人近所におりますので病院へはやらす、家でみています。食事はいくらかも食べるわけではないが「皆と一緒でなくて嫌だ」というので、その都度抱きか

かえて連れて行きます。下のことも几帳面です。今来たのが誰だかも分からなくなり、手紙も読めなくなりました。それでも福島さんからのがきは分かっている、両手で押し頂き一週間でも十日でも枕もとに置いてあります。

「返事を出さなくては」と言うので代筆するからと言うと「私に来たのだから」と言い、受話器を持って来て話すようにといつても聞きません。今は便りがあるのは福島さんだけです」とのこと。

こんな有り難いお話を伺い感動して私は涙がこぼれた。「負担になつてもいけないから」などと思っていたことは止めにして夫は早速はがきを出すことにした。

それにしても家族の皆様何とすばらしい愛情と思ひやり、チームワーク、いまどきこれ以上の幸せは望むべくもありません。戦時中五人もの子どもを育てるのは容易なことではなかつた。が、その親の恩をかくまでして心からの介護をしておられるご家族にお

礼を申し上げ、お疲れにならぬよう心から祈った。

ご主人はお礼にと菓子折を持って、十分のところを歩いて来られ、また元気を足取りでお帰りになるのを見送った。健脚である。

祝賀会出席の理由

東京都新宿区 林 直美

十一月に入つてすぐに、息子の小学校の、開校五周年の記念式典が予定されている。式典には教職員、在校生の他、限られた少数の父兄のみ参加というところで、そのためかどうか、夜に祝賀会が行われることになり、参加者の募集があつた。

私は欠席にした。父兄で出席が想定されるのは、父親でも悪くはないが、もつぱら母親である。主婦が平日の夜に出るのはなかなか難しい。子連れは

だめと限定しているわけではないのだ
ろうが、場所がホテル・センチュリー
ハイアットということを考えたら、子
連れは遠慮せざるをえないだろう。し
かも会費が七千円である。私は七千円
と聞いて、即、欠席にした。



私のような一般人は多いのだ。案の
定、父兄の参加があまりに少ないとい
うことで、再度募集がかけられた。行
つてもいいかと夫に聞いたら、打てば
響くように、だめだと返ってきた。留

守番になるかもしれないと息子もびく
びくして、男二人で猛反対してきた。

確かに七千円は高い、執行部を批判
するつもりはまったくくない。どうい
う経緯でそうなったか、私にはわからな
いが、ちらっと聞いたところでは、そ
れでもホテル側の出血大サービスらし
い。息子は連れていけないので、もし
夫の帰りが遅いと、息子は一人きりで
留守番になる。もう四年生なのだから、
留守番くらいは当然と思いつつも、や
はり気にはなる。

だが、考えてみれば、息子は一人っ
子なので、PTAとしての周年祝賀会
なんて、一生に一度きりのことなのだ。
しかも、場所を考えれば、よほどのこ
とでもない限り、私が入りするよう
な所ではない。周囲に聞いてみると、
私が出ていた以上に、地域の友人、
知人が出席することがわかった。夫の
反対理由はもともと意味不明だし、息
子は今、微妙な時期なので、言い方次
第でどうにかなる。いろいろ考えたあ
げく、私は行くことにした。

夫の心身不調状態も長い。よくなつ
たり悪くなつたり繰り返して、現在
は六時間の軽減勤務中だ。世の中は厳
しくて、給料が格段に減った。六月の
ボーナスは初任給程度だったので、比
例的に考えて、十二月は皆無かもしれ
ない。夫の会社が大手なので、まだ何
とか食べてはいける。夫の病氣（とて
もそうは思えないが、やはりそうなの
だろう）については、波があるので仕
方がないが、隠居生活がしたいのに、
金がないと嘆く夫の面倒をみるのはほ
んとうに疲れる。夫はフランス語教室
とかパソコン教室とかに何万円もつぎ
込んでいることを棚に上げて、給料が
減った後の七千円は大きいと言う。そ
んな夫から私は自由になって、とにか
く気晴らしに行きたいのだ。

おりしも、当日は私の誕生日である。
だが、夫が私のために何かしてくれる
とはとうてい思えない。私の都合で行
くのだから手伝う必要はないと言うに
決まっている。おそらく、行く前には
夕食の支度もすべて整えて、帰宅した

ら着替える間もなく、食べ散らかした後を片付けて、ごろごろしながらテレビを見ている夫を尻目に、私は家事のすべてをしなければならぬのだ。せっかくの誕生日なのだから、たとえ二時間でも、夫から離れて優雅に過ごすにはいいチャンスである。

なるほど、そういうことか。要するに、一生に一度しかないPTAは建前に、本音はそういうことなのだ。

わが家で生かす 心理学

長野県松本市 山田千津子

「面白い！」と思うことに会おうと頭のどこからか鐘が鳴りだし、心がウキウキと踊りだす。どちらかといえば直感型の私は、この感覚でものごとを決めてしまうことが多い。その結果は九五パーセントは成功。残りの五パー

セントはカンが鈍っていたときか、下心（損得？）があつて結果に結びつかないが。ともあれ「ウキウキ、ワクワク」がキーポイント。そして私自身が「とても楽しい」ことが決め手なのだ。

そんなある日、以前、心理学講座で一緒にした方から「面白くて、とても役に立つ講座があるから参加してみませんか」とのお誘い。聞けば、私がかつて幾度となく受講した心理学講座、坂本洲子先生の講座とのこと。「よいと思われることを自らすぐ実践される」その姿勢がとても爽やかで好印象をいただいていた。何より充実したその内容に惹かれたのだ。

「これだ！ 東京へ行こう！」例のごとく「鐘」が鳴りだした。かくして、私の東京行きが決まった。

子どもが家庭の中で心身ともに健やかに成長するために、親はどのような姿勢で子どもに臨んだらいいのか、子どもの躰、教育についてどうすれば親の生き方を子どもに伝えられるのか、心理学をベースにディスカッション、

ロールプレイをしながら、実践的に親がより自信を持つて子どもを育て、自らもより充実した人生を生きられるようサポートしていく。

子育ての経験のない私だが、自己表現・コミュニケーションインストラクターという仕事上の必要性もあつての参加であつたが、このセミナーは、親子関係だけに限らず、あらゆる人間関係（夫婦・嫁姑・対人関係など）に有効だということ。まさに「自分のころ」とどう向き合い、人とよりよい関係を築いていくことが大切かを自然に気づかせてくれるものであつた。

そんなセミナーも中盤にさしかかつたある夜、夫と仕事先との電話のやり取りが聞こえてきた。どうやらクレームの電話らしい。

夫の対応に耳を傾けるとことの次第を伺うことができた。その電話がおわるやいなや「ねえ、今の電話対応はどうだった？」と夫。

「いつもながら見事ね！ 相手の気持ちを引きちんと聞いていながら、自分

の気持ちも伝えるあたりはさすがね」と勇氣づけの私。(五章で学習済み!)「そうか!」まんざらでもないようです、このあたりの素直さが夫のよさである。

すかさず「私、あなたのように冷静な対応ができるか自信ないわ」。かくして、夫はクレームをみごと処理してピンチを脱したのだった。

この「勇氣づけ」のおかげもあって、私がイライラしたり、夫に腹を立てることがめつきり少なくなった(私の成長が著しい!? 自分に勇氣づけ!) 近ごろのわが家はかなり居心地よく平和である。

故郷のお墓

大阪市鶴見区 家守恭子(72歳)

最近、お墓の改修工事をすすめている。

亡父の故郷、倉敷市児島にある丸山

墓地は大昔からその土地に住む村人の共同墓地で、その名のとおりこんもりと低い山に段々畑状に墓石が山肌を覆っている。地形上それぞれの墓地に奥行きはなく、一様にお墓は横並びで稀に二列横隊の墓石もある。

子どものころ、夏休みを父の故郷で過ごし、お盆にはこぞってお墓へ参った。みんな少しおめかしをし、殊に都会から帰省した子女はよそ行きの服に着替えさせられた。

後年気づいたのは、先祖を迎え、送る行事に村人はみんな丸山へと向かう。蚊に食われるのでお日様が昇る前の時刻、山裾の受取地藏さんのあたりは、社交場かお披露目の場になっていたのだった。

終戦前後、疎開した少女期は祖母に従ってよくお墓へ行った。旧暦の七夕までに田の草を取り終えると、盂蘭盆会の支度にかかる。まず竹藪で線香を立てるための細い青竹と、花立て用に太い青竹を切り出す。次の日は槨の小枝を刈り、畠の鶏頭の花を切ってお墓

に供える。何しろお墓が多く、四か所に分散しているので天秤棒で担って坂を上がり下りしたものだ。水は最寄りの池で汲み、お供え団子の粉も臼で挽いた。

私が大阪へ戻り、相次いで祖父母が亡くなった後も、同じ丸山にお墓を持つ親戚が、手分けして好意でお墓を守ってくれていた。しかし、それぞれ次第に高齢化し、代替わりしたり、中には移り住んだ所へお墓も引越したりした。

わが家のお墓も永い年月に段々畑状の墓地が弛み墓石が前に傾き、下の段のお墓へ土砂がかかる所ができてきた。あわてて職人に連絡をすると、「三頼まれているので、その内纏めてやっておくとなれた返事だった。どちらのお墓も石やブロックで補正して墓地を守っているのを初めて知った。

ここ十年来、夫、息子と墓掃除に帰省を続けたが、夫が体力的に無理になった。また、せつかく車を走らせて帰ったのに雨に降られたり、適当な掃除

では草が根を張り次第に手に余つてきた。

倉敷市のボランテニアセンターに相談すると、Yさんを紹介してくれた。その人は丸山のM家とN家のお墓の管理をまかされた誠実な人柄で、安心して頼むことにした。

八十五歳になる義母は、毎年一週間ほどお盆には里帰りをし、そこから車で一時間の丸山墓地へお参りをする。今夏も墓参して綺麗に掃除ができていたと言うが、四か所の内メインの1か所しか参っていない。足元がおぼつかないせいのみでなく、はつきりとは知らないらしい。たまたま従姉妹も叔父さん（私の父）のお墓参りをしたとの電話でも、そのメインしか知らないと言った。

結局この十余年、夫と息子との三人が適当に掃除をしたついでに拜んだのみで、花も線香も供えなくて誠に申し訳ないことをした。

お墓とは、ご先祖にお参りしてこそのお墓だと思ふ。



掃除して綺麗にのみ保つのなら公園、庭園の類と変わらない。

墓地、墓石に詳しい人に相談して、メインはそのままに置き、他の三か所を一つに纏める、先祖供養に五輪塔を建立することで落ちついた。

先日、約三十基の移動する墓石の魂を抜く儀式があり、来月初めに入魂式をする運びに決まった。その日はたくさん花も水も用意してお供えし、お参りしようと思ふ。

ビルさんとローラ

東京都武蔵村山市 大沢陽子

十月十八日、夕食後、生協のカタログを見て来週買う物を選んでみた。「欲しい物があったら丸をつけて」と夫にも頼んだ。お酒を飲んでいた夫はカタログを見ながら「肉も野菜も近くで買ったほうがいい」と言い、その他の物を見ていた。「この間、芳賀さん

がビルさんに庭の片づけを頼んだら、ビルさんやせていたんですって。ローラも背中をなでたら骨がゴツゴツしていたんで涙が出ちゃったって言った。ビルさん一日一食なんですって」と言ったら、夫は涙ぐんで、「なんでそんな大事な話ちゃんとしなの？ 芳賀さんの所に来たのはいつ？」「半月くらい前みたい」「どうしてすぐ言わないの？」「聞いたのがきのうだった。きのう、あしたの環境の会のことで連絡することがあって芳賀さんに電話したとき聞いたばかり」「いつもなんだかんだ連絡しあつてるのに、そんな大事なことで早く知らせてくれないの？」夫はビルさんが一日一食と聞いてびびくりしたらしい。

ビルさんはイランの人。三十八歳。仕事はまじめで熱心。でも仕事がない。しばらく内装の仕事をしていただけ、解雇され、それから独立してその仕事を始めた。友だちにお金を借りて車を買った、名刺も作って注文を取って歩いて

ているけど、内装の仕事は今年の初めに芳賀さんの仕事があっただけであと一件もないそうだ。ずっと前に勤めていて、仕事が減ったんでやめなければならなかったところの親方に、ときたま誘われて手伝ったり、庭の片づけ仕事をしたりしてしのいでいるけど、仕事が続かなくて大変らしい。と、これも芳賀さんに聞いた。

「ビルさんに電話かけて」と夫は言う。電話をした。呼び出し音は鳴るのにビルさんは出ない。もう一度かけなおした。応答がない。食べる物がなくて、死んでしまったのか、と思う。死なせたくなかったと思う。なんで気がつかなかったのかと自分のうかつさが悔やまれる。年金生活とはいえ私たちは日に三度ちゃんと食べている。一食しか食べていなか

ったビルさんに何の手もさしのべなかつたなんて残念だ。

「うどんや缶詰や何か思いっ切り買って持っていこう。一食なんて、切ない。こんなもの見ていられない」と夫はカタログをとじた。「もう一回かけてみて」というのでかけた。いた。「いたー」と言ったら、「すいません、いつも心配ばかりかけて」と言う。いつもののんびりとした朗らかな声だ。

「変わります」と夫に受話器を渡した。「芳賀さんにビルさんがやせた。ローラもやせたって聞いて切なくなっちゃった」と夫は涙ぐんだ。お酒を飲んでいるときはよけい涙もろくなるのだ。「困ったことがあつたら言つてよ。一日一食って聞いて切なくて、やんなっちゃった」と夫はまた涙声になった。「夏やせです」とビルさんは言っていた。

ローラは一九九六年の五月初めに、ガッリガリにやせてがい骨のような姿で現れた犬だ。初めは泥色のひふだったから何犬か分からなかった。ビルさんが工場の敷地のふちにつないで世話をした。隣の家の工場働いていたビルさんが家に帰ってからの夜とか休日

ていくととびついた。夢中で食べ続けた。その量が弱っていたローラの体には多すぎたのか、ズーっと下痢が続いた。ひふはカサカサに乾いていて痒がった。先生にも来ていただいたけれど、ローラには注射より何より、日のたつことが薬だった。ビルさんがたんせいこめて世話したから、ローラはしろじろとした毛なみの立派なシベリアンハスキーになった。

その年の暮れにビルさんは隣の工場を解雇された。それからビルさんとローラは年に二度くらいは来てくれる。苦しいときをここで乗り越えたせいか、ローラはここが好きなのだそうだ。ここへ来るととてもうれしそうだとビルさんは言う。

この前芳賀さんの家で仕事をする前に寄ってくれたとき、原っぱに置いてあった車の所からローラはサーツと走り出した。「アーツ、逃げちゃう」と私は言ったけど、そうではなかった。走って私の所へ来てくれたのだ。荷物を受け取ってすぐにひきあげようとし

たから、もう少しここにいたいと思っただのか、まださよならを言っていないなかつたと思っただけにきてくれたのか、ローラが走ってきたことをみんなで笑って、ローラと車の所まで行つた。

「あさつての日曜日、仕事とか友だちとの約束とかがなかったら来てください」とお願いした。夫はすぐに食糧を車に積んでビルさんのところに持つて行こうと言つたけど、それより、車があるなら来てもらったほうがいい。お茶や果物が用意できるし、時間によっては食事の用意もできる。

二十日、日曜日、十一時ちよつと前、ビルさんとローラがきてくれた。ローラをみて思わず笑ってしまった。「どこが？」と思つて。ローラやせていなかった。いつもどおり太つていておだやかだった。

ビルさんは顔が黒っぽくなってちよつとやせていた。一日一食なのはそれで十分だからですと言つていた。一時ごろ食べるとあとは食べたくないのだ

そうだ。なんとか暮らしていけますとも言つていた。

おひるはうどん。おとといデパートで試食したときすごくおいしくて、そのうどんとそのつゆを買い、いつかこれにしようと思つて待っていたのだ。うどんをゆでて皿に盛つて小口切りのアサツキを散らしてそこにそばつゆをかける。それだけ。あと冷凍品の小さくてパリツとしたおつまみ餃子、肉と野菜のいため物、トマトのタルタルソースがけ。デザートは平種なし柿。簡単なものばかり、きのう夫が作ったハリハリ漬けも出した。

シコシコしておいしい讃岐うどんだったんだけど、「そつけない。八目ソバのほうがよかった」と夫には不評だった。デパートで試食したときはとびきりおいしかったんだけど、あれは午後一時ごろでおなかがついていたのでそう感じたのか。肉じゃがが何か前もつて作つておくんだった。

ビルさんたちは一時半ごろ帰った。乾めん、スパゲッティ、小麦粉、缶詰

(いろいろ)、紅茶、果物など段ボール箱二つ分の食糧と段ボール箱につめた衣料品と持って帰ってもらった。衣類は友だちにいただいたり、バザーのとき集めたりしたものだ。お金も贈りたかったけど、これはローラのフード代くらいのことにした。たくさんだとあと続かないかも知れないし、この次来るのをためらうかも知れない。

「いっつも心配かけて、どうやってお返ししたらいいか分かりません」とビルさんが言った。

「元気で長生きしてくれること」と私は言った。

日本で生きていくって、なんの保障もないビルさんにはとても難しいと思うけど、でも、ビルさんのために泣く人がいるんだから、絶対に生き続けてほしい。

(え・西宮さき)

おしらせ 「わいふ」三〇〇号に向けて

一九七六年一月、前年の「国際婦人年」を受けて新しい女性のための投稿誌を創ろうと「わいふ」の東京編集部は発足しました。それ以前は一九六三年から十三年にわたり、兵庫県宝塚市で発行されていたミニコミでした。

東京編集部はそれまで月刊であったのを隔月刊とし、一三八号から発刊し始めたのですが、それから二十七年、とうとう三〇〇号に達しました。投稿の専門誌というのほかにありませんが、こんなに長く続いたミニコミ誌もまたなかつたと思います。これも読者の方々のご支援の賜物と感謝しております。

▼三〇〇号から、「投稿のきまり」が少々変わります。投稿なさる方は必ずお確かめください。

▼コラムの改題にご注意いただきたいのですが、とくに従来「だぶってよい

もの」の中に入っていた「私もひとこと」が、だぶりができなくなったのをご承知おきください。

これは初心者のため、書ききれない方のためのコラムですが、近ごろは書きなれた常連投稿者が、だぶり投稿として利用している傾きがあります。上手なものばかりで、初心者が「はじめに」という気持ちでは入りにくくなっているように思います。そこで「だぶり」からはずしましたので、本来の目的に沿った投稿が、たくさん集まることを期待しております。

▼「私の意見・あなたの意見」は「ズバリ一言」に一本化しました。

▼「情報コーナー」をもっとご利用ください。いろいろな本をあげます、とか、これこれをゆずってくださいとか、仕事をしますとか、いろいろ利用法はあるはずですから。

▼座談会の出席者が少なくて残念です。ぜひテーマや場所、日時などについてご提案ください。

▼グラビアにも多数の応募をお待ちしています。

子どもをダメにする親・伸ばす親 学校外教育研究会著

主婦の友社

本体 三〇〇円＋税

二〇〇二年八月一日第一刷発行



勉強を教えている小規模塾だ。

そんな塾の先生たちが、子どもたちや親たちのナマの姿に接して、常日ごろ感じていることを率直に訴えているのが本書である。これを読めば、近年続いている、信じられないような残酷な少年犯罪も、その辺の普通の子どものたちの延長線上にあるのだとわかってくる。

受験勉強、テレビ、性への関心、反抗期、オシャレ、不登校など、子どもたちにまつわるあらゆる問題が取り上げられているが、特に、ケータイやパソコンにのめり込む子どもたちや、わが子をバイリンガルにしたいと奔走する母親の姿など、まさに「いま」の状況が鮮やかにとらえられている。

東京都日野市 松井真帆

この本を著した「学校外教育研究会」というのは、日本各地の地域塾の塾長たちが作っている会である。塾といっても、大手の進学塾やチェーン塾とはまったく性格がちがひ、塾長みずからが地域の子どもたちとじかに接して、

「十二歳になるまでに親がなすべきこと」と副題にあるように、幼稚園児とその親たちのなんともジコチュー的な生態に始まって、ひきこもり青年にいたるまで、そうなっていく原因を鋭く温かいまなざしで緻密に解き明かしていく地域の教育者たちによって、読者は自然に、わが子が中学生になるまでに、どう接したらよいかを学びとることができる。

この塾教師たちは、それぞれの個性によって、音楽を聴かせたり、万葉集を取り入れたり、作文に力をいれたり、はたまたボランティア活動や環境教育まで手がけるなど、独自の方法で子どもたちが心を開き、元気よく、バランスのとれた成長ができるよう、さまざまな実践もしている。

地域塾の先生だからこそ書ける、貴重な示唆に富む一冊である。

(え・広瀬のりこ)

私の意見

あなたの意見

子どもの恋愛—そのとき
親はどうしますか

長電話

愛知県豊明市 村田由香里（37歳）

ある晩のこと。息子の電話が三十分経っても終わらなかつた。日ごろ無口な彼が、自分から友だちに電話をかけるなんて珍しい。ましてや長電話とは。

「だれに、かけてたの？」

やっと受話器を置いた息子に問いかけた。

「えっ？ 同じクラスの女の子だよ」

「だれなの？」

「やだ。おかあさんには、ないしょ」

息子は、まだ幼さの残る顔を赤く染め、笑いながら自分の部屋に入ってしまった。そのときは女の子に電話するなんて珍しいこともあるもんだ、時間割のことも聞いたのかな、ぐらいに思っていた。

ところが、翌日から彼は毎晩決まった時刻になると、その女の子に電話をかけるようになった。黙っていると、四十分経ってもまだ話している。ときどき聞こえる笑い声は、何だか私を不愉快な気分にした。息子の楽しそうなようすとうらはらに、私のほうはイライラしてくるのだ。何？ もしかして、これが世に言う、姑根性というもののなかしら？

「もう、二十分が限界だよ。電話代タダじゃないんだよ。自分からかけて

ばかりで、たまにはむこうからもかけてもらったら？」

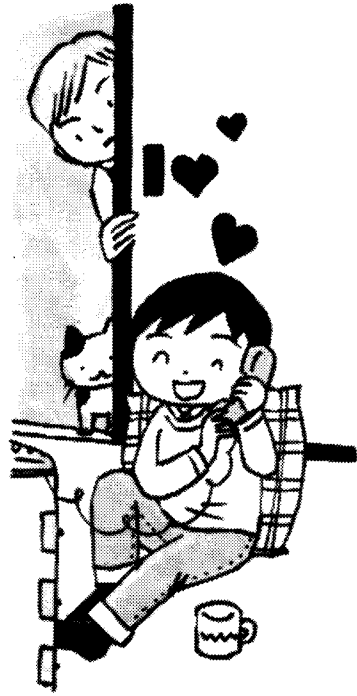
「だって、家の人が出ると恥ずかしいからかけてって言うんだもん。それになかなか切らしてくれん」

電話が終わると、息子と問答が続いた。

相手はどんな子だろう？ うちの子はおとなしいから、その子の言いなりになってるんじゃないかしら？ 帰宅した夫に相談すると、

「おれはアイツの気持ち、よくわかるぞ。あのころ、おまえもなかなか電話切らしてくれんで、おふくろによく怒られて困ったよ」

思い起こせば十数年前、私も夫と毎晩長電話をした。横から「もう切りなさい」と夫のお母さんの声がよく聞こえたっけ。私も同じ立場になったということがある。といっても、あのころ夫はすでに大人だった。しかし、わが息子はまだ小学校六年生なのだ。毎晩女の子と長電話というのは、やはり考えものである。



ある晩は、デートの行き先はどこがいいかと私に相談してきた。母親に相談するなんて、まだまだかわいいところもあるじゃないのと少し安心。しかし、鬼のような教育ママではないつもの私だが、かわいい息子を、このまま放っておくわけにはいかない。

ちょうど学期末の面談があり、私は担任の先生に相談してみた。先生は驚かれながら、

「毎日電話ですか？ それは知りま

せんでした。ちょっと小学生では考えものね。まあそのうちどちらかが飽きてくるでしょう。すこしよすを見ましよう」とおっしゃった。

そしてその言葉どおり、ほどなく二人の恋は自然消滅していったのだ。

息子の淡い初恋は消えたが、思いがけず自分の隠れた姑根性を知るできごととなった。我ながら、先が思いやられる。

(え・箕輪絵衣子)

★わいふバックナンバー

(特集テーマ)

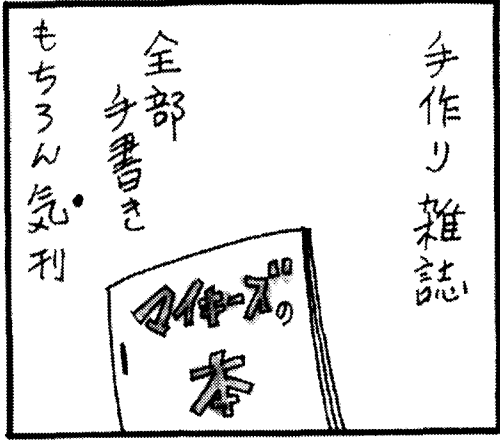
- 269号 再就職で得た仕事、得られなかった仕事
- 272号 カウンセリング体験
- 273号 子どもとテレビ
- 274号 引っ越し騒動
- 275号 料理と私
- 277号 不妊治療・私の場合
- 278号 「おけいこ」との格闘
- 281号 思い出の地・再訪
- 282号 子育ての損得勘定
- 283号 私の読書歴
- 285号 美容と私
- 286号 私の健康法
- 288号 車と私
- 293号 特集なし
- 294号 夫婦げんか
- 297号 嫁と姑のつきあい方
- 298号 夫の転職

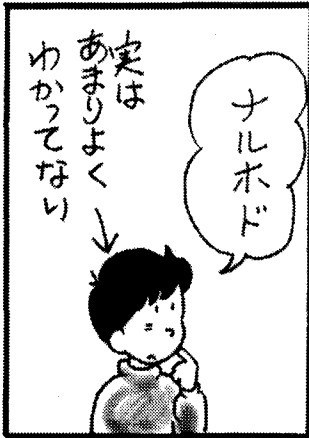
変わる主婦・変わらない主婦

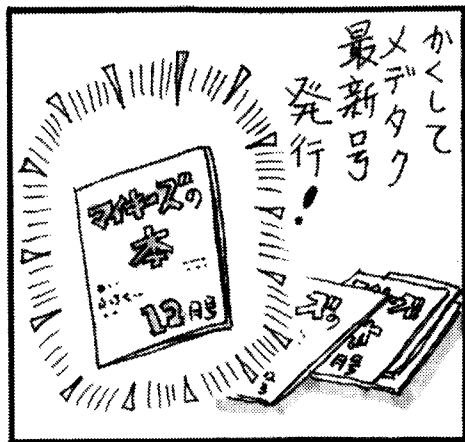
一五〇〇円

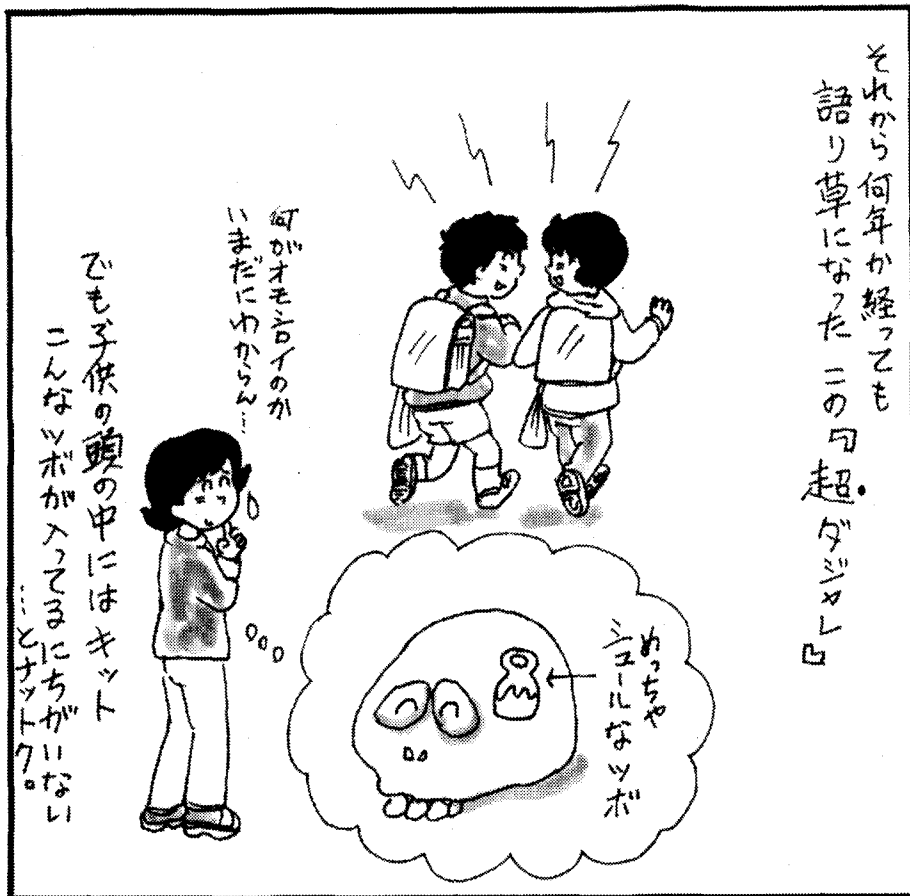
お申し込みは ☎〇三三三六〇四七七

これが
子供の生きる道
 栗田光









子育てフオーラム

NMSのページ



子育て講座に参加して

東京都練馬区 みわママ

最近、区が主催する子育て講座へ参加してきました。数人のお母さんから「公園などで子どもが、他のお子さんを叩いて困ってます」「私は子どもを叩かずに育てているのに……」「一人目には叩かないで育てたが、全く言うことを聞かないので二人目には、パチンとすることも……」など、子どもが叩く、子どもを叩くには、皆さんいろいろな意見があるものだナーなどと

自分は何ら発言せず（時間が少なく、発言できない人が七割以上……）ただ人の話を聞いていた。

私はというと、うちの子どもは叩かれるより叩く側の子どもである。そして親の私も、あまり言うことを聞かないと叩くことがある親です。そのためか公園や児童館では、ほとんど謝る側なのです。謝ることが多いから、叩く側だから言うわけではないのですが、子ども同士のチョットしたトラブル、多少の叩く叩かれる、押した押された、オモチャを引っぱつたら友だちが倒れちゃったなど、ケガをしないかぎり、見守りたい気持ちもするのです。とは言い、私たち親子って、どのグ

ループにも入っていないし、特に親しいお母さんもないので、公園や児童館では、遊んでいるけど孤立している？親子なので、止めないわけにもいかず（当たり前？）謝らないわけにもいかず（これも当たり前？）、他のお母さんの視線があるがゆえに疲れるのです。

ごくたまにうちの子がよそのお母さんから謝ってもらうこともあるのですが、ほんの些細なことに、ただただ大げさに泣く子どもにも、お母さんまで大げさに反応しなくても……と思うわけですが、どのお母さんも「他のお母さんの手前？」黙って見ていることが難しいのかナー？などと感じてしまっ

のです。

どのお母さんも、子ども
同士のトラブルに、急いで
引き離し、自分の子に注意
しつつ相手親子に謝るけれ
ど、それって親が自分の子
に悪いことをしたら謝るル
ールを身につけさせたいた
め？ 謝らないと自分たち
親子の居場所がなくならな
いか心配なため？ 他のお
母さんからの視線が痛いた
め？ 理由はそれぞれだけ
れど、なんとなく納得でき
きないのです。納得できな
いといっても、私もやはり
謝ります……。

子どもの小さなときの母
親の生活って、子どもを通
じた母親同士の付き合いが
主だから、ここで自分たち
親子の居場所をなくすと、
公園ジブシーなんてことに
なりかねない……なんて思



ったら苦しいものね。苦しい母の現実
です。

私、人付き合い苦手なのです。な
で私たち親子の行動パターンって、今
日は、こっちの公園、次の日あっちの
児童館、その次は電車に乗ってシヨッ
ピング……数か所の公園、数か所の児
童館を巡るので、人から見ると、いわ
ゆる公園ジブシーのよいところは①友だ
ちづくりが苦手のため、親しくなっ
て四六時中何から何まで一緒に行動、と
いう煩わしさはない。②仲間はずれに
される心配もない。悪いところは①親
しくなれば「子どものケンカだから少
し見守っていませんか？」と提案でき
るのに……②たまには大人とおしゃべ
りしたい。みたいな点でしょうか？
まあ、よいところも悪いところも自分
で選ぶのだから仕方ないことではある
のですが……。

講座に参加して「叩いた、叩かれた」
以外にも「食べない」「話さない」「歩
かない」「挨拶しない」「友だちの輪に

入れない』『オムツが取れない』いろいろな年代のお母さん、いろいろな年齢の子どもがいて、同じにできるはずなどないのに悩んでしまう私たち。

どこかで『あなたの子育ては、それでいいのよ。大丈夫よ』と言ってもらって『ホッ』としたい。『うちも同じ悩みを持っているの』と言ってくれる仲間がほしい。悩みを持つのも、話すのも、解決するのも、全て自分で行動するしかない。自分も含め、全ての悩めるお母さんたちが、楽しい子育てをできるといいですね。

たくさんの講座に参加している私、悩みは山積みだけれど、皆も悩んでいると、分かったことが収穫でした。

蛙の子は蛙だから

千葉県船橋市 由美あき子（44歳）

私には二人の子どもがいる。上の子は小六の息子で下の子は小一の娘であ

る。毎日二人は日課のようにケンカをして、ヒステリックになった妹はじんだを踏んで大泣きする。兄は反撃の手をゆるめず、それはそれはすさまじいケンカである。

マンションの最上階に住んでいるので下のお宅には本当に申し訳ないのである。昨年何度となく注意された。そのたびに頭を下げ、どんどん深々と頭を下げてあやまることとなってしま……ところがである。親の心、子知らずである。二人は結局同じことをくり返している。母親として何度も何度も毎日同じことで叱っている。二人も一時はシユンとして反省しているかと思えるが、しかし結局何の教訓にもなっていないかのごとくである。

私は悔しくて仕方がない。何度同じことをくり返せば分かるのか？ 本当に不思議である。下のお宅にもお詫びに伺った折に、「この次からは実際に子どもたちに注意してください。今どきの子どもたちは他人から叱られることがほとんどなく、ものごとのよしあ

しに対する考えが甘いので、どうか直接子どもたちに注意していただきたいです」と申し出た。ところが下のお宅では、「お母さんがそんなに気に病むのでしたら、私たちはなるだけ我慢しますからお子さんたちを叱り続けるのはやめてください」と言ってきたのだ。驚いてしまった。まさかこんな返事があるとは夢にも思わず、私としては他人に叱っていただけけるチャンスと思っていたのに正直がっかりしてしまった。私の子どものころなどはぜんぜん知らない大人に叱られたり注意を受けたりするのは日常茶飯事で、当時はそのことに反発しつつも反省するのが常で、自分が大人になり、親となつてますます痛感するのは、そうやって叱ってもらったからこそモラルある大人になれたんじゃないかということだ。

娘は私に叱られると「ママはいじわる。ママは私が大嫌いなんでしょ」と言う。「そうじゃない。大好きで大切だからこそ、きちっと叱るんだよ。あなたが大大人になったときによいことと

悪いことがちゃんと分かる人になってほしいと思ってるからママは今、叱

るんだよ。今はママのこといじわるだと思ってるからママが叱った



ことはちゃんと忘れずに覚えていてね」と言ってる娘を抱きしめる。

娘は黙ってしまう。息子にも同じようにしっかりと叱り、やはり抱きしめる。いつまで続くのかなあ？ 二人に教訓になる日がくるのかなあ？ 私は母親として子育てをまちがっているのかなあ？ 日々くり返されるケンカ、近ごろは下のお宅に顔を合わせることもできないういである。あーあッ！ どうすればどうやって叱れば言うことを聞くようになるのだろうか？ ケンカにかかわらず他のことにおいても何度も注意したり叱っていることに対して、その場しのぎの反省だけで同じことをくり返す始末なのだ。

私の何がいけないのだろうか？ 私は怒っているのじゃなく叱っているのだけれど、子どもたちはきくと「ママ怒ってる。ママ怖い。ママのいじわる」ということになってしまうのだろうか？ 躰の行き届いている子どもたちに出会おうと「親」さんの躰がいいから……」と思いきり感心してしまうが、だけ

ど「その子どもたち自身が自覚してちゃんとしているからこそできることじゃないか！」と思ってしまう私は、根性がひねくれているのだろうか？その子本来に持ち合わせた本質というか性格というか？ それらによっても随分と子育てのしやすさが違ってくるように思っているのは私だけだろうか？それにしたってわが家の二人は私がお腹を痛めて産んだ子どもらで、とどのつまりは私にもこんなときがあったのか？ 蛙の子は蛙だから。

思春期の息子

神奈川県中郡 石井しのぶ（43歳）

「もうおまえなんか家に帰ってこないよ」

「わかったよ。じゃあ、明日は帰らないから！」

昨日、中二の息子と口ぎたなく言い争いをして、かわした会話が、翌日の

昼間になって、急に重苦しく思い出されたきた。今日、本当に帰ってこなかったらどうしよう……。

今週末、息子の通う中学の文化祭があるため、毎日その準備に忙しく、息子はいつになくストレスをためこんでいるようだった。

この日も帰ってくるなり「ムカツク」の連発である。「どうしたの」と聞いても「聞くな馬鹿」と返ってくる。だんだんこちらも頭にきて、「いいかげんにしなさい」とどなってしまった。

その後も、私の顔を見るたび、ネチネチと「見るだけでムカツイてくる……」と言っているの、ついに私も完全にキレた。

「理由があるなら、はつきり言いなさいよ」

とトレーナーの首をつかむと、

「そうやって聞くのがウザいんだよ」とさらに、にらんできた。私も、

「理由も言わずに人を攻撃するのはイジメと同じだ！」

と負けずに言い返した。

「言えー」「言わない！」の言い争いがしばらく続いた。頭にきた私が、そこからあつた本を部屋中に投げつけていると、夫が登場。

「ためえら、いいかげんにしろよ！」と大声を出して、今にも息子を蹴り飛ばしそうな雰囲気だったので、今度はそれを力づくで止めなければならなかった……。

いやだ、いやだ……。何が原因でこんなに大騒ぎが起きているのだろうか……。

「ムカツク、ムカツク」と言うなら、「こういうことでムカツイています」と説明すればいいことではないか。わけもなく、毎日不機嫌さをまき散らす息子に、私の精神も参りそうだった。

結局、無理やり聞き出した話は、文化祭の準備をさぼる子がいて頭にきているということ。せっかく一生懸命に使っていた、教室に飾る提灯が、急に見当たらなくなってシヨックをうけたこと……などだった。

疑うわけではないけれど、提灯は誰

かが、隠したか捨ててしまった可能性
が大きいのだという。少し前にも、提
出しようと夏休みの社会のレポートを
持っていったら、確かに入れておいた
ファイルの中から消えてしまったとい
うことがあった。人が信じられなくな
るようなできごとが続いたり……他の
子のわがままな態度を見てみると、無
性に腹が立ってくるのだという。

またもう一つ、最近部活をやめた子
に対し、元の仲間で無視するような態
度をとる子がいるのも、見ていて許せ
ないのだという。

「学校はいやなところだよ」

息子はそう言った。でも中には、何
も感じないで学校に行っている子もい
るはずだ。どうして、息子は、そこま
で人の行動が気になって、自分のスト
レスにしてしまうのだろう。人のわが
ままや、いじわるを見逃せないとい
うのは、実はとても、健全で正常なこ
なのかもしれないけれど、敏感すぎる
のも問題だ。

学校でためてきたストレスを、家で

爆発させてしまう自分もいやでたまら
ないと言った。

「人のことなんて気にしなればい
いじゃない」

と言つてはみたものの、変に正義感の
強い性格は変わらないので、何のなぐ
さめにもならない。

男の子を持つ母親は、娘を持つ母親
よりも寿命が少し短いそうだが、納得
である。

そういえば、夫もよく職場のストレ
スを私にぶつけて当たり散らす。この
父親の性格を受け継いでしまったため
に、こんなストレス持ちなのか……そ
れとも、男の子は今の時期、みんなこ
うなのか……。

今日は一日中、文化祭準備の日であ
る。また新しいストレスを見つけてこ
なければいけない……。

ときどき、嵐のように起きる家庭内
騒動に、どう対処していけばいいのか
……今、私は途方にくれている。

(元・海砂)

専門の生命保険コンサルタントを派遣いたします。

(東京都内・近郊のみ)

お一人ではチョット心細い、
でも何人かいれば心強いあなた…
お友達・職場の仲間などなたでも結構です。
3、4人でも何人でも
あなたのお宅に、あなたの職場に、お集まりください。
生命保険の専門家が皆さんの疑問にお応えいたします。



くわしくは「わいふ」あて 電話で資料請求してください
わいふ指定代理店 東京海上火災保険株式会社 東京海上あんしん生命保険㈱

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771

私も ひとつこと

拉致問題に心痛

東京都東村山市 山名孝香

歴史に残る小泉首相の訪朝以来、子を持つ母として他人ごととは思えず心痛む日々です。皆無事でいることが申し訳ない感じさえしてきます。先の植民地問題を引きずっているとはいえ拉致問題解決なしに国交正常化はあり得ないというのが国民の総意でしょう。外交の指針たるべき孫文の言葉が紹介されています。「帝国主義の爪牙になるか アジアの干城になるか」重い言葉として感慨深く承りました。

拉致問題

千葉県船橋市 由美あき子

涙が出た。四半世紀、二十五年もの間待ちに待ったというのに死亡の知らせで終わりにしろというのだろうか？ 横田めぐみさんを始めとする人々の拉致問題、親御さんたちも白髪になり、わが子に逢えるまでは死ぬに死にきれないだろうに何て理不尽なことだろうか？ 当事者家族だけの問題ではない。国の問題として納得のいく報告がされるまで、絶対に取り組み続けるべき問題と、日本人の一人として思う。

バリアフリーに思うこと

奈良県奈良市 村田裕美

アジアへ行く値段と一緒の会員特別割引で西オーストラリアはパースへ行つてきました。のどかな町でしたが、少し気づいたことは空港や、町の中は、トイレがバリアフリーになっているところがほとんどでした。ホテルのロビーにもスロープが設置しており、スリッケースを持つ私たちも大助かりでした。国内も、だいたい開けてきましたが、昔のことを思うと旅行しやすくなったことにホッとひと息です。

カラスの枕

大阪市城東区 布施幸子

カラスウリ、私は京都嵯峨野出身ですが、その辺りでは「カラスの枕」と呼んでいます。種は大黒様の形に似ていて子どもたちの宝物になっていました。蛙の形に似ているという人もあり、「シアワセ帰る、金帰る」の縁起物にもなっていました。私も大黒様が欲しくて欲しくて、墓地の入口の竹藪へ一人でこわごわ採りに行きました。今、あれほど欲しい物が残念です。

はじめまして

福岡県直方市 清水美登子

七月九日の読売新聞の記事で「わいふ」の存在を知り、何より「主婦投稿誌」であることに心ひかれました。人が生きて生活する中に起こる諸々のできごと、そのときの思いや悩み、喜びをそれぞれの立場の女性が自由に書いたもの、とても素晴らしいと思ひ会員にさせていただきました。どこかに共鳴してくださる人がいて、誰かが読んでくださることで勇気と元気ができます。よろしくお願いします。

ホット・アイデア

静岡県小笠郡 鴨川典子（48歳）

夏に知人からカスピ海のヨーグルトをもらった。牛乳に種を入れて一晩常温で、完成。まろやかな酸味と舌触りで、とてもおいしい。高血圧、糖尿病、シミ、シワに著効ありとか。が、常温でとはいっても気温が低くなってきたて思案していたら、市販物を種に利用している人が「牛乳を温めてから種と混ぜる」と試してみたら、とてもよい。ホットなアイデアをありがとう。ホットとしました。

同居騒動？

東京都練馬区 みわママ

私、義父にすごく怒っています。義妹が昨年、離婚して実家近くのマンションに住んでいました。家賃は、もちろん義父払い。まあ、そこまでは仕方ない？って思っていたのだけど、最近、何を思ったか、義妹のために一戸建てを購入したので。私たちが土地を借りて家を建てたいとお願ひしても、同居すればいいじゃないか、と断るくせして……。同居なら義妹とすればいいじゃない。私はイヤです。

二時間だけの神様

東京都文京区 トト安田

ヘルパーの私が車椅子を押して公園へ行ったとき、六十歳くらいの男性が笑顔で声をかけてきた。「さつきからあなたの話し方を聞いていると神様のようですよ」と。自分としては特別意識して話しているわけではないが、一日二時間だけこの方の介護にお伺いしているから、最上の優しさで接してあげられるものの、これが毎日二十四時間ずっとだったら、きつと自分は神様どころか鬼ババアになつていさるだらうなあ……。

イラスト効果

千葉県船橋市 祥 まゆ美

二九八号に掲載された私の文章を娘に読んでもらったら、「このイラスト書いた人、誰だろうね、私に似てるよ」とポツリ。本当に、顔の雰囲気がつくりで驚いた。

わいふを読むたびに、もし、イラストや写真がなかったら、いくら文章がよくても、楽しくないかもしれないと思っていた。イラストがそえられることで、イメージもふくらみ、心に残るものも多くなるのかもしれない。

あっさり携帯メール

東京都北区 安村豊子

やっぱり便利！ そして楽しい。パソコンは起動して、ソフトを立ち上げ、といくつもの段階があるのに、携帯なら見れば光ってメールが来てるのがわかり、すぐに返事が出せる。前号で「やらない」といつていたのに、今や「メールなら携帯」。まーパソコンがこわれたので必要に迫られてのことだったが、気は変わるもの。今は「文字で十分。写メールなんてやらないよ」と思っているが、さてどうなりますことやら。

愛知学園教師殺人

愛知県春日井市 伊藤てる子

九月、春日井市で施設からの逃走を企み、宿直の教師を三人の少年が、しめ殺す惨劇が起きた。直接首をしめたC少年は、両親の離婚を機に、非行を重ねるようになったようだ。もし家庭が温かかったなら残虐極まりない凶悪犯罪は起きなかつた。犠牲になられた先生には、三歳と一歳の男の子がある。「おれたちの父を返せ」とも言えない。親は、もつとわが子に愛情を持って育ててもらいたい。

学校での性教育

千葉県 山橋ゆり(54歳)

あつてなきが如しが実情。熱意と力量のある教師(担任や養護教諭)がいて、それを認め行わせてくれる管理職がいるか否かにかかわっている。なにしろ「時間」が確保されていないのです。校外学習の前に「学級活動」の時間などをもらって、とびこみで「生理」の指導をする、などがほとんど。中学校の「保健体育」の授業も体育実技に力を入れ「保健」はなきに等しい。

孫の病氣

東京都足立区 永田道子

仲よくしている友人の家に孫が誕生。その喜びも束の間、あまり聞いたことのない病気で呼吸困難になり入院して酸素吸入。辛い命を取り留め一か月で退院。現在、通院はしているが見た目は元氣。そして病氣が遺伝かもしれないとのことで友人夫妻が入院して精密検査を受けたらご主人がガン。生まれつきの孫の病氣は残念なことだが祖父は早期発見でき、手術でガンを除去。孫の病氣のおかげで命拾いしたのである。

あつ秋です

千葉県 森野種子

高三の娘が家を出た。不登校以来十年、二十四歳の長男とのいさかいが原因で。居合わせなかった私はその夜帰宅しなかった娘と翌日近くのファミレスで明け方まで話した。長男には長男の動けないわけがあるうけれど、娘には娘の積年の思いがあり、暴力を振るわれたことで爆発した。アパート探しに娘のCT・MR検査も間に入り、暑い暑い夏も吹飛ぶかのように過ぎてしまい、ようやく気持ちちが落ち着いてきたこのごろ。

ハグしちゃった

東京都練馬区 瀬谷栄子

リンさんの一人娘の結婚式に招待された。夫は仕事でフィリピンにたびたび行くが、私は十五年ぶりだった。マニラ空港からお宅に着くと、ミセス・リンが玄関に立っていた。彼女と私は、病氣で二か月入院した後だった。私は車のドアを開け、駆け寄って彼女の胸に抱きついた。「コンチータ」「えいこ」生きていて会えた喜びが、お互いの体に伝わった。控えめな東洋の女一人なのに……。

やかん

長野県小県郡 花岡京子

ガスコンロの上に、古びたアルミのやかんが乗っている。これは、夫が脱サラをし、自営業に転身したときに、今は亡き義父が買ってくれたものである。

君は、来る日も来る日も、黙々と湯を沸かし、嬉しいこと、苦しいことを黙って聞いてくれた。君とともに過ごした十六年は実にさまざまながあつた。君は物ではあるが、すばらしい戦友のようだ。長い間ありがとう。お勤めご苦労様。

文章を書く理由

東京都新宿区 林 直美

文章を書くこと、自分というものを再発見することがよくある。どうしてこういう気持ちになるのかと不思議に思いつつ、思ったままを書きすすめていくと、次第に本音が見えてくる。本音を確認すると、なぜかほっとして落ち着くのだ。本音には、素直でわがままでけなげで自己中心的で、一生懸命なまげ者の、かわいい自分がそこにいる。本音の確認は自己防衛にもつながる。だから、私は書くことがやめられない。

二十六年ぶりの再会は

東京都世田谷区 太田啓子(44歳)

高校時代を関西のK市で過ごした。当時の友M子から二十六年ぶりに電話があった。近々上京するという。さっそく会う約束をした。ハチ公前に現れた彼女は、学生時代より華やかな雰囲気で、ピンクのジャケットが似合っていた。昔話で盛り上がったあと、彼女が言った。「うち、今エステにはまってんねん」——ホームエステ器の勧誘だった。無邪気に彼女に会いに行つた自分が悲しく、情けなかった。

ま、いつか

大阪府池田市 日比野都(81歳)

ふとした機会に中松ミナ子さんの文の掲載された「わいふ」四十五冊を拝借、彼女の来し方がかなり分かつて、ようまあ忙しい中書かれたと感心、感想を書かずにはいられず長い手紙をサイクリング兼ね、電車で二駅のすし店まで届けるのが楽しみになった。すると折り返し打てばびびく札状が届く。「わいふ」をとることにした私に、一年分もらつて——きかない彼女、ま、お互いしたいようすつか。

誌名に抵抗？

栃木県宇都宮市 真野由美子(38歳)

友人たちに「わいふ」をすすめてみたところ、うち二人から同じ答えが返つてきた。誌名に抵抗がある、というのだ。「妻」と一くりにされるのは嫌だし、英語を平仮名で書いてあるのもなじめないとのこと。私の中には、この誌名は記号としてすでにきつちり取り込まれており、二人の反応は意外であった。この誌名には、創刊当初のどんな思いが込められたのだろうか。

地区運動会

神奈川県藤沢市 白井優子

子ども会の役員で、地区の運動会の子ども参加者の選抜を担当。競技に出たい子は大勢いるのに「勝つために上の学年の子を」という要請。見たためポッチャリタイプのリレーの選手には「あんな子で大丈夫？」の声。「綱引きで一回戦敗退は初めて」と言われたときにはドキッとしたが、あんな子のガンバリで、同点優勝となりホッ。とても疲れた地域レクレーション大会でした。楽しければいいのに……。

こんなことで感激してしまふ私は変？

東京都杉並区 橘 乱花

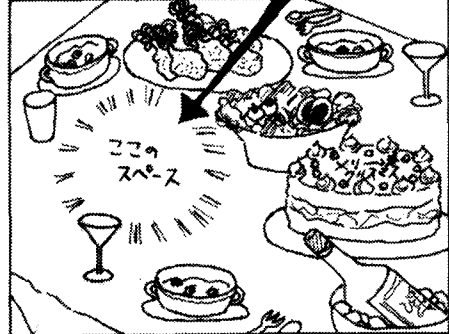
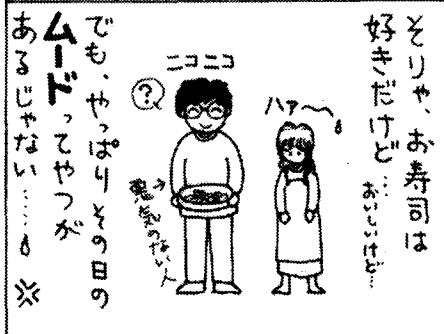
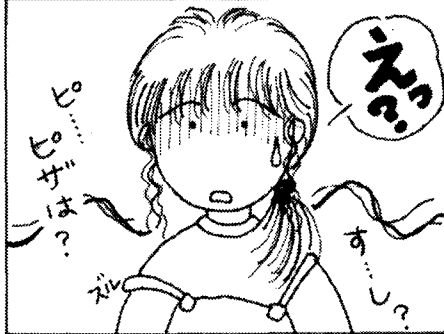
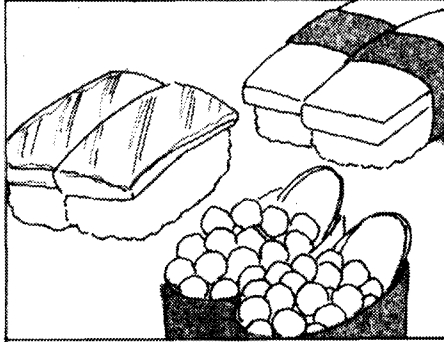
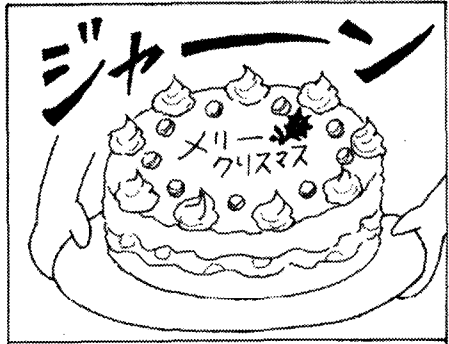
サイレンを鳴らし一台の救急車が走つてきた。患者を思うと人ごとなのに悲しく心が痛んだ。陸橋から見おろす環八で、ハザードを出し道を明け渡す車の、そのあまりに連帯感を持った行動に思わず涙してしまった。法律だからしていると思われる行動なのに。隣の人に何が起ころうとも全く気にしなくなった世の中だが、いつも皆がああ連帯感を持ち行動したらどんなに素晴らしいだろう。

地域人の夫と働き蜂の私

千葉県佐倉市 渡辺早苗

二十年前、共働きの夫が突然仕事を辞めると言い出した。理由は「ゆつくり生活を楽しみたい」だった。そのころ二人の娘は小学生、姑も七十代、確かにセカセカした毎日だった。夫は以来、町会やPTAで着実に友人知人を増やしていった。寡黙な山男タイプの夫が定年まで仕事をしていたら、今のようには地域にとけこむこともなかっただろう。ところが私は、定年が至近距離になつて、何をどうしたらいのかアタフタと焦っているのである。





情報 コーナー

エコロジー・ ファクションショー

地球と私たちのためのエコスタイルフェア。セミナーやマーケット、オーガニックフード、ファクションから考えるエコロジーライフのショーなど。

中・高年が着やすく、入院や車イスでも楽しめる洋服、着物や帯からのリメイクドレスなど。ワンちゃんのファクションも提案します。一緒に考えませんか。

▼日時 十二月七日(土)

午後一時～一時四十五分

▼会場 東京ビックサイト

東ホール五号館前 大ステージ

▼参加費 無料

▼問合せ 三七八六一四二〇九
ハンデイ&シニア企画

菊池裕子

142-0062 品川区小山5-17-23

TEL 三七八六一四二〇九

FAX 三七八一八五二二

地方議員になってみよう と思う方、ありませんか？

政治なんて、大きらい。

大はアメリカのイラク侵攻計画や北朝鮮の日本人拉致というおぞましいできごと、小は日本の脂ぎった政治家たちのゼネコン汚職、ドラマとして見ている分には面白けれど、いやだいやだ、私たちの日常とはまったく無関係と、拒否感を感じてはいらっしやいませんか？

実はそれが諸悪の根源なんで

すよね。

ちゃんとした「ふつうの市民」がそんな態度だから、権力欲の強い人、金に汚い人ばかりが議員になり、そこにぶら下がって甘い汁を吸おうとする人たちが周囲に群がる。

二十年前、初めて国会議員会館に行ったとき、会館の受付ロビーでガヤガヤしている人たちの人相の悪さがショックでした。おかげさというと、日本のなかでこれほど人相の悪い人々があつまっている場所は初めて、とびっくり仰天したものです。

それが十四、五年前から変わってきました。市民派の議員が増えて、そのせいがか人間らしい顔つきの人たちが議員会館に入り入ることがふえてきたのです。

でもまだまだ、ふつうの市民で政治の世界に足を踏み入れる人々は、この日本では絶対的に

少数です。もっと多くのふつうの感覚の市民が、政界に進出しなければ、日本はよくなりません。でしょう？

こんな状況がもどかしくて、一九九三年から、女性のための政治冊子「ファム・ポリテイク」を始めましたが(面白いですよ、読んでください)、いまほんとうに必要なのは、市民感覚を備えた女性が、もっと積極的に議員として政治の世界に進出することなのだと思います。

そこで今回、「希望の輪」という女性の政界進出を後押しするグループの一員として、女性の自治体議員としての進出のお手伝いをしようと思っています。ご一緒に出馬の方法を考えて応援したいのです。

地方議員に出たい方ぜひご連絡ください。FAX 03-3260-4773です。

「わいふ」編集長 田中喜美子

ふえみん

f e m i n

ジェンダーの視点で社会を眺めとく新聞です。

〒150-0001
東京都渋谷区神宮前
3-31-18

☎ 03-3402-3244
03-3402-3238

☎ 03-3401-3453

E-Mail femin@jca.apc.org

URL <http://www.jca.apc.org/femin/>

特別号
2004年12月号

大阪支局

〒530-0041
大阪市北区天神町
3-10-8-404

☎ & ☎ 06-6356-0778

★タブロイド判8ページ/毎月5・15・25日発行
購読料：年間8,000円・半年4,500円(送料込み)

自分で
考える人と
一緒に
考えたい。

femin

「母と子」12月号

(定価500円/送料68円)

〈今月の視点〉 **学校での勉強のここが問題**

「読み書きそろばん教師」の経験から (後)

—学力低下の状況を打開するために— 坂本 安之

《私は獣医師》 動物たちの地震対策 渡 真紀

子どもの権利条約を考える 山田 雅康&編集部

ラベリングの怖さ—「いじめ」と決めつけ、乗り越え課題を見失う

【メディア時代のウロウロ記】 「いい顔」を考える 柳 史子

からっぽの図書館 —「子どもと本」の文化を守るために 猪股 富美子

《日本の学校と親、地域の今》 山本 由美

「学校選択」は親にとって良いこと?

〈中学校教師35年の軌跡から〉

学校教育の創意工夫 石津 實

〈日々の暮らしから〉 自然に生まれるのが愛国心

日高 信一

203 - 0054 東久留米市中央町5-4-8 電話0424-74-9125 母と子社

バ

ザー用の紙袋を作って、新品で私に不要なものを入れている。これが一年経つとかなりの数になる。毎年秋に、何かのバザーに寄付して、身辺をすっきりさせてきた。

今年も近くの病院がホスピスをつくるためのバザーを催すという。もしかしたら将来、お世話になるかもしれないと思い、少々グレードアップした品物を持参した。(山本)

〇〇号以上関わってきて、グラビアでお逢いできた大勢のすばらしい女性たち(数少ないですがすてきな男性も)。いつも元気をいただきました。仕事みよりに尽きます。新しいグラビア「昔の私、今の私」にぜひ短い自分史を書いて、写真といっしょに送ってください。

三〇〇号は田中、和田が登場

します。お二人の昔と今、どんなだったでしょう？ (望月)

テ

レビマンガの「サザエさん」でマスオさんが本棚の本にお札をかくしてあったのをサザエさんにみつかりそうになつて大あわて……という場面を見ていた高二の姪が「どうしてお金を本にはさむの」と聞いて。しつかり貯金をして、何でも望むものがすぐに手に入る姪に、へそくりをどう説明したらいいのだろう。(成井)

久

しぶりに天竜川の支流、行田川に漕ぎに行った。紅葉も始まり水もきれいで楽しく漕いだ。しかし言いたくないが、年々瀬が怖くなってきた。沈すればロールで起き上がればいいだけなのに、気持ちが悪く後ろ向きでうまくできない。過激な舟に替えてから、ますます瀬が怖くなった。そろそろカヌーを楽しむのも限界かな。夫はもの

薬

すごく楽しそうなのに。(水落)
物乱用防止キャンペーン映画「DRUG」を見た。ぐいぐいと引き込まれて、あつという間の二時間だった。

いじめ、家庭問題、若者の粗暴化といった薬物以外の問題も盛り込まれていて、現代の若者の生態がすごくよくわかった。学校での子どもたちへの上映会がなかなか実現しないのは、やっぱり「寝た子を起こすな」ってことなんでしょうか？ (中満)

全

国四千人の会員の皆様は「わいふ」をいづくで読んでいらつしやいますか？ 私はバッグにいつも忍ばせておいて、電車の中でやおら取り出し読み始めます。大きさといい厚さといい重さといい内容といい最適です。それに宣伝にもなるし……ちょっと手前味噌でしょうか？ 誰ですか、トイレに置いてあるとおっしゃる

方は。ご主人様は念入りに読むのかな。(野村)

夫

はいろんなハーブを植えているが、私は近來日本料理趣味になっていて、ちつとも使わない。先週「バジルがたくさんあるぞ！ どうする？」と騒ぎ出し、翻訳の料理本を買ってきた。それを見てバジルソースというのを作ってみたが、これをまぶしたスパゲティはすごくおいしい。多量のバジルが必要で、すべて消費できた。(和田)

笑

える！のコラムにあまり笑えるものがない。それが今回ばかりは二度も大笑いしてしまった。松本とみよさんの好みの男性の話。和田副編集長も昔、チビでハゲでデブの男を好きだったとか。でも今のおつれあいはとび切りノッポでやせっぽち。内容で選ぶから外見はマチマチなんだ、と彼女はいうけど、ホントかな。(田中)

「ファム・ポリテイク」より

不良債権処理をしなければ景気がよくならない、という一点張り、竹中さん小泉さんは張り切っていますが、これはほんとうなのでしょうか。たしかに不良債権が銀行の足かせになっていることは否めないでしょうが、ではその処理がすつかりすんだなら、景気がよくなるものでしょうか。

景気がよくなる、ということは、みんながせつせと働いてお金を稼ぎ、そのお金でモノなりサービスなりを買ってお金が回っていくということですね。ここで最大の問題は、何を買うのか、買いたいものがあるのか、ということです。

外国人が日本の家庭にくると、狭いスペースにモノがぎっしりでびっくり仰天とか。日本人はもうほんとうに必要なものは手に入れてしまったのではないでしょう。そんな人たちがどうしたらもつとモノを買うのか、景気とは基本的に、その意味で需要をかき立てるといふことと連動しているはずですが、エコノミストでこのことを語っている人はほとんどないようです。

NMS研究会より

子どもの「生きる力」を伸ばそう、というところがいつのころからか文部科学省のスローガンみたいになりましたが、じゃ「生きる力」って何？ 子育てについて考えてみると、それは「やる気」なんです。

この「やる気」こそ、あらゆる面で貴重なもの。例えば「食欲」。中学生になればかえば桶に顔をつっこむ馬のように食べまくりませんが、幼児期に「食べない」とか、「遊び食べ」とかで悩むお母さんは少なくありません。だれでもお母さんは、少しでも多く食べさせよう、食べさせようとするものですが、その「親心」こそ「生きる力」の障害となります。

「やる気」は強制されるとそれだけで出てこなくなるもの。食欲においてもそのとおり。もつと食べなさい、まだ足りない、と強制するのではなく、まずおなかが空く状況を作っておくことが必要なのです。あらゆる面においてそれを忘れて「与えすぎる」のが、子どもの「やる気」が失われている元凶ではないでしょうか。

老人ホーム情報センター便り

寝たきりの七十六歳の母親を車椅子に乗せたまま公園に放置した三十九歳の長男が、保護責任者遺棄で逮捕された。

長男は住んでいたアパートの家賃も払えず家を引き払っており、住むところもなかった。「病院から退院してきたばかりの母親を養う余裕がなく、生活に困った」と話しているという。

生活保護を受けるなど、さまざまな公的救済制度はあるのに、活用するすべを知らなかったのだろうか。公的な相談窓口が、気軽に訪れて相談できる体制があればいいのだが、なかなかそうもいかないようだ。

しかし本当に困っているときは、どこかに助けを求めてほしい。母親を捨てるときの気持ちを考えてと切ない。

- 無料電話相談 毎週木曜日
 - 面接相談も受け付けます(有料)
- 電話でご予約ください

〇三三三三五―二八五四

特集テーマ

●三〇一号の特集テーマは、「私の育てられかた」です。

人生、どういう両親のところ生まれれるかが運の分かれ目。子どもは親を選べない！ もっとも親からいわせれば、どんな子どもが生まれるかも大いに運の分かれ目ということでしょうが、やっぱり親と子どもでは、なんと、責

座談会 私も言いたい

●三〇一号の座談会テーマは、「私の更年期障害」です。

この問題をテレビなどで取り上げると、視聴率がとたんに跳ね上がるの事。しかし「わいふ」ではこれまで更年期について、あまり語り合ったことがなかったような気がします。

読者からのご要望があったので、次回はこの問題をとりあげてみることに

任は重いといわれても仕方がありません。親たちにどんなふう育てられたかによって、ある程度まで今日の我々があるわけで、「アダルト・チルドレン」なんて言葉を使わなくとも、昔から親は子どもの幸福をさまざまに左右する人たちだったのです。

その親に、あなたはどんなふう育てられましたか？ 全体としての

いたしました。

更年期障害といっても、その出方は人さまざま。不思議なぐらい千差万別なのですが、全然症状のなかった方、何か重い病気にでもかかったかと思うほどひどい症状が出た方、どうか後輩？の方々のために、出席なさって、ナマ情報を目いっぱい伝えてください。

その時期の症状だけでなく、乗り切

あなたに対する親の姿勢、そしてまたこころ、という節目のあのとき、親はあんないいことをいつてくれたなあ……あんなひどいことをいつてくれたなあ……という思い出、そしてそのせいで、あなたがどんな影響を受けたか。そんなことも含めて書いていただきたいと思ひます。

締切り 二〇〇三年二月十日
字数 四千字前後

ったあとにどんな人生が開けてきたかということも含めて語っていただきたいと思ひます。

とき 二〇〇三年一月十七日(金)
午後二時より

ところ 「わいふ」編集部
電話でお申し込みください。道順もお教えします。

きまり

定期購読を申し込まれている方はどなたも投稿できます。
投稿の前に以下を必ずお読みください。

◆グランド「昔の私・今の私」

なつかしい幼年時代、楽しみも悩みも多かった青春、家庭を築いたころ、そして現在とアルバムに残っているあなたの履歴を載せさせていただきます。写真は十枚程度。たくさんのご応募をお待ちしています。

お申し込みは電話で編集部へ。

◆特集

毎回テーマを設定しています。一四九ページをこらんとください。

◎どのコラムも字数は目安で、多少長くても短くても、内容がよければ掲載します。

一六〇〇字のコラム

◆エッセイスト・クラブ

キマった文章、豊かな内容の随筆を求めています。

◆ズバリ二言

オピニオン、評論のページ。独自の意見を。

◆家族のスケッチ

同居、別居を問わず、あなたの家族についてお書きください。

◆子育てフォーラム

幼児期から思春期まで、精神的にも経済的にも大事業である子育て。そのありのままを書いてみてください。あなたにも読者にも、子育てを振り返る貴重な機会になるでしょう。

◆ワーキングライフ

女性の社会進出が進む中、あなたはどんな仕事をしていますか。職業上の苦労や喜び、職場の問題などをどうぞ。

◆今これに夢中

人生八十年時代。趣味その他、仕事以外に生きがいを持つ方も多はず。あなたは何に夢中ですか。

◆思い出せる記

熟年以上になれば、長い、思い出いっぱい過去があります。夢と消えてしまう来し方を、記録に留めてみましょう。若い読者とのコミュニケーションにもなります。

◆暮らしの風景

人生は、日々の暮らしの小さな喜び、楽しみ、悲しみによって織りなされているものです。心に留まった暮らしの風景を描いてください。

◆フリートーク

どんなテーマでもどうぞ。どのコラムにもあてはまらないテーマの自由なコーナー。

八〇〇字のコラム

◆あなたへスマッシュ

本誌の投稿や記事についての感想、意見を載せます。何号のどの投稿に対するものかを明記して。

◆パソコンワールド

急速に普及しつつあるパソコン。あなたとパソコンはどんな関係でしょうか。体験談を。

◆読んでよかった

読書感想文のコラム。どんなジャンルのものでも結構です。著書・出版社・出版年月日・定価を忘れずに。本文十六字×四十五行

◆笑える！

嫌な話題の多い世の中。思わず笑ってしまう楽しい話を。

二〇〇〇字のコラム

◆私もひとこと

初心者のための、気軽に書ける短いコラム。

投稿の

一四六ページの折り込み原稿用紙で（原稿用紙の周りの余白を切り取らないでください）。

◆情報コーナー

お知らせ、募集、ゆずります、買いますなど。会員は無料。但し業務上の広告の場合にはご相談ください。少額ですが広告料をいたたくことがあります。

◆特別寄稿（詩・短歌・俳句は掲載しません）

字数自由。どのようなジャンルのものでもよく、本誌に適当と思われるものは掲載します。連載ものも結構です。

出版社に紹介することもあり、また当社で自費出版の制作もお引き受けします（詩・短歌・俳句も可）

◆コミック、イラスト、写真

作品の見本をお送りください。本誌に合うものであれば依頼します（薄謝あり）。

投稿に、ご自分のイラストや写真を入れた方は、一緒にお送りください。ことに写真は歓迎します（但し謝礼はなし）

注意

●原稿はお返しできません。

●投稿は一人一篇に限ります。但し「グラビア」「あなたへスマッシュ」「読んでよかった」

「情報コーナー」とはだぶつてもかまいません。

●締め切り

原則として毎月二十五日です。郵送に

限ります。当日必着（メール、ファックスは受け付けません）。

締め切り日を過ぎたものは、次号回しになるだけなので、常時受け付けていることになります。

●誌上匿名、ペンネームは自由。いくつものペンネームを使い分けるのは遠慮ください。

●掲載を希望しないお便りは「私信」と封筒

表に赤で書くこと。

何かの事務連絡を投稿と同封するときは、封筒表に「事務連絡同封」と赤で書くこと。

●ポツになったときは、「お知らせ」が行きますので、理由をお問い合わせくださっても結構です。

●掲載されず、ポツのお知らせも行かない場合は、「取り置き」といつて次号以降に回してあるのです。

◎四〇〇字詰原稿用紙に縦書き。

◎ワープロ打ちも二〇字×二〇行を一枚に。

（あて先）〒162-0062 新宿区市谷加賀町二一五-二六 わいふ編集部

原稿用紙は必ず開いたまま、右上一か所を留める。

ペンネーム・匿名希望の方は明記

コラム名 ペンネーム・匿名 年齢 住所 会員番号 本名 電話番号 タイトル 本文……

なくても可

匿名の方は住所を載せるかどうか明記

ページを明記（場所はどこでもよい）

投稿のきまり

編集集「だより」

●東京で現在の編集部が「わいふ」を引き受けてから実に満二十七年になろうとしています。

最近つくづく、長いことやってきたのだなあという感慨に襲われることがあります。時代も変わり、女性の状況も大きく変わりましたが、この半世紀は基本的に女性の「専業主婦化」の時代ではなかったかと思えます。しかしこれからそれが、基本的に変化する時代がやってくるでしょう。

●約二年間、表紙を飾ってくださいました小林正子さんの切り絵が今回で打ち止

ハガキか電話、ファクスでどうぞ。すぐに、本に郵便振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。限られた書店にしかおいてありませんので、直接お申し込みください。

めとなります。いつも季節感あふれる画面で読者を楽しませてくださいます。

次からはこれまですばらしい挿し絵で「ある英国女性の回想記」の風格を高めてくださった、佐藤瑞江子さんが表紙を受け持つてくださることになりました。小林さんとはまた趣の違う作品で、皆様を楽しませてくださることと思います。

小林さん、佐藤さん始め、イラストレーターのみなさんは、いつも心のこもった(安いギャラにもかかわらず!)イラストで誌面を飾ってください、ほんとうにお礼の言葉もあります。

●三〇〇号からは、グラビアを「昔の

購読中止は……

必ずお申し出ください。誌代が切れる際には、郵便振替用紙を同封しています。送金をお忘れになる方が、誌代が切れても、引き続き送本しています。ご連絡がないと、お送りしてしまいますので、ぜひハガキかお電話を。

私・今の私」として現在と過去の個人の変遷を辿る企画に致します。

これまでのコラムの内容は大幅には変わりませんが、ひとつだけ大きな変更として、「私の意見・あなたの意見」は中止することにいたしました。どうも今いちあまりピリツとした意見が来ないので残念でした。「投稿のきまり」にも多少変更がありますのでお見逃しなく。

●二九八号の一三九ページ、「読んでよかった」のタイトル、「白神とブナと水とけもの道」は「白神の」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

わいふ◆299 (隔月刊)

- 発行日 2003年1月1日
- 編集 わいふ編集部
- 定価 620円(本体590円)
- 年間購読料 4224円(送料別)
- 印刷 平河工業社
- 発行所 (株)グループわいふ
〒162-0062
東京都新宿区市谷加賀町
2-5-26
電話 (03) 3260-4771
FAX (03) 3260-4773
- 郵便振替 00150-3-110430
加入者名 わいふ編集部

N

ew

M

othering

S

ystem

子どもに「生きる力」をつける子育てを！

あんなに大人しかった子が、最近どうしてこんなにいうことを聞かなくなったのか、と悩んでしまう時期、それが第一反抗期というわけです。はやければ一歳半、おそいと二歳ぐらいから始まります。

子育ては
NMS !!



●この時期をうまく乗り切れないと、子どもは暴れん坊になったり、わがままっ子になったり、親をバカにする子になったりします。子どもの性質によってさまざまですが、つぎのようによく乗りきってくださいね。

●まず、どっちでもいいことには口を出さないこと。これは絶対許せない、ということだけに絞って「ダメ」を出すことにしてください。

●やさしく言って聞かしては効果がありません。絶対ダメなことは子どもがやるうとしている瞬間にピシリと手短かに、迫力をもって禁止すること。タイミングがずれるとそれだけ効果が薄れます。そして一度ダメ、といったことは絶対許さないこと。

●泣かれてもかまいません。

泣かれる、ということについておびえないでくださいね。ママは一度ダメ、といったことはゆずらないんだな、と子どもがのみ込めば「言うことを聞く」子になるのです。そのためには筋の通った「ダメ」が大切ですよね。

資料請求は 〒162-0062 東京都新宿区市谷加賀町 2-5-26

NMS研究会へ。 ☎ 03-3260-2509 FAX 03-3235-2854

12 人を助ける犬たち 犬とともに歩む人たち

江澤恭子著 働く犬たちの訓練や働きぶりを通して、人と犬との深い友情を描く。一八〇〇円

③ わたしは盲導犬イエラ

日比野清監
一八〇〇円

④ 輝くわが最晩年

栗石とみ著
二〇〇〇円

⑤ 盲導犬誕生

(福)日本ライトハウス監
一六〇〇円

⑥ ともに生き ともに働く

山口光一著
一八〇〇円

⑦ 夢子がおばあちゃんになるとき

平野隆彰著
一八〇〇円

⑧ 使ってみた介護保険

安宅 温著
一八〇〇円

⑨ 生きがい探し 12の物語

高瀬高明編著
一八〇〇円

■わが国初の近代絵本通史、待望の完結！

学はじめて 日本絵本史 (全3巻)

鳥越信編 一巻／絵入本から画帖・絵ばなしまで
二巻／15年戦争下の絵本
三巻／戦後絵本の歩みと展望

■袖井先生待望の単著！

日本の住まい変わる家族

袖井孝子著 ● 居住福祉から居住文化へ 戦後日本の住まいと家族の変遷をたどりながら、これからの住まいと家族のゆくえを考える。 二〇〇〇円

子育て支援の現在

垣内国光／櫻谷真理子編著 ● 豊かな子育てコミュニティの形成をめざして 実態調査・実践事例に基づき、保育現場や市民活動での実践紹介。 二六〇〇円

ユングとフェミニズム

デマリス・S・ウエア著 村本詔司／中村このゆ訳 ● 解放の元型 女性の心理臨床に新たな地平を拓き、女性解放への新しい指針を提供。 二六〇〇円

起業物語

20人の起業家たち、
それぞれの選択

企業支援ネット監修 町の便利屋さんから年商一億の大企業まで、悩みつつもチャレンジし続ける人々の起業体験をお届けします。 二〇〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1 ※宅配可／価格税別
TEL 075-581-5191/FAX075-581-0296 <http://www.minervashobo.co.jp/>